

なかに長生して。其方等にからきめ見せんより。片時もはやく往生の素懐をとげて。無量壽國の。盡ぬたのしみをきはめんにはしかじ。嗚呼阿彌陀佛といひて。嘆息しければ。橋内これを聞。胸ふたがりて。涙のおつるをこらへ。呵々と打笑ていふやう。母人のたまふ所は。みな思ひ過しの甚だしきといふべし。それがし貧しけれども。手におぼえたる業あり。母人に酒まゐらすほどのあまりなからめや。さばかりそれかしを。たのみなき者とおぼし給ふか。小雪はやく錢をならして聞せまし。母人の心をやすめよと。めくはしすれば。妻心得て。頃日打おきの鑊子を。二つかみ三つかみ。老母の耳ちかくふりならして。如此錢を貯おきぬれば。露ばかりも氣づかひなく。酒をもち給へ。いかで親子の間に。いつはりかざる事のあるべきや。酒の爛なほしてまゐらせんか。妾もけふは一ツたべ申さんなどいひて。すゝむるにぞ。老母やうやく心を安んじて。又ひきうくる盃に。夜半の夢をむすびぬ。誠に是。陳氏再醮を肯ず。劉氏股肉を斬て。姑につかへたるにも相似たる。孝婦なりとて。聞人哀を催しけり。かくて後一日。橋内は大津に行て家にあらず。軒下の日あたりよき處に。筵をしきて。小兒を遊せおき。小雪は裏にありて。老母の肩をさすり居たる折しも。後山の樹林。籟々とひびく音すさまじく聞ゆ。小雪あやしみ。山下風の暴風かあはやくと。年舊大鷲翼をならし。勢猛おろし來て。かの小兒をいかつかみ。雲井遙に飛上る。小雪これを見て。魂を失ひ。あわてまどひて走り出。手をのべ足をつまだて。跳上り飛上り。空をのぞみて身をもたえ。あれよくとさけべども。素隣家なきはなれ家なれば。出たすける人もなく。身に翼をもたざれば。いかんともする事あたはず。唯小兒のさけぶ聲かすかにきこゆるのみ。夕霧ふかくたちかくして。行がた知れず成にけり。小雪はなほ空にむかひ。拳を捏牙を咬て。かへせもどせとよばはりけるが。悲歎にせまりて氣を絶し。其儘そこに倒伏。老母は眼見えざれば。何事も知らず。只小雪がさけぶ聲に驚きて。そこら探りつ。よろめき出けるが。これも物につまづきて。のけさまに。此時橋内何心なくたちかへりて。母も妻もたふれ居たるを見つけ。いそがはしくよりて。まづ母をいだきおんこして見るに。悲しき。親妻をひきおこして見るに。息絶てありければ。大に驚き。孝子の帯とて。貧乏なかに。膝おきたる。醒薬をとり。口中にそゝぎ入て介抱せしかば。しばらくありて甦醒。夫の顔を見るよりも。聲をはなちて號哭。嗚呼おん身の歸り。今一脚おそかりし。我子は驚につかまれて。ゆくへなく成侍り。生れつきもきよらにて。年に似合ぬかしこさを。日ごろから悦て。はへばあゆめと思ひ子の。せたけののびるを。樂に。月日のたつのを指折つ。夢と過ゆく光陰の。すみやかなるも待侘て。おのれが年のつもるも知らず。いくつにならばとしてかくしてと。おひたつさきの事までも。心にはかり是迄は育つるに。思ひかけざる災難にて。玉の様なる稚子を。惡鳥の餌食となすは。いかなる宿世の報そや。おなじ別といひながら。病て死ぬるかなしみは。世界に例もある事なり。蛇瘡癩疹もかるうして。心をやすめしかひもなく。非命に死すは何事ぞ。あれ見玉へ今まで。かしこの筵のうへに。餘念なく遊び居て。笑し顔が目に残り。おぼろげに見ゆるぞかし。再彼をとりもどす。仕かたはなきか我夫と。かへらぬくり言い。つゞけて。天に號地に哭。目もあてられぬ光景なり。橋内は仔細を聞。恩愛切なるかなしみに。身をきぎまるるおもひをなし。あつき涙をおとしつ。聲をもなさて居たりけり。老母は始終の様子を聞。未來を急ぐ老の身は。なかく。にながらへて。千歳とおもふ稚子は思ひかけずも非命に死す。かの惡鳥さばかりに。人肉をのぞむならば。此婆々が肉を。孫のかはりにあたへんものを。かへらぬ事のくちをしや。世界の因果が身ひとつに。あつまり來しかかなしやといひて。聲かるゝばかりに號哭。涙もつきて血をいだすべうぞおもはれける。親夫の歎を聞。小雪はいとゞしのびかねて。つと立あがり。かたはらなる。ふる井のうちに飛いらんとす。橋内いそがはしくおしとゞめ。汝何ゆゑ死んとするぞ。物にくるひやしつる。心をつけよと勵しいふ。小雪苦き息をつき。物にくるひはせざれども。死なねばならぬ理なり。おん身のるすに義理ある兒を。惡鳥にうばはれて。何といひわけあるべきぞ。過ゆきし實の母。草葉の蔭とやらいふ處にて。さぞかし妾をうらみ玉はん。妾もともに冥途に去。賽川原に塔をくむ。陪してな

なかに長生して。其方等にからきめ見せんより。片時もはやく往生の素懐をとげて。無量壽國の。盡ぬたのしみをきはめんにはしかじ。嗚呼阿彌陀佛といひて。嘆息しければ。橋内これを聞。胸ふたがりて。涙のおつるをこらへ。呵々と打笑ていふやう。母人のたまふ所は。みな思ひ過しの甚だしきといふべし。それがし貧しけれども。手におぼえたる業あり。母人に酒まゐらすほどのあまりなからめや。さばかりそれかしを。たのみなき者とおぼし給ふか。小雪はやく錢をならして聞せまし。母人の心をやすめよと。めくはしすれば。妻心得て。頃日打おきの鑊子を。二つかみ三つかみ。老母の耳ちかくふりならして。如此錢を貯おきぬれば。露ばかりも氣づかひなく。酒をもち給へ。いかで親子の間に。いつはりかざる事のあるべきや。酒の爛なほしてまゐらせんか。妾もけふは一ツたべ申さんなどいひて。すゝむるにぞ。老母やうやく心を安んじて。又ひきうくる盃に。夜半の夢をむすびぬ。誠に是。陳氏再醮を肯ず。劉氏股肉を斬て。姑につかへたるにも相似たる。孝婦なりとて。聞人哀を催しけり。かくて後一日。橋内は大津に行て家にあらず。軒下の日あたりよき處に。筵をしきて。小兒を遊せおき。小雪は裏にありて。老母の肩をさすり居たる折しも。後山の樹林。籟々とひびく音すさまじく聞ゆ。小雪あやしみ。山下風の暴風かあはやくと。年舊大鷲翼をならし。勢猛おろし來て。かの小兒をいかつかみ。雲井遙に飛上る。小雪これを見て。魂を失ひ。あわてまどひて走り出。手をのべ足をつまだて。跳上り飛上り。空をのぞみて身をもたえ。あれよくとさけべども。素隣家なきはなれ家なれば。出たすける人もなく。身に翼をもたざれば。いかんともする事あたはず。唯小兒のさけぶ聲かすかにきこゆるのみ。夕霧ふかくたちかくして。行がた知れず成にけり。小雪はなほ空にむかひ。拳を捏牙を咬て。かへせもどせとよばはりけるが。悲歎にせまりて氣を絶し。其儘そこに倒伏。老母は眼見えざれば。何事も知らず。只小雪がさけぶ聲に驚きて。そこら探りつ。よろめき出けるが。これも物につまづきて。のけさまに。此時橋内何心なくたちかへりて。母も妻もたふれ居たるを見つけ。いそがはしくよりて。まづ母をいだきおんこして見るに。悲しき。親妻をひきおこして見るに。息絶てありければ。大に驚き。孝子の帯とて。貧乏なかに。膝おきたる。醒薬をとり。口中にそゝぎ入て介抱せしかば。しばらくありて甦醒。夫の顔を見るよりも。聲をはなちて號哭。嗚呼おん身の歸り。今一脚おそかりし。我子は驚につかまれて。ゆくへなく成侍り。生れつきもきよらにて。年に似合ぬかしこさを。日ごろから悦て。はへばあゆめと思ひ子の。せたけののびるを。樂に。月日のたつのを指折つ。夢と過ゆく光陰の。すみやかなるも待侘て。おのれが年のつもるも知らず。いくつにならばとしてかくしてと。おひたつさきの事までも。心にはかり是迄は育つるに。思ひかけざる災難にて。玉の様なる稚子を。惡鳥の餌食となすは。いかなる宿世の報そや。おなじ別といひながら。病て死ぬるかなしみは。世界に例もある事なり。蛇瘡癩疹もかるうして。心をやすめしかひもなく。非命に死すは何事ぞ。あれ見玉へ今まで。かしこの筵のうへに。餘念なく遊び居て。笑し顔が目に残り。おぼろげに見ゆるぞかし。再彼をとりもどす。仕かたはなきか我夫と。かへらぬくり言い。つゞけて。天に號地に哭。目もあてられぬ光景なり。橋内は仔細を聞。恩愛切なるかなしみに。身をきぎまるるおもひをなし。あつき涙をおとしつ。聲をもなさて居たりけり。老母は始終の様子を聞。未來を急ぐ老の身は。なかく。にながらへて。千歳とおもふ稚子は思ひかけずも非命に死す。かの惡鳥さばかりに。人肉をのぞむならば。此婆々が肉を。孫のかはりにあたへんものを。かへらぬ事のくちをしや。世界の因果が身ひとつに。あつまり來しかかなしやといひて。聲かるゝばかりに號哭。涙もつきて血をいだすべうぞおもはれける。親夫の歎を聞。小雪はいとゞしのびかねて。つと立あがり。かたはらなる。ふる井のうちに飛いらんとす。橋内いそがはしくおしとゞめ。汝何ゆゑ死んとするぞ。物にくるひやしつる。心をつけよと勵しいふ。小雪苦き息をつき。物にくるひはせざれども。死なねばならぬ理なり。おん身のるすに義理ある兒を。惡鳥にうばはれて。何といひわけあるべきぞ。過ゆきし實の母。草葉の蔭とやらいふ處にて。さぞかし妾をうらみ玉はん。妾もともに冥途に去。賽川原に塔をくむ。陪してな

りとせめて其。いひわけなし侍らん。まうしおくことは是のみぞ。いとまたまへと云捨て。再井に立よるを。橋内しかと抱とめ。其方がいふ處。理なきにはあらざれども。遠き慮なきに似たり。權且心をしづめて。我いふ所を聞よかし。唐の孝子は。母を養ふ其爲に。子を土中にうづめんとて。かへりて寶を得たりと聞。いづれの國も人の親の心はおなじ心なり。不便にはおもへども。母人の爲に。一口を減せしと思ひとれば。しかばかり歎べきにあらず。汝もし死うせなば。なりはひにいとまなき。我身のみにて。母の介抱。いかでか心のとどくべき。そこに心はつかざるか。汝死すとも子はもどらず。母人に對しては。これいみじき不孝ぞかし。こゝをよくわきまへよ。心得しかいかにとて。ことを盡してきこゆるにぞ。小雪はやうやく死をとどまり。涙にむせびて打伏ぬ。夫婦ふたりが心のうち。おもひやられて哀なり。かくて次の日。橋内。悪鳥のすみかをたづね。せめて小兒の生死を見とゞけんと。朝まだきに家を出て。あたり近き山に上り。普探索れども。ゆくへ知れず。なほ日々に出てほど遠き山々まで。たづぬる事已に五日。比良嶽の奥ふかくわけ入けるが。鹿の通ふ徑路をみつけ。たゞ走りにはしりて。とある谷間にめぐり出。偶谷底を見れば。皓々たる白氣たちのぼりて。こゝかしこに光りあり。あやしみつゝ。巖にとりつきて彼處に下り。よくよく見れば。かの光りは是水晶石英のたぐひにて。しかもよのつねの物にあらず。琢磨をへたる玉の如し。橋内おもへらく。我貧うして母を養ふに事たらず。しかるに今こゝに迷ひ來て。此玉石を見出したるは。正是皇天のたまものなり。これをとらば好價を得べしと。よろこびつゝ。天をあふぎて九拜し。路をまじるしの枝折をなしおきて。家に歸り。おのが業なれば。おもふまゝに。玉石をとる鐵器を造りて。再又那裡にいたり。彼物をきりとりて。市にはこびて賣ければ。そこばくの價を得たり。此日を始として。折々これをとつて賣けるにぞ。心のままに母を養ひ。夫婦よろこぶこと限りなし。さて其頃堅田に。内海蝦庵といひて。眼療に妙を得たる醫師ありけるが。家に種々の奇方を傳へ。能五輪八廓を論じて。療治を施すに。目疾内外の障七十二症は更なり。いかなる難症といへども。治する事。海なり。しかりといへども。彼生得不仁にして。眞實をほしいまゝにし。諸物の金銀をむさばる事。分に過。いかほどにもとむるとも。貧人には藥をあたへず。かるがゆゑに。これを憎み識る人もおほかりけり。されど其術におきては。實に奇妙の驗あれば。謝物に乏からぬ輩は。尊敬せずといふことなし。橋内日ごろ。彼に母の眼療をこはんとおもひ居けるが。彼貧家には藥をあたへざるゆゑに。これまではむなしく過ぬ。しかるに頃日玉石を得て。謝物とゞのひたれば。此時こそと。且謝物を前に贈て。療治を乞つるに。果して驗あり。三十餘日を過て。双眼まつたくあきらかに成り。雨過雲散て皎々たる明月の。あらはれ出たるごとくになりければ。ますくよろこびにたへざりけり。誠に是橋内夫婦が孝順。天に通じて。此福をあたへ玉ふものなるべしと。こゝろある人はうらやみけるとぞ

第二段 石の窰堵婆に血つくる事

去程に時光流水のごとく。金烏玉兔の足はやくはしりて。已に九年を過。永亨五年にぞいたりける。爰に又肥後國球磨郡に。市ノ頭といふ處ありけり。此地は是海にちかく。前には球磨川といふ大河あり。後には重山ならび立て。屏風をひきめぐらしたるごとく。其裏につままれたる平地にて。別の一世界なり。抑球磨川は。九州第一の大河にして。其源遠く。那須。椎葉山。五箇村邊より出て。球磨郡の眞中をつらぬき。四十里ばかり流れて。すゑは海におち。世に希有の急流なり。市ノ頭は。東西の兩村合せて。家數千軒もあるべし。農家漁家軒をまじへ。盡く河にそひて家をつくる。此地京城をはなること遠く。ことに其頃は諸國おだやかならざる時なれば。おのづから王化のおよぶことまれにして。村中の人民志正しからず。悪人はおほく善人はまれなり。しかるに此東村に。只一個善を好む百姓ありて。其名を綱千兵衛と云。山林田庄あまたもちて。家頗る富ぬ。此人常に慈悲をもつばらとして。人

の危難を救。貧苦をたすくるに。財寶ををします。あけくれ陰徳をつむ事をたのしみとす。妻も又生れ付温柔にして。夫とともによく善をおこなふ。兵衛已に年七十に近しいへども。只一個の男子あるのみ。名を皎二郎とよびて。ことし十六歳にぞいたりける。世にまれなる。美少年なるのみにあらず。聰明伶俐人に越。富家に養ふといへども。露ばかりも驕奢心なく。朝夕よく父母に仕へて。孝を盡しぬれば。兩親めていつくしむ事限りなく。掌上の珠よりもなほまされりとす。召仕ふ男女もおほかりけるが。兵衛夫婦。よく内外ををさむるゆゑに。平日すこしの争もある事なし。此綱干は原よしある武夫のすゑなるゆゑに。今農民なりといへども。常に兩刀を帯し。弓箭槍棒をおきて。賊をふせぐのそなへとす。扱一日行脚の僧綱干が門にたちて。拙僧はこれ諸國遍參の沙門なるが。頃日當國にいたり。普此近郷を勸化す。しかるに此家のあるじ。善を好み布施をなし。よく佛を敬ひ玉ふと聞。相まみえんため。わざわざまうで來つ。此よしきこえつぎたまはれと云。家僕これを聞て裏にいり。あるじにしかく告ければ。兵衛いそがはしく出來り。且一禮をのべて。彼僧の模様を見るに。眉には八字の霜をおき。雪をあざむく髭。長くたれ顔はつややかに光りて。童の面の如く。童顔鶴髪といへるたぐひなり。鈍色の麻の破れたる衣を着し。おなじ色のきたなげなる袈裟をかけて。錫杖鍵銘をとり。款然として立たり。仙風道骨自然の姿。凡僧とは見えざりけり。兵衛大に尊敬して。乃ちみちびきて座敷に通し。上座にすゑて。恭いひけるは。上人かゝる草屋をいとひ玉はず。わざわざ訪玉ふに。小人これを知らずして。出てむかへ申さず。甚だ敬心を失ひ侍り。ねがはくは罪をゆるさせ玉へ。彼僧云。拙僧禮儀を知らず。率爾に來りて相見を乞つるに。かへりてねんごろなる言葉にあづかるは。誠に是のぞみに過たりといひて。少しも心へだつるけはひなければ。兵衛大によるこび。やがて家僕に命じて。ゆたかに齋をまうけ。心を盡したるもてなしなり。齋をはりて彼僧いひけるは。拙僧おん身の浅からぬ供養をうけて。悦びにたへず。福田は海のごとく。恩徳は天とひとしかるべし。けふしもこゝに來つるは。一鉢の齋を乞んためとはいひながら。一

少にはこれ。一ふしの事を告んとおもふがゆゑなり。兵衛云。上人何事か告玉ふ。もし拙僧をもとめ。齋を乞玉ふとも。あへていなび申すまじ。何にもあれ。心をおかず命られ候へ。彼僧云。おん身の好心を見るにたれり。拙僧が告んとおもふ事。布施齋糧のたぐひにあらず。只おん身の心得べき事なり。其一事と云は。餘の儀にあらず。遠からずして當村に。洪水の災あり。いそぎ船をそなへ置て。走路の用意し玉へ。拙僧實は此事を告知らさん。もつばらに。來つるといふ。兵衛これを聞て大に驚き。露ばかりも疑はず。其洪水いづれの時にかいたり申さんや。とても

の事にくはしくしめし玉へといふ。彼僧云。西村のはづれに建る。石の大塚堵婆に。血を流す事あらば。其時かならず洪水あらん。よく心をつけて。見はづし玉ふ事なけれ。兵衛ますく驚て云。上人のしめしよく心に記しておこたり申すまじ。ねがはくはその災を村中に徇かかせて。ともに難をのがれたくおもひ候。小人が家内のみ災をさけて。村中の者を見殺しにいたすは。無慈悲の事に候はずや。彼僧頭をふりて云。其儀はよろしからず。此村中の人民は。都て罪惡の輩なるゆゑに。皇天此災をくだし玉ひて。惡民を亡し玉ふ。たとひ又彼等に此事を徇つぐるとも。疑ひおほき輩なれば。かならず信すべからず。かへりて天機をもらして。天罰をかうふるべし。おん身は日ごろ陰徳をつむ善人にて。正直の人なれば。よく拙僧がことばを信じ玉ふ。災をまぬかれん事疑ひなし。拙僧今四句の偈を寫てあたふべし。此偈をよく心に銘じて。忘れ玉ふ事なけれ。もしいさゝかもたがふ時は。後日に大災を負べし。必忘却すべからずといひて。乃ち筆硯を乞てこれを寫。其偈に曰。

天行洪水浪滔々
遇利物相援報亦饒
只有二人來一顧問
夙恩到底敵讐招

かきをはりてあたふ。兵衛これを讀といへども。その意を解せず。彼僧。時いたらばおのづから知るべしといひて。仔細をいはず。兵衛これををさめて云。上人を見奉るに。髭は白しといへども。面は童子の如し。御年はいくばくに

て。いづれの郷に住玉ひ。御名は何とまうし候や。彼僧云。いたづらに年老ぬれども。齡のいくばくなるを知らず。うかべる雲。ながるゝ水。いづくにかとどまらん。大道は強て名づくべからず。名だになき道心なりと答へければ。兵衛これを聞。果して是有徳の聖僧なりと。敬心いやまさり。飴磨の搗染二端。高津木綿三端。白銀五枚をとり出して。布施とし。恭さゝげて恩を謝す。彼僧莞爾と打ゑみて。今もいふごとく。一所不住の身なれば。たとひ是等の物ありとも。かくしおくべき所なし。厚志のほどは。まうしうけたるにおなじといひて。かたく辭してうけず。はいとま申すべしといひつゝ。つひに袖を拂ひて出去けり。かくて兵衛は。俄に船番匠をやとひ。夜を日に續て五艘の船をつくらしむ。人皆その意をしらず。何の爲にいそがはしく。船をつくるやといふかりければ。船番匠等かたりて云。頃日ひとりの遍參の僧。此家に来り。近日當地に洪水の災あるよしを告しゆゑに。此家のぬし。その難を避んため。かやうに夜をかけて船をつくらすなりといふ。これを聞者。兵衛は賣僧の誣言を信じて。不用の船をつくり。おほくの金銀を失ふ。愚なる者かなといひて。譏笑ざるはなかりけり。兵衛また。庖厨にて召仕ふ老嫗をよび出して。汝は別事を顧ず。毎日西村にゆき。石の窠堵婆をうかゞひ見て。もし血のいづる事あらば。はやく告知らすべし。必ずおこたる事なかれといひつくる。老嫗はこれより。その事をおのれがやくにして。毎日西村にいたりて窠堵婆をうかゞふ。かくしつゝも數日を過ければ。かの老嫗がふるまひを見て。あやしむものおほかりけり。扱その西村のはづれに。又六といふ獨戶住けるが。一日かの老嫗杖にすがりて例のごとく。窠堵婆のもとに來り。をがむかと思ればさはなくして。唯うちめぐりて仔細にうかゞひ。すなはち歸らんとするを。又六ひきとめて。おん身こゝに來り。只窠堵婆を見めぐるをことにして歸るは。あやしき業なれ。その故知らせ候へといふ。老嫗云。我あるじ人に語るなどいはれしが。おん身にのみひそかに語るべし。此窠堵婆に血のながるゝ時。洪水の災あるべしと。前日遍參の僧。我主人に告られしにより。毎日これをうかゞひ。もし血をながさば。はやく水難をのがれんと。主人おのれに申付て。かくはものし憐なり。あなかしこ人にかたり玉ふなといひて。歸りければ。又六おぼえず呼々と打笑。今の世にもなほかくのごとき痴人あり。頃日早する事數日。何の洪水かあらん。又石の窠堵婆。いかでか血を出す道理あらんや。我彼奴をあざむきて。一場の大笑をもよほすべしとひとりごち。次の日朝まだきに。野猪の血をとりて。窠堵婆の正面にそゞぎおき。老嫗が來るを待居たり。此日又老嫗來り。窠堵婆に血のながれたるを。一目見るよりも。忽ち色を變じ。たふれまどひつゝ走歸りぬ。又六はかたはらにかくれ居てこれを窺。手を打てぞ笑ける。兵衛は老嫗が色をかへて歸るを見て。汝かくあわてゝ歸りたるは。窠堵婆に血がながれたるといふ。老嫗息もつきあへず。主人はやく走り玉へ。窠堵婆に血をながしぬ。その災急ならんといひて。そこら立まどひければ。兵衛とるものもとりあへず。あわてふためきつゝ。彼五艘の船に家財を残らずはこびのせ。一家の男女をたづさへて乗うつり。すはといはゞのがれゆかんと心をくぼりて待にけり。此時はこれ六月の天氣にて。太陽人を蒸がごとくなれば。洪水はさておき。一點の雨氣もなかりけるに。その日の午過る頃。乾の方に扇ばかりの黒雲出るを見えしが。忽四方にしきみちて。墨をぬりたるやうになりて。大雨車軸を流して。一晝夜やまず。東しらむ頃。河水大に溢て。村中につき入しかば。後山にのがれ行べきいとまもなく。手をひるがへす間に。東西兩村の人民居屋。盡く流れ失ぬ。此災にあふもの。親の行方もしらず。子をもうしなひ。家の雜具もしらずなどして。おめきさけびあふ聲。五逆の亡者葬頭河に溺。十惡の罪人奈河津に苦にひとしく。叫喚。大叫喚の光景。目の前にあるが如し。高波大山のくづるゝが如く溢て。なりどよむ音雷にひとしく。天地も此時にほるぶるか。魂きゆるばかりなり。山を包陵に襄。蕩々として四方一面にしらみわたり。海の面とことなる事なし。かゝるなかにもわきて哀にきこえしは。稚子を懷にいだきたる女。水にすこしあらはれたる。樹木の梢にとりつき居たるが。蛇。いくつとなく流れよりて。木にはひのぼりまどひつくと。女かた手してはらひのけつゝ。懷の子をいとひて。くるしげにうめく。それが夫は。家のふき板をかきあげてむ

ねにのぼり。彼方を見やるに。今も流さるゝかと危けれど。遙なればかしこに行て救べき便なく。只こなたより聲かけて。其枝はなす事なけれ。しかととりつき居よとよばはる間もなく。大波ひとつうちかけて。人も木も流れうせぬ。かの夫が心のうち。いかばかりかなしからん。やがて水に飛入て。これもともに失たりとぞ。又ある家にて。日もおほきに。此災あらん日死したる人あり。棺にをさめて。あすは野邊のおくりせんと。親族ともつどひて悲み居たる折しも。此災あり。こはいかゞせんといふほどこそあれ。水たゞまさりにまさりて。天井までつきぬ。家内あるかぎり天井にのぼり。桁梁にとりつきてさけぶ。かゝるほどに。此家ゆるくとゆるぎて。つひに柱の根ぬけて。おしながされ。棺も人もゆくかたをしらずとぞ。此たぐひの哀なる事。しるしつくすべうもあらず。扱此時兵衛が船どもは。水にしたがひてとほく流れ。すこしよどみある所に出けるが。山きしのくづれたる下に。一隻の猿子狼をいだきながら。水に溺れて流れるを。兵衛見つけて家僕に命じ。竹の竿を以て猿をとりつかしめ。船にむかへて食をあたへ。山の上にはなしければ。子猿を背におひて。うれしげににげ行けり。又しばらく船をやる所に。一株の柳根ながらぬけて流れ来る。そのうへに鴉の巢ありて。あらたに兒を育たるが。みな水に羽毛をぬらし。敢て飛ことあたはず。兵衛又家童に命て。鴉を盡く捉へしめ。船におきて羽を乾し。餌をあたへたりければ。皆よく飛て失にけり。かゝる時しも。一個の若男。柚の木にとりつきて。身上を棘にやぶられ。朱になりて木とともに流れ来り。此船を見つけて。一命を救給へとよばはりければ。兵衛いそがしく。家僕に命て。救あげんとす。妻おしとめて。我夫かの道人のさづけ玉ひし。偶とやらんをはや忘れ給ふか。人に遇とも顧問ことなかれとしめし玉はずやといふ。兵衛云。我今鳥獸をすらすくひたるに。いかでか同體の人をたすげざらん。すこしく偶の意にそむくといへども。人の危難をすくひて。あしきことはよもあらじ。汝おほくいふことなかれといひて。つひに此人をたすけあげ。乾たる衣服を着せかへ。薬をあたへなどしていたわりけり。次の日にいたりて。洪水やうやくをさまりければ。兵衛船を濱のか



たへやりて見るに。目もあてられず。波に打破れたる家ども。算を打ちらせるごとく。汀にうちよせられたる。男女牛馬のたぐひ數もしらず。其うちには日ごろしたしく交りたる者もあまたあれば。胸ふがたり涙に目もくれながら。陸に上りて見れば。一面の白河原になりて。あとだになし。おほかりし在家。貯おきたる物。ときのまにうせて。塵ばかりの物も残らず。あはれはかなき光景なり。只兵衛が家のみ。水にひたりて所々損じたりといへども。流れずしてありければ。大によるこび。いそぎ番匠をやとひて。修理をくはへ。もとのごとくにすまひけり。此災によりて溺死者。五千餘人。命を全して歸る者。わづかに十が一二ときこゆ。是此村中の人民。日ごろ悪を好しゆゑに。天此災を下して。盡くほろぼし玉ふもの敷。傘堵婆に血をそゞぎたるは。原又六がたはふれといへども。乃ち是天數のきはまりならん。彼傘堵婆は。往古當國八代の産。舍利尼といふ有徳の尼公。みづから經文をしるして。こゝに建おかれたる物なるが。村民これまでなほざりに見しを。此度の洪水。ちびきのいわほもおしながすばかりの勢ひなるに。彼傘堵婆のみ依然として残りたれば。皆人おどろき。奇異のおもひをなして。これより血つきの傘堵婆となづけて。大に尊敬しけるとぞ。かくて兵衛は。かのすくひたる所の若人にむかひ。我いまだ汝を見しらず。さだめて西村の者ならん。何者ぞくはしく告よ。ゆくべき所あらばおくりつかはさんといふ。かの者いふやう。小生は西村のはづれに住。獺戸又六といふ者の子にて。名を犬太郎とまうす。父母は目の前に溺死し。家も流れうせたれば。かへるべき所なしといふ。兵衛不便におもひ。人を西村につかはして見せしむるに。あとだになし。兵衛犬太郎が年齢をとふに。十九歳とこたふ。兵衛かさねて云ふ。父母にはなれ家を失ひて。立よるかげなき若者を。いかてか情なくおひやるべき。汝心をかたむけて我にしたがはせ。ゆくすゑよきはからひてん。氣づかふ事なかれといひて。つひに家にとどめて居らしめけり。後に人の語るをきけば。播州書寫山の山ふかく。童顏鶴髮の道人あり。折々金鉢をならして。峰より峰にうつる。紫別嶺。落葉松。松葉楓。など。まれに遇事あり。能過去の因果を示し。未前の禍福を知る。これを聞傳る人。道人をがまんとして。書寫山にのぼる者おほし。人其名をしらざれば。唯金鉢道人とよぶ。彼水鏡を告し。聖賢は。此道人なるべしといふ。其頃此噂遠近に傳へて。しばらくもやまざりけり。かくて其年もほどなく暮行て。新年をむかへけるが。一日。兵衛。彼犬太郎をそばかくよびていふやう。聞説一子出家すれば。九族天堂にいたるとか。我年ごろ佛に誓奉りて。一子を出家いたさすべき。願望ありといへども。子といふは唯。酸二郎ひとりあるのみなれば。彼を出家せしむれば。先祖の血脈を失ひ。かへりて不孝となる。今ひとり男子をまうけなば。必ず出家さすべしとおもひつゝ。これまではすごしつるが。我已に七十にちかければ。別子をまうくべきいはれなし。唯是を生涯のうらみとす。しかるにおもひがけず。汝を得たるはさいはひなり。汝もし出家の志あらば。我望をとぐべし。汝が父は世にある時。よからぬなりはひをして。あまた鳥獸の命をとり。罪業をつむ事。常の人にまされり。しかのみならず。非命の溺死をなしたれば。冥途の苦思も。さぞとおもひやらるゝぞかし。汝もし出家とならば。父母の追福此うへかある。且は俗家にありて。からき世につかはれんより。のち一寺のぬしともなり。生涯を安くをはらんにはしかじ。我宿願をとぐるのみならず。汝が爲にもまた良計ならずやと。こまやかにしめしければ。犬太郎これを聞て。にもかくにも。よきかたにはからひ玉はれかしと。いと安くうけがひければ。兵衛大に喜。汝速に心を決しぬるは。偏是佛縁のふかきゆゑなり。いさぎよしといひて。俄に人を市に走らせ。まづ。僧鞋。僧衣。僧帽。袈裟。拜具のたぐひをととのへしむ。擬八代の井手の里なる。拈華寺といふ寺につかはし。吉日をえらびて。髪をおろさせければ。和尚かれに玄海といふ法名をあたへ。寺中に住しめて。おこたらず沙彌の作業を教られけり。此時彼が年已に二十歳なり。彼を出家せしむる費おほしといへども。兵衛すこしもこれをします。此後も。折々雑費銀をおくり。暑寒の衣服に心をつけて。いさゝか鹿略はなかりけり。誠に是犬太郎が爲には。天地とひとしき恩人なり。

優曇華物語 卷之一終

江戸 山東軒 主人編

第三段 望月皎二郎雨を避て美女に遇事

抑彼網干兵衛が父は。望月六郎といひ。脇屋右衛門佐義治公に仕へて。烈々たる武士なり。去る應安元年三月。上野國沼田の戦に。脇屋の軍利を失ひ。義治公出羽國へおち玉ふ。望月は亂軍のうちに敵あまたうちとり。花々しく討死をなして。武勇のほまれを残したり。兵衛は其刻年わづかに五歳。母もほどなく身まかりて誰養ふものなかりしが。情ある人に育てられて。民間に人となり。つひに此處にうつり住て農夫となり。本姓をかくして網干兵衛と名告。漸々に家富けるが。父母追福の爲め。常に佛を供養し。慈悲ある人に育てられたるを忘れず。おのれも又人を救事を好みけるとぞ。扱兵衛日ごろおもひけるは。今諸國播亂の時に乘じ。武勇才智ある者は匹夫よりおこりて。國郡の主となれるすらあり。況我家は累世武勇のほまれあり。我一代は民間にくちはつるとも。せめて兒子は世に出し。よき君に仕へさせて。再び家名をあらはさばやと。これも又日ごろの宿願にて。其心支度をなし。熊本に通はせて。武藝文學を學せけるが。いまだよき師を得ず。ひさしくこれを愁ひ。京にのぼせてよき師をえらびて。學せんとおもひつゝも。幼年なれば。これまではむなしく過ぬ。しかるにことしはや十七歳になりぬれば。しきりに心いそがはしくなりて。妻にも皎二郎にも其志を談。急に元服させ。京上りさせんとて。かたはらには元服の儀式をまうけ。かたはらには行装をととのへしめ。吉日をえらびて。門出の祝酒を酌ければ。家内こぞりて皎二郎をへり。時に兵衛皎二郎を佛堂にとまらひ。先祖の位牌ををがましめ。一腰の刀をとり出していふやう。是は先祖傳來の寶刀なり。彼經が靈劍に比して。壹斬となづく。又六郎殿討死せられし刻。かたみに残されし一腰なるが。今汝につかはす間。これをおびて發足すべし。よろづの事よく務よ。必ず怠るべからずと。こまやかにしめして刀をあたへければ。皎二郎おしいたゞき。親人のおふせよく心に銘じて忘れ候まじ。それがしが事は靈ばかりも氣づかひ給はず。只よく御老體を養て。恙なくおはせなどいひて。親子ともすゞろに心ほそくおぼえて。涙さしぐみけり。これそ一世のわかれとはいかてかおもひはかるべき。彼刀もつひには留遺物となれり。かくて皎二郎は家僕一人をぐし。故郷の雲を腦後にかへりみ。客路の霧を眼前にのぞみて。路をいそぐほどに。日あらずして京都にいたりしるべのかたに寄宿して。よき師をたづねけるに。幸其頃武藝の達人とよばれたる。滑良兵庫助。しばらく京にあり。又文學にほまれ高き。官務惟治。いまだ周防にうつらざる前なれば。此兩人を師として。もつばら文武を學びけり。それは扱おき。彼犬太郎は。法名を玄海と稱し。拈華寺に住て。半年ばかりは讀經念佛して。出家の業をつとめけるが。生得の悪性漸々にあらはれて。氣づまりなる作業をさらひ。近き村々の悪輩等とまじはり。ほしいまゝに遊興して酒肉を貪り。又は衰彦道がひとゝなりをしたひ。やゝもすれば爭論をひき出して。打合こと度々なり。彼幼より蕨戸の業を學び。箭をはなち。槍をつかひ。嶮岨をはしり。猛獸を手どりにするのたくひ。無双の大力にて。身材人にすぐれて高く。大膽不敵の者なれば。悪輩等もおそれずといふことなし。師の坊しばし異見をくはふるといへども。もちあらず。悪業日々にまさりければ。やむことを得ず。網干が方へもどさんとおもはれけるを。彼はやく囁しけるにや。一夜寺をぬけいでて。いづくともなく逃失けり。兵衛此よしを聞。彼奴が悪性を知らず出家させしは。我一生の誤なりとて。大に後悔す。玄海寺にある事わづかに兩年。出奔して後はいづくにありや。その噂もきかずとなん。かくて時光過やすく。日月梭の如くにめぐり。皎二郎京都を出てより。夢の間にはや三年を経て。ことし二十歳にぞいたりける。彼素心

5

思靈巧うへに。精力を盡して藝術を學びければ。わづかの間に熟練し。誰ならぶものもなかりける。しかるに皎二郎ことしの水無月。鞍馬の竹切をがまんとて。朝まだきに家を出。獨歩してかしこに去。法會の儀式を能みて後。山中の風景を遊覽して。權鬘結をなくさめぬ。深山おろしの夢さめてとよみ給ひし。涙の瀧をくみて。折からの暑を忘れ。ちかくてとほきものにかぞへたる。九折を過て。汗に衣をうるほす。傳へきく女鬼を殺して。左義長谷の恆例を殘し。兩蛇を伏して。關伽井の水の奇特をあらはすと。空也の御所壇は。本堂の乾にあり。在衛が進士間は。佛殿の巽にあり。由木の社。八所明神。藥師堂。觀音院。車坂。脊較石。僧正谷は。牛若丸劍法琢磨の所なり。すべて此邊は岩洞よのつねならず。石面劍を以て斬が如く。其うちに。挑石。陰石。擲石。足駄石。水入石等の奇石あり。皎二郎残りなく一覽し。それより木船の社にまうて。龍王の瀧のほとりに立やすらひける折しも。青天俄にかきくも。雷とどろき。凍雨さとふりかゝりければ。傍なる小社に入て雨やどりす。時しもあてやかなる上臈。袖がきおほひ。裾かゝげてはしり來しが。電嘩々と光。雷崇々とひびくにおそれて。身をちよめつゝ。こなたの社にはしり入。はちも人目もいとほず。皎二郎が膝にひしととりつきて。打わなゝきつゝ伏たり。其あとより腰元とおぼしき女兩人はしり來て。彼上臈にむかひ。おそろく守り居たり。かくてしばらく時うつり。雷をさまり雨はれて。青天になりければ。彼上臈やうやく人ごちつきたるにやふと邊なる皎二郎を見たるが。忽おもてをさとあかめてかたはらにのき。長袂を顔におほひてはぢらひたる姿。此世の人とはおもはれず。年のころほひは。二八ばかりとおぼしく。芙蓉の睨。楊柳の貌。たをやかにして。かつらの肩。みどりの髪。あざやかなり。名もしらぬ織物の。蟬の羽のやうなる薄衣に。とめきのかほれるも又たぐひなし。皎二郎これを見て。これはそも。天津乙女のあまくだりて。人間にあそぶにや。龍の宮の乙姫の海底よりいててなぐさむにや。誠に人の種ならずとおぼえて。魂とび心うかれ。自。おさへともむべきおもひなくめてまどひぬ。上臈も目に秋の波をたよへて。ひそかに皎二郎を見やるに。皎二郎

は眼。されたる薄や衣なるらんとよみし。櫻島の洗風あらきわたりに甞たる。田舎人なれど。しばらく京に住て。都人のみやびを見ならひ。驕奢は好すといへども。おのづから都の風俗にうつりて。花車風流なるうへに。生れつきて又なき美男なれば。世にはかゝる人もありけるよとあからめせず。魂身をあくがれ出て。こゝの御手洗川の盪ともなりなんこゝちす。互にいひ出すべきことの葉もなくためらひけるが。皎二郎いふやう見奉れば並々ならぬ御方とおぼえ侍り。今の雷鳴にさぞかしなやみ給ひつらん。おんこゝちはあしからずやなど情ある詞に。上臈嬉げに打ゑみて。何時かはしり侍らねど。御蔭にて心づよくおぼえ侍り。あまりのこはさに何事もわきまへず。さきほどよりの無禮の罪。ゆるさせ給へといとはづかしげにいふ。皎二郎打聞て。あつきことばをさむるにゆゑなし。一樹のかけ一河のながれも他生の縁とかまうせば。何かはくるしかるべき。心ゆりてしばらく憩給へといひて。胸のうちの思ひの波はあふるゝばかりなれど。さすがいづくの人ともとひかねて。ことばすげなし。腰元兩人も皎二郎に一禮のべて。扱もおそろしき雷にてありし。姫さまつかへなどおこり給はずやといひて。來しかたを見やりて。人まちげなる折しも。六十ばかりの侍。守役の從者とおぼしきが。轎子かゝせてはしり來り。上臈にむかひ腰かゝめて云。かしこの社家にて。雨やどりさせまうさんと存せしうち。やがていづくへか走り給ひしゆゑ。こゝかしこをたづねまどひぬ。日ごろ雷をきらひ給へば。ふかく氣づかひ侍りし。御こゝちはあしからずやいかにかといふ。腰元ども皎二郎を指さして。此御方を力に雨やどりして。姫さまも心づよくおぼせしにや。御持病にもさはり給はず。氣づかひし給ふな。そのめしがへこちらへといへば。老人こゝろえて。轎子のうちより。摺箔の單衣とり出してまゐらす。上臈半菰のかけに入て。ぬれ衣にかへて着たりければ。老人は皎二郎にあつく禮をのべ。轎子をかたはらにすゑて上臈にむかひ。はや暮にちかければ。いそぎ立せ給ひ。はやとくゝともよほされて。上臈はのこりおほげに。皎二郎が方を見やりつつ。たゆたひてわかれがたきを。腰元どもさしよりて轎子にたすけのせ。足ばやに走り行ぬ。皎二郎もわかれをし

み。依々戀々としての上り。かげの見えざるまで見おくりて。唯惘然として醉人のごとく。ため息つきて居たるが。かたはらを見れば。さゝやかなる扇あり。これはかの上臈の忘れおきたるならん。追かけてもどさんにも。はやおそしとひとりごちて。ひらき見れば。こむらさきの地に。つたなからぬ筆にて

しなのなるあひそめ川のはたにこそすくせむすびの神はまします

といふ古歌をかきたるも又心にくし。かの人の手やふれけんとおもふにぞ。うちもおかれねば。せめてのおもかげと懐にして。扱四方を顧れば。暑にいたみたる木草ども。雨をおびて生かへり。夕虹東にひきて。紅絹のごとく。涼風衣をとほし。鐘聲耳にひびきて。はや暮になん／＼とす。鮫二郎打驚て。家にかへらんといそがはしくすゝみ行て。二三町ばかり過ける所に。木だちしげりたるうちに。鴉あまたむらがりて。哇々となく。鮫二郎これを見ておもひけるは。今諸鳥ねぐらをもとむるころなるに。彼鴉どもねぐらにもつかで。かなしげになくはあやしむべし。しばらく古郷の便をきかざるが。かはりたる事もなきや。氣づかはしき事なりと思ひつゝ。又二三町すぎ行折しも。はるかむかふより。旅人と見ゆる男。空中を飛がごとくにはしり來鮫二郎ちか／＼とすゝみゆくに。かの旅人それと見るより地にひざまづきて。あせもしとゝ息もつきあへぬさまなり。鮫二郎あやしみ眼をさだめてよく／＼見れば。これは故郷の家に日ごろいでいりさせ。父兵衛の目をかくる者なれば。いといふかりて。汝何ゆゑかくいそがはしくこゝに來つるやといふ。かの男汗をのこひため息つきて。此度お家にゆゝしき大事ありしゆゑに。御むかひの爲夜を日につぎて走上り。たゞちに御旅宿にまゐりしが。けふしも鞍馬へおはせしと聞。片時ものべがたき事なれば。おん跡をしたひこゝまでまゐりつといふ。鮫二郎これを聞て打驚き。大事とは何事ぞ。とく告よ。いかに／＼と氣をせきて催せば。かの男唾をのみこみていふやう。當月某の夜子の時過る頃。御主人御夫婦の聲して。盗人いりたるぞおきよ／＼と。あわたししくよばひ給ふに驚て。御家僕盡く目を醒し。おの／＼得物をおつとり。松ともし

て走り出。そこら見れば。黠面頭巾におもてをつゝみたるくせ者。鮮血流る刀をさげて黒闇裏にあり。みな／＼すやつのがすなとよばひつゝ。ばら／＼ととりかこみて。命を際にたゝかひけるが。かの賊勢。猛長劍をうちふりて。飛鳥のごとくはたらきければ。敵することあたはず。御家僕のうち。即死の者五人。深手をおひし者三人。残る者も力盡て。志ゆるみたるひまに。かの賊後口より走り出。築牆をのり越て逃去んとしつるを。それがしかれがしこれを追ゆきて。築牆の上にある賊の脚を。兩人してとらへひきおろさんとす。此時に乗じて。賊の頭巾樹木の枝にひきかかりて。おもてあらはに見えぬ。月の光りによく見れば。豈はからんやかの賊は。まがふべうもあらぬ玄海なり。兩人は只あきれつゝ。なほ力をきはめてひきおろさんとしつるに。彼奴樹木にとり付。一脚をあげて兩人を地上に踢倒つひに牆ををどり越て逃去ぬ。兩人の者は氣絶して。しばらく死入けるが。やうやく命をまつたうし。玄海なることを見とどけたるのみ。少しの幸なり。つゞきておひてをかけたれども。行方しれず。嗚呼哀哉。御父は手槍をもちながら。土庫の前に斬れて死し玉ふ。御母人もおなじ所にころされ給ひぬ。御家内をあらため見しに。塵ばかり物もうせず。彼奴曾御家の様子をよく知たれば。餘の處に目をかけず。只土庫にしのびいらんとしつるを。御主人常に目さとければ。物音をきゝつけて立出給ひ。聲たて給ひしゆゑに。彼奴事をとけず。だしぬきに斬まうせしならん。御母人もともに聲たてゝ。ころされ給ひつらん。翌日もなほ四方に手わけをなし。日向の嘉久藤口。球磨川の船路。山路の嶮岨にいたるで。多勢の追人をくばり。普たづねけれども。いづくよりのがれ出けん。行方しれず。おもふに彼奴幼より獵戸の業をなし。よく山中の案内を知りたれば。人のしらざる徑を逃去しとおぼえ候。はやく御歸國ありて。事をはからひ給へと。息もつきあへずかたるにぞ。鮫二郎これを聞とひとしく。天に號地に哭て。涙血を出だしけるが。やうやく心をしづめていふやう。彼畜生元來惡性にて出家をとげず。拈華寺を出奔していづくにありや。其後は噂もきかざりしよし。親人の書簡にて聞じが。しかばかり災害をなさん者とはおもはざりき。再生の父母救命

の恩人を殺害なす事。天魔波旬といへどもたとへがたし。誠に希代の悪業哉。たとひ彼天に路ありて上り。地に門ありてかくるゝとも。我速に探り出して。曝子にきざみ。肉醬となして。父母の怨魂を慰すべしとて。むなしき空をにらみて牙をならし。身をふるはしてもだえけるが。とにかく御歸國をいそぎ給へとひきたてられて。つひに旅宿にかへりぬ。さて旅のよそほひそこくになして。其夜たゞちに發足し。夜どほし早馬をさせて古郷にかへり。父母のなきからを見て。哀愁に堪ざりけるが。かくてあるべき事ならねば。野邊に送りてむなしき烟となしはてぬ。家僕等屍は。父母の塚のかたはらに埋。あまたの僧を供養して。累七の佛事をなし。あつく其追薦をいとなみけり。おもふに彼玄海。恩人を殺せる罪。五逆十惡に過たり。たとひいづくにかくるゝとも。つひには必ず報あらん。皇天の羅網。閻羅の簿秩。暴惡を脱ことなし。いかでかひさしく無事をたもたんや。かくて皎二郎はふかく喪にこもりて。つしみ居たるが。父母の身につけたる衣服。手にふれたる調度など見るにつけて。綾衣の袖のかわくいとまもなく。共に天を戴。ざるの語をおもひ。仇を報る志しきりにて。百箇日の過るを待。家僕の内老實の者兩人をえらびて家事をあづけ。旅よそほひを調じて。ひとりみづから古郷をはなれ。いづれの國を心あてとし。いづれの日を限りともせず雲をにぎり水をつかむおもひをなして。百折千磨の辛苦をいとはず。仇人玄海がゆくへ草をわかちてたづねけり

第四段 近江國雨鉦の事

爰に又美濃國に。渥美左衛門高教といふ郷士ありけり。美濃助高房の子孫にて。名家の末なるが。ひさしく民間にまじはりて仕へをせざれども。たえずして君に仕へんよみし。關の藤川のほとりに住なれて。あまたの山林田地をもてり。なかばは武備を以て一郷の非常を守り。なかばは農業をなして家大に富ぬれば。里人等渥美長者と稱じて。たふとみ。歌。ことかぎりなし。其妻は前にうせて。只ひとりの養女あり。名を弓兒といひて。ことし十六歳にぞいたり

ける。容貌世にたくひなく。巫女廟の花の夢裏にのこれるがごとく。昭君村の柳も雨外に疎なるに似たり。しかのみならず。心ばへやさしくかしこければ。歌の道糸竹の事にも暗からず。あかき花むすびのたくひまで。曉すといふことなし。前の日本船にて雨やどりせし上藤は乃ち此女子なりけり。又彼守役の老人は。來海衛守といひて。譜代の家士なり。弓兒都一見のため京上りするに。衛守老實にして物なれたる者なれば。えらばれてつきそひのぼれるなりけり。さるほどに弓兒は。權京都に逗留して。神社佛閣名所古跡を遊覽し。おぼえず日數つもりぬれば。はや古郷にかへらんとて。つひに京都を發足し。近江路にさしかりて。小野の宿を過ける時。あまたの男女うちむれて。かしこをさしてはしりゆく。衛守これを見ていぶかり。何事ありて彼者どもは。いそがはしくかしこに走りゆくやと人に問けるに。答ていひけるは。近年世こぞりてその徳をかたり。諸人渴仰の思ひをなす。播州書寫山の金鈴道人。おもひかけずこのごろ當國にいたり給ひ。當所不知也川の。文珠白樵寺といふ寺に止宿し給ひけるが。鳥籠の山を見給ひ。風水能勝地。清淨の靈山なりとて。けふしも彼山に入定し給ふ。此事國中にかくれなくあのごとく。諸人群集してかの山にいたり。入定ををがみ奉るなり。そのゆゑに見給ふごとく。此驛中の者も。家内あるかぎりかしこにゆきて。ひとりも残れる者なしとかたる。弓兒轎子のうちにありて此事を聞き。衛守にいひけるは。金鈴道人とやらんは。活佛にておはしますよし。人のかたるをきよおよびぬ。けふしも幸の時に當所を過て。此事をきくは。佛縁のふかきにあらずや。妾もかしこにゆきて結縁の爲入定を拜たく思ふなりといふにぞ。衛守打聞きて。うべなるおふせなり。さらば少しもはやく御供し侍らんとて。轎子をいそがせゆき。ほどなくかしこにいたりて。轎子を麓におき。歩行して山にのぼり。その所にいたりて見るに。たかきやしき老若男女。蟻のごとくにつどひ蜂のごとくにむらがり。所せまきまで居ならびて。こちおしあちおしひしめきあひたり。弓兒は衛守にたすけられて。腰元等とともに。諸人の前にすゝみ出てこれを見るに。木がくれて鶴の林のこゝちする松林のもとに。ひとつの假家をたつる。竹を以

て柱とし。茅を以ておほひとし。しろき布の幕をはり。其うちにたかく床をまうけてうへに新薦をしき。白木の經厨をすゑて。一兩軸の經をのせつ。すべてのさま甚清淨なり。道人こゝに端座しておはします。其姿を見奉るに。童顔鶴髮。自然の妙旨あり。雪を敷く鬚ながくたれて膝をすく。身には白紙の衣を着し。紙の袈裟をかけて。手に手爐をとり給ひ。香氣馥郁として。牛頭梅檀のかをり。風にしたがひて空にのぼり。兜率天宮にもいたるかとうたがふ。目はねふり目にほそくひらき給ひ。口のうちに何やらんとなへ給ふとおぼえて。唇のうごくを見るのみなり。その左右に白椎寺の和尚。徒弟をつれて立ちならび。中音に讀經す。參詣の諸人はたふとさに涙をおとして。念珠すりならし。異口同音に念佛をとふる聲。いとかなしく。げにこれ世尊涅槃の時にあひ。天人大會五十二類。沙羅雙樹の下につどひて。かなしむさまを。まのあたり見るがごとし。又かたはらを見れば。武器。馬具。衣服。雜器。錦繡。絹布。金銀。米穀のたぐひ。それ／＼の分に應じて。これを供養し。山のごとくにつみあげて。佛果菩提の結縁とす。そのかみ高野大師入定の時。金剛峯寺いまだならず。眞然法師に遺訓して。成就せしむるかや。さる例もありとて。かの布施物を盡く。白椎寺におくらせて。ながく佛殿修理の料にあてしむ。此日の雜費も又それ／＼の施主ありて。すべて供養しけるとぞ。弓兒も旅中たづさへたる。一面の鏡をとり出し。白銀五枚をそへて供養しけり。さるほどに道人。參詣の諸人にむかひて。十念をさづけ給ひ。しばらく時うつりて。さだめの時刻にいたりければ。ゆるやかに身を起して棺槨のうちにうつり給ふ。鉦と鐘木を把てともにそのうちにをさめ。すなはちこれをかきあげて。龍頭の天蓋をさしかざし。紗灯をてらし。好香をたき。大寶花をふりちらし。涅槃經の無常の偈をかきつけたる。氏幡子を把。衆僧。金鏡を鳴し。法鼓を撃。讀經しつゝしづかにねり出して。山のいたゞきにのぼり。前にうがちおきたる穴のほとりにかきすゑたり。參詣の諸人も。そのあとにつきてなく／＼かしこにいたる。扱棺槨につなをかけて。深き穴のうちにくりおろし。つひに土をかけて埋ければ。見るうち。忽一塊の新塚となれり。諸人これを見て

聲をはなちてなきさけび。且念佛をたかやかになへてしばらくやまず。瘞りおほくして去かねけるが。日色西にかたむくを見て。やうやく山を下り。おのが家々立さりけり。弓兒も涙をおさへて。諸人とともに山をくだり。其夜は小野の宿にやどりけるが。それより道をいそぎて。ほどなく古郷にかへりつきぬ。此後も道人入定の時にあはざるは。せめて塚ををがまんとかの山にのぼる者おほし。息だしの竹に耳をつけてきけば。鉦の音かすかにきこえて。百餘日たえず。げにこれ凡人にあらざるしなりとて。ます／＼尊敬す。雨ふりてしづかなる日は。鉦の聲ことによくすみてきこえけるよし。これを近江の雨鉦とて。のち／＼までも奇特のことにいひ傳へけるとなん。さるほどに弓兒は。旅中恙なく家にかへりければ。家内よろこぶ事かぎりなし。此後は無事にしてしるすべきことなし。扱又時光速かにうつりゆきて。一夢の間に二年を過。ことし永享十年にぞいたりける。このころ鎌倉の管領は。足利左兵衛督持氏公にておはしけるが。初京都將軍義持公。持氏公を以て家督とせんころさしありしが。果さずして薨じ給ひ。義教公將軍に補せらるゝにおよびて。持氏公喜ばず。京都に叛の心あり。執權憲實。屢これを諫れども聽ず。もつばら其企ありけるが。此事につきて持氏公。彼渥美左衛門が豪農なることを聞召れ。京都に攻のぼらん時。兵糧米を仕おくるべきむね。密に使者を以て命ぜられければ。渥美左衛門大によるこび。數代民間にうづもれたる先祖の家名。再びかゝるかすは此時なりと速かにうけがひまうして。密使をおもくもてなして鎌倉にかへし。おのれ管領を拜謁せんため。吉日をえらびて旅のよそほひをとゝのへ。進御の禮物として。おりのべ絹千匹。中折紙三千束。瀬戸の磁器。蜂谷の釣柿のたぐひ。當國の名産を調じて。五合の長櫃にをさめ。五荷の擔子につくりて。すくよかなる脚夫に挑せ。十餘人の従者を領しおごそかに用意して。みづから信濃だちのたくましまし馬をえらびて打乗。鎌倉をのぞみてはせ下りぬ。これ吉に似て凶をまねくの徴なる事。後にぞおもひしられる

第五段

渥美高敦蚰蛇に遇事

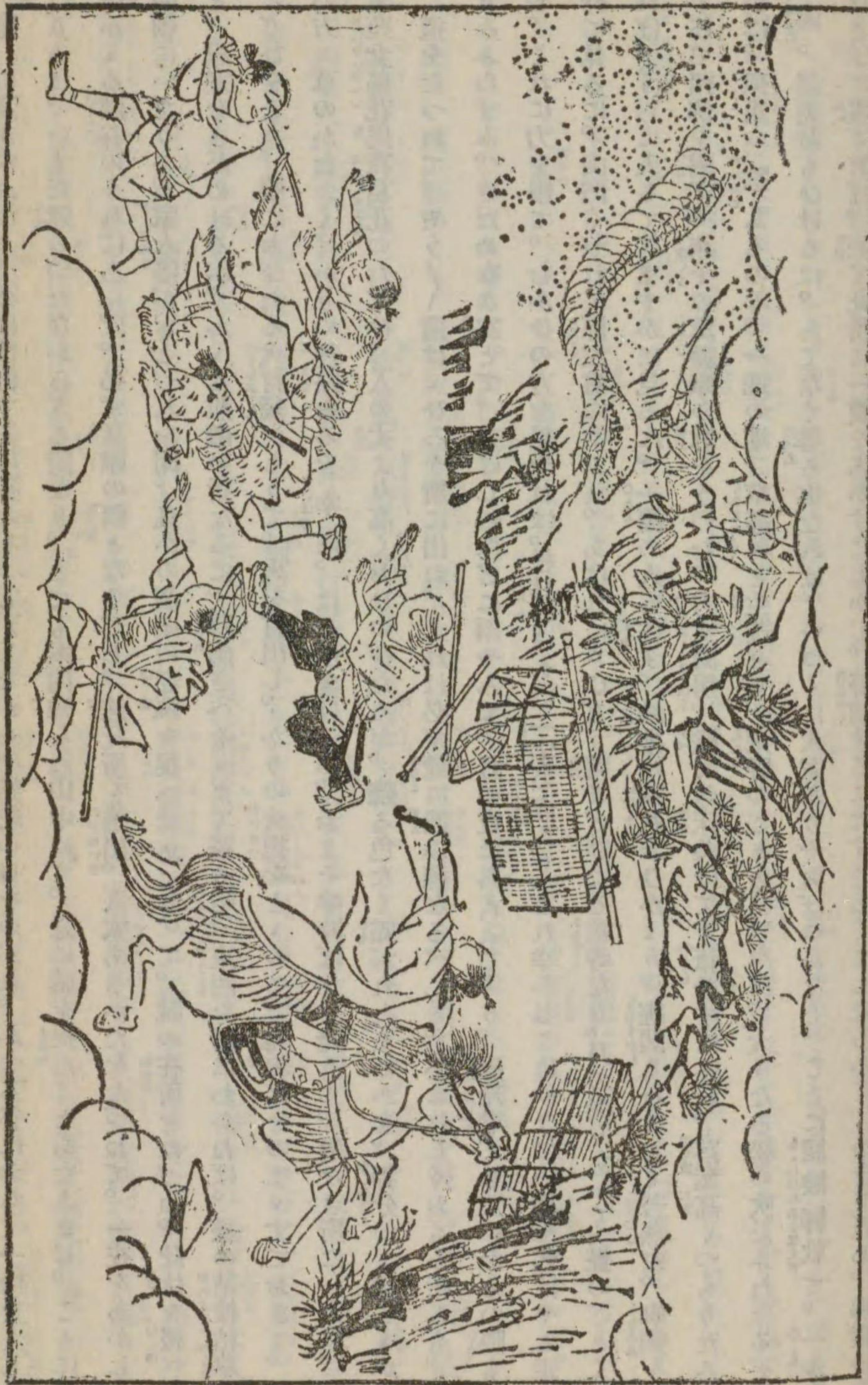
去程に渥美左衛門は。尾張路を過。東海道にかゝりて。ひたすら道を急ぎければ。程なく相摸路につき。行暮て一夜宿かるとよみし。竹の下道にいたり。はや鎌倉に近しといへども。脚夫等は禮物の重荷をになひて。數日の遠路を來たる事にてあれば。身上つかれ足なへぎて。すゝみがたし。しかのみならず。午時もやゝかたふきて。飢にさへのぞみ。食をもとめんとしたれども。此邊はそのかみ。新田羽林勅を奉して。鎌倉の討手に下り。合戦ありし處にて。其刻兵火の爲に。焼れたる跡なれば。村野の百姓盡く離散して。一路の人煙なく。食を索べき便なれば。みなみな力をおとし。疲にしたがひ。ますく擔子をおもくおほえて。歩詫つゝ。又二三里行て。一つの九折をのぼり。秋霧のたなびくひまに。ほの見れば。はるかむかひの。疎林深處より。一張の烟たちのぼりぬ。渥美馬上より指さして。見よ。かしこに烟のたつは。必人家あるべし。いそげや者どもと下知して。馬をはやめていそぎ行。ちかくいたりて見るに。果して林の裏に一ツの草屋あり。清流家をめぐりて。うしろに數十株の雞頭樹あり。時しもすゑの秋なれば。今をもなかに葉を染て。唐錦をおりはへたるごとく。日色にかゝりやきあひて。見る目もあやなり。風のまに。水のうへに散みだるゝさま。えもいはれねど。かゝる好景にも眼とまらず。渥美等數人。飢たる腹をかゝへ。門口にいたりて見れば。窓のほとりに。蘆の籬をなのみたれ。外の方の丸木の柱に。一ツの方燈をか

け。はりたる紙に。一膳飯あり。濯餅蕎麥あり。酒あり。種々の魚ありとかきつけつ。これは火をとますのみにあらず。晝もかけおきて。ゆきゝの旅人にしめす看板なり。裏には太布といふものを着たる。崎の老嫗。たけながき白髪をふり亂したるが。庭籠の前に圓座敷て。火を焼てぞ居たる。そのかたはらに。ひとりの小厮酒食の器をそゝぎ居たり。渥美等數人。かの看板を見ていきかへりたるこゝちなし。馬を門口につなぎ。擔子をおろしてひとしく。うちにいり。甕に尻かけて。飯をくらふ者あり。蕎麥をのぞむ者あり。酒肴をもとむる者あり。おのがさまゝ乞とりて。飽までのみくひし。やうく飢を忘れて。十分に氣力を養ひ。しばし息らひける折しも。むかひの田道の方より。六十六部の妙典ををさむる。回國の修業者笠をせおひ。拄杖をつき。鉦を打ならしてあゆみ來つ。こなたの門口に笠をおろし。かたはらの樹の根に尻かけて。蕎麥を買ひなとして。憩けるが。渥美が從者等にむかひ。見まうせば。なみくならぬ御方とおぼえ侍り。いづくへ赴むき給ふとて。かく寒空にむかひて。旅はし給ふぞ。日みじかの頃の旅は。心いそがしきものに侍り。擔子もおもげに見ゆるに。さぞつかれ給ひつらんといふ。從者等いふやう。それがし等はみな。此度初て此邊を過れば。道の様を知らず。足柄越は險阻なるよしを聞しが。實にやといふ。修行者いはく。それがし今已に。彼所を越てきつるが。さばかりの難所にあらず。いづれも健なる若人たちなれば。重荷をおひ給ふとも。心やすかるべしと。二言三語話けるうち。ひとり偶。修行者の手くびに。ものあるを見つけ。惟て。そは何ぞと問。修行者答て。これにつきてはながしき。因果物語あり。懺悔の爲に語てきかせまうすべしといふに。腹みちて榮耀心いてたる者ども。こぞりて耳をそばだてければ。修行者かたりていふやう。それがしは原土佐國の百姓なるが。隣家にひとりの老女ありて。年ごろ着るべき物も着ず。喰べき物も喰はず。ためおきたる金十兩あまり侍りき。しかるに老女。死なんずる時にのぞみて。かの金に深くおもひ残し。劑符にいれたるまゝ。これを握て死しけるが。息絶て後も。かたく握てはなさざれば。みな人おそろしがりて。かくばかり執念の残りたる金

なれば。亡者の心にまかすにしくべからずとて。其儘に屍を埋葬し侍りき。それがし其場にありてこれを見。世の寶を土中に埋て失ふは。惜むべき事とおもひつゝ。家に歸りしが。其夜俄に惡念おこり。暗夜を幸ひ。鍬と鎌とをたづさへて。墓原にいたり。老女の屍をほり出して鎌にて劑符の尻をきり。金をうばひとりて。もとのごとく屍を埋んとしつる時。惟哉屍むくくとうごとく見えしが。忽ち氷のごとくひややかなる手をさしのべて。それがしが手くびをしかと握りぬ。おそろしさ。いふべうもあらず。とかくして。もぎはなさんとせしに。なほつよく握りて。萬力などいふものにて。まきしむるやうに。痛堪がたく。ことに。曉ちかくなりければ。せんすべなく。鎌にて其手くびをかききり。いぞがはしく屍をもとのごとくに埋て。逃歸り。さま／＼にしてこれをとりますとせしに。ます／＼はなれず。其指我手くびにくびりこみ。肉ひとつに癒合て。死せる手くびに血氣通じ。脈のさしひきありて我身體とひとつになりぬれば。斬すてべきやうもなし。こゝにいたりて大に後悔し。人の執念のおそろしき事を知り。前日の惡念をひるがへして。菩提の心を起し。罪障消滅の爲。六十六部の大乘妙典を。供養し奉らんとおもひたち。三年前に國を出て。普諸國をめぐり。頃日當國にいたりぬ。懺悔に罪を滅すとかきけば。みづから此事を語て。唯來世の苦患を脱れんとのみねがひ候。げに／＼人の執念はおそろしきものにて侍り。因果觀面のことわり。あらそひがたし。あさましきかたちを。見せまうさんといひつゝ。手くびにまきたる布をとりて見せければ。こなたの人々立より見るに。彼がいふにたがはず。色青くほそりたる手くび。握りつきてあれば。みな／＼身の毛聳て。おそろしうおぼえぬ。あるじの老嫗これを見やりて。我等がごとく。一錢のたくはへなき身は。執念の残るべき氣づかひなくて。心安しと打笑つゝいふ。渥美も彼かものあたりを聞て。かゝる奇恠も。昔語にはまゝ云傳ふる事にて。實しき事とおもはざりしが。かく目前に見れば。虚言のみにはあらず。げに貪欲の心ほど。おそろべきはなしと。奇異のおもひをなし且憐愍の心をおこして。從者に命じ。錢三串ばかりとらせければ。修行者がたく辭してうけ

ず。山野にふして夜をあかし。流水を汲て咽をうるはず。一所不住の身なれば。過分の布施物をまゝしうくるに益なし。御志のほどは。これにて足まうすなりといひて。只一錢をとめて。其餘はみなもどしければ。渥美これを見て。世の常言に惡つよき者は善にも又つよしといふ彼がたぐひならめと。心のうちひそかに感じけり。修行者は。篋をせおひて立あがり。はやいとままうすべしといひて。鉦打ならし。念佛數遍唱へて出行ぬ。渥美は修行者の長物語に。おもひかけず時をうつしければ。はやまかり出んとおもひ。あるじの老嫗にむかひ。足柄まではいかばかりの路あるやと問に。二里少し餘ありと答。日あるうち越るべきやと又問に。老嫗老眼をしぼりつゝ。日ざしをあふぎ見て。小断にむかひ。今やうやく末の下りにもあらんかといふ。小断うなづきて。門の木蔭異にかたふきて見ゆれば。いかにもそのころなり。いかほど遶て行給ふとも。日くれぬさきにとくと越給ふべしと。心安げにいひければ。腹みちて勢ひ付たる者ども。しからば片時もはやく立せ給へと催して。いそがはしく酒飯の代をつくのひ。一齊に立出ていそぎ行ぬ。扱二里ばかりは一飛と。かろくこゝろえて走りけるに。ゆけども／＼山にちかづかず。四方を顧れば。草茫茫として。かぎりもしれぬ野原也。こは道をふみたがへしかと。あやしみて。人にとはんとおもへども。旅衣露を殘して長月や。末野の尾花うらかるゝ頃なれば。往來の旅人もなく。雲のはたてに。雁金の鳴わたるのみ。まれにも人にあはず。かの酒屋の者どもが。二里餘もあらんといひしは。いつはりかといふかりつゝ。頼風だちて俄に寒き夕ぐれを。たどるたどる。四五里も過たらんとおもふ頃。やうやく足柄の麓につきぬ。さらぬだに日みじかき頃なれば。はや紅日西に落て。天色已に晩なんとす。渥美衆人に下知し。かくては山中にて日くれぬべし。案内しらぬ險道をゆくに。日暮ては十分の難儀なり。少しも日の光りあらんうち。急ぎて山を越よと。自馬を眞先にすゝめて。はせのぼりけるが。道せまくしてゆきがたく。萬株の樹木頂の上におほひかゝりて。老龍の雲をいづるがごとく。千嶂の巖石脚の下に立ならびて。猛虎の風にうそぶくに似たり。徑路盤曲にして。高きに上り低きに下り。聞しにまさる

險阻也。脚夫等はくるしげにうめき。馬は白盤をふきてすゝみかねしが。からうじて半山を過。やうやく蛤坂の峠にぞいたりける。此所はすべて平地なれば。しばらく擔子をおろし。清水を掬して咽をうるほし。馬にも水かひなどして。箇々息を休て居たる折しも。前面の樹林のうちに籟々となる音あり。みなく此音を聞。こは恠しやと頭をあげて見れば。夕霧ふかくたちこめたるうちより。吊桶のおほきさなる蝮蛇。半身をあらはし。双眼に金光を出し。巨口をひらき。火のごとき舌頭を吐。頭を左右にうちふりて。只一呑に呑らん勢ひをなす。おそろしなどもおろか也。みなみなこれを見て。面色土のごとくに變り。身の毛聳。魂天に飛。擔子を其儘すておきて。麓をさして逃去けり。渥美は巖のかげに身をかくし。馬上にたづさへたる。半弓をとりて箭をつがへ。満月のごとくにひきたもちて弦音たかく飄とはなつ。其箭あやまたず。蝮蛇の頭にはつしとたちぬ。蝮蛇これにおそれやしけん。もとの霧深きうちに。こそこそかくれいりければ。渥美やうやく心を安んじ。從者等の立かへるをまちける所に。忽ち樹林のうちより。あらはれ出たる人ありこれを見れば。かの酒屋にて遇たる修行者也。惟哉こなたのやうすをうかどうさまにて。しきりに鉦を打ならしけるが。やがて十四五人の盗人林のうちより走り出。かの五荷の擔子をうばひとり。もとのところ逃りりぬ。渥美大に驚き馬を飛せて追行けるが。此時已に日は入果て。宵闇の夜のいとくらくまのあたりだにわかたねば。盗人のゆくへを見失ひ。心狼狽して。馬の足をふみはづし。深き谷底におちいりぬ。馬は巖石に足を打りて死す。渥美は鞍の前輪にしかととりつき居たれば。幸にして一命は恙なしといへども。渾身つかれて。重風麻木ごとく。兩腿をそこなひて。鬪敗公雞に異ならず。こゝかしこに疵をうけ鮮血滾々ながれて。痛堪がたく。息もたゆげに打伏て。しばしは起もあがらず。禮物を奪れては。鎌倉にも行がたしと。あきれにあきれて。思案にくれたりけるが。漸々心をしづめておもひけるは。今おもへば。かの修行者も酒屋の老嫗も。盗人の夥也。我輩をいつはり。日くれに山中をゆかしめたるは。擔子を奪ん奸計にてありしものを。それと知らず。彼奴等にあざむかれたるは。我



慮おもんばからの浅きゆゑなり。今は後悔するに益なし。しかしながら。蟒蛇うはまの口をのがれ。かゝる谷におちて一命をうしなはざるは。いまだ運のつたなからざる所なり。とても案内知らぬ山中にて。急に賊を捉んことあたふまじ。ことに夜中かゝる幽谷ゆうこくのうちにあらば。必ず猛獸まうじゆうの餌となるべし。速此所を逃出のがれいで。人家あるかたをたづねて。一夜をあかし。明朝にいたりて。家人等がおとづれを聞。且かの酒屋の老嫗らうおんを捉へせめとひて。賊の在所をたづね。此仇を報べしと。思案をさだめけるが。かゝる難儀の折なるに。時雨さへそゞぎて益々暗くら。東西をだにわかねば。松の枯枝枯草のたくひをとり。腰におびたる火打袋をとりて。火を打出し。かりの火把をとゝのへ。斃馬へいばはそのまますておきて。東の方に草のかたふくばかりの徑路あるを幸さいはひに。はせゆきけるが。およそ半時ばかり走りて。道なき所にいたり。萩紫苑女郎花尾花葛花しおんやんななしをばくすはなのたくひ。人の丈より高くおひのびたるが。残る色なく霜がれたるなかを。押分つゝ。こゝかしこ道をたづねて。やうく道はゞひろき所に出ぬ。これは必ず麓に通ふ道なるべしと。心うれしくおもふ折しも。ふりみならず。さだめなき空とて。しばしのほどに雨やみて。月の夜にあらたまり。影玲瓏かげれいろうとしていたらぬ隈もなし。これに力を得て。むかひの方を見やれば。松林のうちに一字の寺あり。これ幸かしこにゆきて一宿を乞ばやと走り行て見るに。山門くづれて扉左右にたふれ。あはれにさびしう荒まどひたる舊寺なり。月の光りあかく。晝のごとくなれば。うちに入りてこまやかに見るに。一箇の人も住ず。鐘樓は荆棘おひかゝり。經閣もむなしく苔蒸ぬ。蜘蛛をむすびて諸佛を繋ぎ。燕子の糞護摩の牀をうづむ。方丈廊房。壁おち床ぬけて。雀むすぶふれ。落葉高くつもりたるなかに。孤兔の踪あるのみ。一連の地。草蔓々と生茂りて。荒野のごとくなるに。大きな松の吹たふれたるぞ物凄。渥美おもひけるは。あてなく尋る事なれば。いづくに人家ありやおぼつかなし。ことに腿酸脚軟もやしめななせて。一步もはこぶに堪ざれば。枉て此所に一夜をあかすにしかじ。野宿するにはすこしくましましならめと。心をさだめ。佛殿の上に座して。心氣をやすめけるが。松吹風谷の水音。耳にひびくひま。霜夜による虫の聲。いとほそくきこえ

て。殊にかなし。時にむかひのかたを遠く見やれば。霧ほどなる火の光り。四ツ五ツ飛舞ぬ。狐のともす火かと。惟かおもひつゝ。やゝ近くなるを見れば。十四五人の者。火把を揮照して。此寺にすゝみ來る也。渥美仔細ぞあらん。身をかくして様子を見るべしと。藪のやぶれに足ふみかけて。梁うづまりののぼり。息をつめてうかゞひ見れば。かの者どもは以前の盗人にて。かの五荷の擔子をになひ來て。佛殿の上にかきすゑ。車座に居ならびて。息をやすむる様也。別に又怖むべきは。兩人の賊。蟒蛇をくゝりて。になひ來ぬ。渥美梁の上より。軒もる月あかりによく見れば。是實の蟒蛇にあらず。其形を似せつくりたる物なれば。これにも又あざむかれぬるか。憤をかさぬ。扱おもへらく。我はからずも此所に迷ひ來て。彼奴等に出合しこそ幸なれ。日ごろ學び得たる武藝は。此時こそもちうべけれ。汝等見よ。双鐵のつゞくたけは斬盡すべしと。目釘をぬらし袖をまきあげて。車座の真中へ撲地飛下りければ。盗人どもはおもひかけぬ事にて。大に驚き。四方にさとひらきて。箇々平廣をぬきはなち。渥美を真中にとりかこみて。前後一度に斬かくる。渥美は元來兩刀の達人なれば。双手に刀を打ふりて。劍法の秘術を盡し。身を閃て踢倒し。跳越とせりて後うしろにあらはれ。恰も風の玉屑を飄し。雪の瓊花を撒がごとく。はたらきて。前にすゝみたる兩賊を斬伏。四五人に深手をおはせ。なほ勢ひ猛く戦ければ。數人の盗人ども。氣おくれして尻ごみし。ほどく敵しがたく見えたる折しも。床の板をはねのけて。一個の大漢をどりいて。明晃々たる。廣双の斧をひつぎかけて。渥美がうしろにたちまはり。斧の光りひらめくと見えしが。忽渥美は兩段にわかれて。地上に撲地と倒たり。嗚呼憐むべし。名家の子孫。累代の舊家にして。一郷の長者とやまはれ。富貴威權共に保。一點の不足なき身なるに。はからずも賊寨に陥。四十二歳を一期として。草葉の露ときえうせぬ。正に是。萬里の黃泉旅店なく。三魂今夜誰が家にか落ると。いへるたぐひにて。哀はかなき身の終也。床の下より出たる大漢は。別の人にあらず。乃ち是大太郎玄海也。かれ網干夫婦を殺して後。髪をたて。みづから大蛇太郎と稱し。賊首となりて。あまたの小賊をあつめ。擅に旅人を

劫して。金銀財貨を奪とり。人を殺す事麻を刈がごとく。暴悪やゝつものりけり。このごろ當國にいたり。彼舊寺の床の下に。ぬけ穴をほりおきて住家となし。時々回國の修行者に身を扮して。近國を徘徊し。蠟をねりて手くびをつくり。因果物語をなして。諸人をまどはし。人家の案内をうかどひて。賊をなすたよりとす。或は又。此山中雲霧のふかきを幸ひ。蛇皮を以て蚺蛇のかたちをつくり。これを霧の裏にはたらかしめて。往來の旅人を嚇し。其虚に乗じて。擔子を奪ふ。又かの酒屋の老嫗も。同夥の者なれば。那裡に店をひらかせ。一箇の小賊をつけおきて。もつばら往來の旅人をうかどはしむ。若擔子おほき旅人のよぎる時は。彼等則ち山中に告て。これを奪はしめけるとぞ。扱渥美幽谷に陥てより。舊寺にいたるまでの仔細。かたはらに人もなきに。何を以てこれを知ると。うたがふべきが。これは後に其時の趣を考へ。かくもありけめと。推量をもて語傳へしならめ。此たぐひの事昔物語に例おほし。已に謝肇淪も此事を論じおきぬ。理を以てせむる人。かならずしもあやしみおもふことなけれ

第六段 弓兒流沈て岐蘇の雪路に苦む事

夫は扱おき爰に又。渥美が従者等は。蚺蛇をおそれ逃まどひけるが。主人の安否を氣づかひ。殊に擔子をすておきたれば。やむことを得ず。おそるゝかしこに歸りて見るに。主人いませず。擔子も失たれば。大に驚き。箇々商議して。山中を普尋けるが。さらにゆくへ知れざれば。尋詮て其夜は麓に下りてあかし。翌朝又山にいたりて尋けるに。とある谷陰にて。かの斃馬を見つけて。益々驚き。扱は主人蚺蛇にのまれ給ふか。さるにても擔子の失ぬるはいぶかし。おそらくは山ごもりの盗人等に奪れたるならん。しかるときは主人も賊の爲に害せられ玉ひしも知るべからず。何にまれ我輩。主人の生死を見とゞけぬのみならず。鎌倉にさゞぐる大切の禮物を失ひたれば。此儘國に歸らば必ず罪せらるべし。寧いづくへも逃行にしかじとて。おひく逃去者おほし。げに不忠の輩なり。脚夫等は素や

とはれの者なれば。さきだちて逃うせぬ。又たとひ罪せらるゝとも。國にかへりて此仔細を告。そのうへにていかにもなり果んと心をさだめて。國に歸る者もありけり。かくてかの者ども國にかへりて。事の始末をつぶさに告ければ。弓兒はさらなり。一家の者どもすべて。夢にゆめ見しこゝちをなし。歎悲こと限りもなく。筆に記し盡すべうもあらず。家士ども議しけるは。主人蚺蛇に害せられ給ひしか。賊に殺され給ひしか。此兩様に必定せりといへども。萬に一ツ恙なくおはさんも量がたし。何にまれ。人をえらびて彼所につかはし。生死のほどをたゞし。其上にて仔細を鎌倉にうつたふるにしくべからずと。一決して。おもだちたる家の子。兩人を旅だたせければ。兩人は道を急ぎて彼所に至り。よく山中の案内をしりたる者をやとひて隅々を残りなく尋ければ。つひにかの舊寺にて。渥美が屍を尋ね出し。賊の所爲に決しぬれば。たゞちに鎌倉にいたり。事の始末をつぶさにうつたへ。渥美が屍をとりてかへりぬ。管領持氏公いからせ給ひ。やがて捕盜官に命じ給へば。あまたの收兵をゐて。足柄に至り。あまねくもとむるといへども。賊どもはかの擔子を常の擔子とおもひ。ひらき見て。はじめて管領にさゞぐる禮物なることを知り。且目録書を見て。渥美が住所姓名を知り。かくては後々兪議きびしかるべしとおもひ。残らず逃去たる跡なれば。手をむなしうし。唯彼舊寺を焼亡して歸りけるとぞ。去程に渥美が家にては。主人を失ひて。暗夜にともし火のきえたるおもひをなし。只追福の佛事にのみ日をおくりて。いたづらに此年もくれ果て。うせぬる人はかへらねど。あら玉の年は已に立かへりて。永亨十一年にぞいたりける。爰に又。鎌倉の執權憲實は。管領持氏公の隠謀をひたすら諫といへども。もちる給はざれば。此よしを京都に通じ。武田朝倉の諸軍勢とともに。持氏公を撃。持氏公運つたなくして。此年の二月安永寺に於て。自害し給ふ。京都の御憤つよく。持氏公の隠謀に一味したる輩は。盡く丸族をたゞれけるが。渥美も一旦此事にくはゞりたる事。京都にきこえて。田地家財を没收せられ。一家の男女盡く追はられければ。日ごろの洪恩を顧ざる者ども。あわてふためき。我さきと遁まどひて失ぬれば。犬も途を失

ひ。難もなきまどひ。目もあてられぬ光景なり。弓兒はさる騒動のうちに。兵どもに捉はれ。已に京都へ送れんとして。ほとく危かりしを。家の子來海衛守。此時病後にてありしが。一命をなげうちて救出し。いづくへもしのばせまゐらせんとおもひけるが。とても親族のかたは京都のきこえをおそれて。ちかづけまじとおもへば。前に渡なく後に途を失ひ。とかく迷ひ居て。追人にとらはれんも又氣づかはしく。とやせまじかやすべきと。思案にくれたりけるが。ひとりの弟。前にゆゑありて勘當し。年ひさしくおとづればせざれど。信濃國に住よしを聞。かゝる急難の時なれば。權且彼が方へおちゆかんと。心を定めて旅立す。弓兒は市女笠を深くかづきて。面をかくし。絹の衣のうへに。浴衣をつぼ折て着。行纏をまとひ。草鞋を穿て。賤女の姿に扮作。衛守は兩刀を藥苞のうちにかくし。包とともにせおひ。太布の上着して。青頭巾ひきこみ。數珠つまぐり杖つきて。田舎翁の善光寺詣するが。孫女をともしなひたるさまに扮てぞ打連ける。弓兒は涙にむせび。かくかさなれる禍にあひて。おもひがけずも。住なれし故郷をはなれ。ゆくへおぼつかなき旅路に赴こと。いかなるあしき報ぞやといひて。うち歎ば。衛守もひたすら悲て。一步もすまざりしが。かくてはかひなしとおもひかへて。自己志を勵し弓兒をこしらへなぐさめて。岐蘇の棧たえだえに。ゆくすゑふかき白雲をわけつゝ。彼陳忠が落馬したる。御坂の難所にさしかゝり。をさゝ原わけ行袖の露けきうへに涙のしづくおきそへて。身の憂ことやいくら山。いくらともなき山坂を越ゆげば。朧衣ケ嶽。乘駝ケ岳。御嶽。駒ケ嶽など。遠望峯々。宿雪にうづもれて見るにさへ寒けく。雨を含孤村の樹。夕を送る遠寺の鐘。いづれか哀を催す蝶。にあらざらん。殊更おちうどのならひとて。山おろしの梢をならし。宿鳥の月夜にさわぐまて。追人かと驚て。膽をけし胸をひやす。よろづに心をおけば。旅人の通ふ道をゆかず。こゝの山かしこの谷づたひして。間道をゆけば。さばかり遠からぬ道も。とかくしてはかどらず。弓兒は常に深窓のうちに養はれて。あまたの侍女にかしづかれ。歌の道糸竹の葉にのみあかしくらし。花にめて月にあくがれ。紅葉の秋雪の夕。折にふれ事に

のぞみ。みやびたる事へのみ心をゆだれて。襲衣のおもきす。身おにたへざる手。女なるが。はからずも不祥の時にあひ。穿も慣ざる草鞋を踏で。かゝる險路をたどるなれば。忽ち脚破鮮血淋漓ながれて。道のべの草を紅に染なし。彼に。跌此に倒。風にちる白梅にひとしく。嵐にいたむ女郎子にたくひすめり。只籠をはなれたる鳥の翼をやぶり。網をもれたる魚の。鱗をそこなひたる風情して。しらぬ里に宿をとひ。なれぬ人に身を寄れば。ねざめの床の草枕。かたしきの衣手さむく。岐岨川の岩にせかるゝ水音高くひびきて。紅の浅葉の野良に刈草の。束の間もねられねば。夢だにむすびかねつ。有明出にたつ雲の。ゆくへさだめぬ身を悲て。知俱麻の河伯の細石。ちどにくだくるおもひにたへず。袖のひまよりもる涙は。信濃野の。木蕨にみかく白露の玉にまがひ。保屋の薄の芽出さへ。足をつらぬくこゝちして。ゆきわべらひぬ。素危急のうちを。いそがはしく脱出たる事なれば。身にそへたるたくはへもかるく。こゝまでこそは凌ぎ來つれ。今は一飯のたすけを得べき手段も盡ぬ。衛守は年老たるうへに。病後の旅なれば。苦しさをたへがたく。折ふしつよき餘寒にさへなやめられ。身しびれ足なへぎて。歩べき力盡たれば。山中の清水ある所を尋ね。咽をうるほさんとするに。時は衣更着のすゑなれど。名におへる寒國なれば。他郷の嚴冬の時にもまさり。野篁生ふ岩間にむすぶ氷は。劍を植たるやうにて。風の祝も心せず。風越の山おろし肌を斬がごとく。衛守は身上いらゝぎ。寒氣に骨とほりて。面草のいろにかはり。打ふるひつゝかしこに倒て。息もたゆげにうめく。にはかに旅立ぬれば。薬もたくはへず。人里に遠ければ。何せんもかひなし。弓兒はこゝちまどひて。衛守が頭を抱き。こは何となりゆく因果ぞと。泣聲だに出やらず。はや晩ちかくなりぬれば。ことに咆くらく。谷幽にして。心ぼそき消もいるべきこゝちす。此折しも。一むらかゝる雲につれて。降來雪。紛々揚々として。柳絮を飛ばすがごとく。鵝毛の舞に似たり。見るゝ高くつもりて。滿地玉をしけるかとうたがはる。兩人は雪水に衣をぬらし。吹雪に面をうたれてたへがたく。手凍足屈て。いかにともすべきかたなければ。弓兒かよわき力に。衛守を抱扶て。すこししげ

りたる松が根に打伏せ。あたりの枯枝をひろひあつめて。火をたきつけ。雨衣さへなければ。只一包たづさへたる。著かへの小袖を打させ。わづかにたくはへたる餉をいだして。雪水にうるほし。衛守が頭をなでつゝ。泣々いひけるは。いかに衛守。其方を力にこそ年ゆかぬ女の身の。かゝる難所を過て。こゝまでは來つれ。もはや是よりさきは。ゆく道もたひらにて。心安しと聞つるに。などいひがひなくつかれたるぞ。などかくまでによりたりたるぞ。氣分はいかに。しばしの飢をたすけよ。火にもあたりて。身をあたためよといへば。衛守やうゝ頭をあげ。涙をばらはらとおとして。あまたの家士のうちにも。主従の御縁よくふかければこそ。やつがれ一個これまでも。つきそひ申つるに。おのれ已に齡かたふきたるうへに。老病をうけたれば。ながくかしづきまゐらせん事たのみなし。況此寒氣にあたり。飢渴にせまり。險路になやめば。とてもいきながらふべきことかなふまじ。ともに全からんとすれば。二つながら失ふと申すことの侍るぞ。ねがはくはやつがれが。一重の衣を御身に襲て。寒をいとひ。我身一朝の糧を合せて。飢をしのぎ玉ひ。片時もはやくこゝを去り。弟が住家を尋給ひて。御身をやすんずる。良計をなし給へ。とてもたすかりがたき。老が身の介抱に。大事の御身をあやまち給ふなといふも。息のしたなり。弓兒打聞て。それおもひもよらず。とまれかくまれ。ひとつにこそなり果め。たとひわらはのみ命たすかるとも。いかでか其方を見すて。おち行べきと。泣々いふにぞ。衛守かさねていひけるは。かゝる危急にのぞみて。など此老が身をさばかりかばひ給ふぞや。此大雪にとかくしてこゝにいまさば。必凍死し給はん。おん身死し給ふとも。我身たすかるべきいはれなし。日晩ぬうちにはやとくく。おちさせ給へといひて。苦き身を起なほり。帯ひきとき着物を脱て。弓兒が膝におしやれば。弓兒はなほもうち著せて。更に行べきいろなければ。衛守氣を焦燥。聞わけあしき御方ぞ。とても死ぬべき此身なるを。何罪つくり苦みをかさぬべきとて。赤裸になりて雪の裏にのたり伏。弓兒はかなしく。燄火をつくるひ。著物かき抱て。又も立寄。雪打はらひて抱おこせば。はや舌こはり眼とどて。たのみすけなく見えけるにぞ。あまりのかなしさに。涙にたたり。おちる涙のどひつゝ。我身のぬくもり。涙あたまめなして。今にはやかながた。糸のやうなる息ひきとりて。黄泉の鬼となりはてぬ。弓兒はすべきやうもなく。只死骸に取つきて。かぎりなきくり言ひつゝも。悲歎の涙にむせかへり。哀なりなどもおろかなり。しばしして涙をおさへ。妾が身ほど薄命なるは。世に又たくひあるべからず。父は非命に死し給ひ。家は不慮に滅亡し。あまた召仕し者どもにさへすてられて。立よるべき蔭もなく。住なれし故郷を追れて。しらぬ國をさまよひありき。只一個を杖柱とたのみつる。衛守さへうせぬるは。いかなる宿世の報をや。年ゆかぬ女の身にて。いかでかひとり旅路をたどるべき。人買などに出合て。もし此身を奪れなば。ながき苦患をするのみならず。過行給ふ父母に。汚名をおはす不孝の罪。何といひわけあるべきぞ。とても不運の此身なれば。いさぎよく自害して。衛守があとをしたひ行。死出葬途を打連て。父母のおはします。草葉の蔭とやらんいふ所にゆき。ともにかしづき奉らん。そふじやうと覺悟をきはめ。南無阿彌陀佛。日ごろ念ずる谷汲の覺世音親子は。一世のちぎりとときけど。佛菩薩の慈悲心にて。父母の蓮座にみちびき給へと念じつゝ。西にむかひてふしをがみ。おくれはせじと氣を勵し。苞にかくせし刀をぬき。雪に映じてきらめくを。やがて吭につきたてんとしたる折しも。背後の方の巖の上に。籟々といふ音ひびく。此音は何等の音ぞ。後の物語を待得てしるべし

江戸 山東軒主人編

第七段 荒熊弓兒が死をかへて生となす事

其時弓兒。巖の上の物音を聞つけ。人の來るにやあらん。折あしと。手をとめて。背後の方をあふぎ見れば。一雙の荒熊。前の爪後の脚玉塵を踢起し。樹根岩稜をふみ越て。はるかに高き所より。坂おとしに跳下りければ。今死んと覺悟きはめたる身ながらも。さすがめなれぬ猛獸の勢ひにおそれ。しばしかたはらの。木蔭に立かくれける折しも。岨づたひに一個の旅客。笠をいたゞき。雨衣を披。兩刀をおび。雪はなほ降亂て。木蔭さへうち埋るを。笠にふせぎ。眞袖にはらひてすゝみ來しが。彼あら熊の跳くるにゆきあひ。大に驚き急に身を避んとするに。路せまくしてのがるべきかたなければ。せんすべなく。肩にかけたる。包をとりて木の枝にうちかけ笠をとりて脊におひ。しるしの竿の類にて。雪の深淺をはかる爲にやあらん糧のなま木を七尺ばかりにきりて道のかたはらに立おきたるを幸ひにひきぬきて小脇にかい挟み。身を巖に倚て。相待ける間もあらせず。荒熊走り來て。いつさんに飛かゝる。旅人これを見て。いそがはしく身を閃し。熊の背後にめぐり出けるが。熊は忽身をひるがへし。はあんと吼る聲。雷のごとく。猛勢ひをなして。再び飛かゝる。旅人は一身かろくして。右にあるかと思れば左に避。左りにあるかと思れば右にひらき。前にあらはれ。後にかくれて。雲間にひらめく電光のごとく。高波に飛かふ燕子にひとしく身をなして。熊よりたかくかの。熊の脚をさしかさし。畜生脚を見すまして。なき叫と相うかがる。凡熊は。火性短氣の

獸なれば。再三旅人に驚かれて大に怒をなし。鼻をならし牙をかみ。眼をいからし腰をひねり。只一擲と飛びかゝる。旅人あくまで熊を怒して疲れしめ。折こそよけれど。二歩ほど後に下りて。かの棒をとり。空高くふりあげて。熊の頭をのぞみ。微塵になれとうちけるが。熊も又眼あきらかにして。忽身を躍てこれを避。棒にしかとくひつき。前脚の爪をたてゝなぐりすてんとす。旅人はこれをとられじと力をきはめてしばし引あひけるが。熊の力やまさりけんつひに棒を奪ひとり。おのが力あまりてのけさまに倒れたり。そのひまに旅人手早く刀をぬき。乗かゝりて月の輪のあたりを。したゝかにさしとほしければ。さばかり勢ひ猛き荒熊。四足をちぢめ身をふるはせ。たかく一聲くるしげに吼て。只一刀に息絶たり。これ名劍の威徳なるべし。さて熊の死しをはるを見とゞけ。刀の血をのごひて鞘にをさめ。なほよく見れば。全身の毛は鐵の針をうゑたるがごとく。四足の爪は銀の戟をうち曲たるにひとしく。小牛のおほきさありて。世に希有の老熊なり。疵口より鮮血わきながれて。白雪を紅に染かへぬ。旅人はさき程よりのたゝかひに。氣力疲れ。手足軟てたへがたく。雪をふくみて咽をうるはし。雨衣の袖をしぼりつゝ。すがのあら野に住熊の。おそろしきまでとひとりごち。しばしやすらひてぞ居たりける。弓兒はこなたの木蔭に身をひそめて。忙怖旅人のはたらきの始終を見居たりけるが。おもふ旨やあらん。自害をとゞまり。刀を鞘にをさめて立出。旅人にちかづきていひけるは。おん身は。三年前の水無月廿日。木船の社にかさやどりせし時。妾を介抱給はりし。郎にてはおはさずやといふ。此旅人心におほえある事なれば。あやしみつゝ。雪あかりに弓兒が顔を見るに。彼時まみえし。上臈にまぎれなく見ゆれど。おもひかけざる所にて。かはりし姿の出會なれば。且驚き且いぶかりて。返答もせず。只顔をつれなく打まもりて。あきれたるさまなり。弓兒かさわていはく。かゝる山中にてゆくりなく。ゆきあひまみらせしことなれば。あやしみ給ふはうべ也。妾ことは。美濃國關の藤川のほとりに。年ひさしく住ぬる郷士。渥美左衛門高敦と申す者のむすめにて。名を弓兒と申し侍り。ゆゑありて父をうしなひ。家をほろぼされ。岸うつ波のよる

べもなく。松にはふ葛のたのみもたえて。かくしらぬ國にさまひ來し。身の上のはかなき物語は。一席にかたり盡しがたし。郎は又いづくの御方にて。何等の事ありて。獨旅はし給ふぞ。旅人はいく。やつがれは肥後國球磨川のほとりに往。望月皎二郎と申す者なり。前の年おん身にあひし頃は。物學の爲。しばらく京都に寓居せし折なり。やつがれがかく獨旅するも。いはれのあることにて。途中にて語盡しがたし。おん身を見れば。從者などもなし。女のひとり身にて。これまでの旅路を。いかにして來給ひしぞ。弓兒はいく。召仕し男女もおほく侍りしが。みなちりんに逃失て。只彼木船詣のふしも。召連たる家士。來海衛守といふ者を。ひとり具して。これまではまゐりしが老年といひ病後といひ。身體衰へたるうへに。此大雪の寒氣にあたり。今少し前はかなくなり。屍をとりをさむる便もなければ。其儘かしこにありといひて。松蔭につれゆきて見せければ。憐むべし衛守が屍は。雪にうづもれてよこたはりぬ。皎二郎雪打はらひて見るに。いかにも死顔ながら。見おぼえある老人なれば。胸ふさがり。人の哀もおのが身の。薄命にうちくらべ。只さきだつは涙なり。弓兒も泣聲になりて。見給ふごとく。只ひとり杖柱とたのみつる。老人にさへはなれ。妾ひとりの身となりぬれば。進退ともに途を失なひて。いかにもすべきかたなく。已にさき程。自害して果んとおもひつめて。ものしける折しも。彼熊におどろかされて。しばし手をとどめたるうちに。郎を見つけたれば。甦醒たるこゝちして。こゝまでは立出つ。熊とたゝかひ給ふを。かしこより見て。あやまちあらんかと氣づかひまゐらせしが。郎は風流士なるのみにあらず。力もつよく。武夫の道に達し給ひぬる。猛き健男なり。率爾なるねがひごとには侍れど。かくおもひかけざる所にて。めぐりあひしも。知俱麻の川の。ふかきえにしとおぼし給ひ。妾をいづくへも。ともなひて給はらんや。ふつゝかなる身をいと給はずば。たとひ煮飯使女となりても。かしづきまゐらせん。岐姐の麻衣あさき心とな。おぼし給ひぞ。是非にたのみ侍ると。危急の時にのぞみては。はづかしさも打たれて。わりなくさきゆるを。皎二郎打聞て。しばし答す心のうちにおもひけるは。我木船にてはじめて。此處

人を見し時は。みかく愛慕するが。今は其時とおなじからず。共に天を驚かざる大事を身におひたれば。何のたのしき事ありてか。婦人をたづさふべき。しかりといへども。かゝる山中にて。女の身のひとりさまよふを。見捨て行も又しのびざれば。ちかきにこゝろざして。行所あらば。そこまでは送りとどけて得さすべしと。心をさだめていひけるは。おん身これまでたどり來給ひしも。心ざす所あるならん。そはいづくにて侍るや。弓兒はいく。心ざす所と申すは。かの衛守が弟に。健助といふ者あり。善光寺とやらん。近きあたりに住よしを聞しが。衛守身まかりしうへは。詳にしれがたしといふ。皎二郎はいく。何にまれ。日もはやく果たれば。片時もはやく麓に下り。人里あるかたを尋ね。宿を索て。ゆる／＼ものかたるべし。さるにても老人の屍は。せめて土中にかくさんとて。松蔭の雪かきわけて土をうがち。屍を埋め。松の下枝をきり。其上にさしてかりのしるしとす。弓兒は涙ながらに。衛守が殘せし念珠とりて。掌のうちにすりならし。南無阿彌陀佛。新靈頓證。佛果菩提。父母もろとも。おなじ蓮に導給へ。わきてまうさんは。父上の靈魂。衛守が此世の忠義を憐み給ひ。冥途に到らば。御稱美の御詞を給はれかしと。念じければ。皎二郎も。念佛數遍を手向て。いざすこしもはやく。麓にくだらんといひつゝ。衛守が殘せる兩刀。並に包をとり。おのが包にくり合せて肩にかけ。弓兒を扶て。走りゆかんとしたる折しも。雪顏の音雷のごとくひびき。雪巻風さと吹きおろして。忽眼くらみ。ほと／＼吹倒れんばかりなれば。いそがはしく弓兒が手をとりにて。巖の蔭に身をかぎめ。風の過るをまちける所に。かなたの木蔭より。あやしげなる荒男。兩人あらはれ出て。こなたをうかゞふさまにて。ちか／＼とあゆみ來。其扮作いかにとなれば。峯菜もて編る。雪帽子をかぶり。蓑を著。蒲擊手をかけ。齒音の脛巾をまとひ。藥緘をむすび櫛をはき。山刀をおび。一箇は矛をとり。一箇は鎗をさげたり。皎二郎雪あかりにすかし見て。大にあやしみ。弓兒を背後にかこひ。聲あらゝかにいひけるは。此山中には盗人おほく住て。しばしば人を害するよし。曾て聞およびぬ。汝等がありさまを見るに。山籠の盗人にまぎれなし。我をよのつねの旅人とお

もひて。剣とらんずるか。かしこを見よ。手負の荒熊をすら。唯一刀にしとめたる。武夫なるぞ。もし汝等が頸の皮は。熊の皮よりもあつきや。速かに逃去ずんば。後悔せんずといひて。刀の尻をらぎまにかへし。柄をにぎり。彼等もしはたらかば。只一打と眼をくぼりてひかへたり。彼者ども身をかぢめ。腰をりて。旅人必ずはやまり給ふな。我輩は。山賊のたくひにあらず。此山の麓に住。獵戸なり。前程此峯にて。穴熊を追出し。槍を突損じて取にがしたれば。そのあとをしたひ來て。こゝかしこを尋ねつるが。今おん身黒き雨衣を著て。巖の蔭にかまじり居給ひしを。熊と見たがへて。かくうかどひよりしなり。かならずあやしみ給ふことなけれ。今うけ給はれば。熊をしとめしとの給ひしが。そは實にて侍るやといふ。皎二郎これを聞きて。やうく心を安んじ。其方等が尋る熊にてあらん。我今かしこにてしとめたり。かれ見よとて。石群の間を指さしければ。獵戸等信ぜずながら。かしこを見るに。其言にたがはず。大熊倒れ死してありければ。兩人舌をふるひて驚き。皎二郎をつれなく打まもり。旅人の姿を見申せば。よわわしう。たをやぎたる若人なるが。何等の術ありて。手負の荒熊をかく安々としとめ給ひしぞ。年ひさしく。熊とりをなりはひとする。我輩だに。手にあまりたる老熊なるを。只一人の力を以て。殺し給ふ事。よも凡人にてはおはさじ。山の神我等が苦辛を憐み給ひて。權に姿を現し。熊を殺し給ふならめと。駭をすゝりつゝいひ。額を雪におしうづめて禮をなし。掌を合せてをがみなどすれば。皎二郎はをかしさをしのび。我は山の神にあらず。遠國より來つる旅人なり。案内しらぬ山路にふみまよひ。夜に入たるうへに。雪深く。殊更足弱をとまひたれば。ほとく艱苦にせまりて。せんすべなし。もし我等を導て麓に下り。一宿すべき家をもとめて得させなば。勞資には彼熊をあたふべきが。いかにといふ。獵戸等これを聞て。大によろこび。もし熊をたまはらば。我輩のおほいなる福なり。今命られしことは。いと安しといひて號示にやあらん。緒をつけて襟にくゝりさげたる。小笛をとりて。吹ならしければこゝかしこより。おなじさまなる獵戸三人。火把をふりてらしてはせのつまりぬ。始めの兩人彼等にもかひて。しかんくのよしをかたりければ。此者ども大によろこび身をかまめて。皎二郎にあつて禮をなし。いざかまへ。案内しまゐらせんとて。一箇は火把をとりて前にたち。一箇は弓兒を脊に負。一箇は皎二郎に權をはかしめ。行李をとりてせおふ。残れる者は。藤葛を以て。熊の四足をくゝり。皎二郎が熊とたゝかひたるかの櫃の棒をひろひとりて。櫃の摠擔とし。兩人して熊をになひて後につき。皆一同に。麓をさして急ぎ行ぬ。扱皎二郎。荒熊をしとめたるは。力量のすぐれ。武藝の達したるのみにあらず。熊を殺したる刀は。則彼壺斬の寶刀なれば。劍の威徳によりて。さばかりの猛獸を。安々としとめ。危き一命をまぬかれたるならん。實東海の黃公が。虎を厭したる金刀。吉備の縣守が。虬を斬し靈劍にも。をさくおとるべからずと。のちくこれを聞人感じあへり

第八段 扇にかきつけたる歌紅糸をひく事

かくて皎二郎は。獵戸等に導れ。碎瓊亂玉をふみ分て。道をいそぎけるがかの獵戸等は皆影黒に血眼にて。山狼のごとき荒男なれども。志はかへりて老實にて。皎二郎等兩人を深くいたはり。道すがら熊をもらひたるを。あまたたびいひ出して喜び。小女を見申すに。山路に足をいたため給ひしと見えていと難爲なり。女子の身に。かゝる雪國の旅をし給ふは。いとをしきことにこそ。おん身も又熊とたゝかひ給ひてさぞ疲れ給ひつらん。小女はおん身の妻にておはすや。妹にておはすや善光寺詣やし給ふ。年若き人々には奇特のことに侍りなど。いひもてゆくに。二里ばかりも過しとおぼえて。やうく麓につきぬ。雪はますくつよくみだれければ。獵戸等田家ある方に走り行雪車を二ツかり來て。兩人を乗せ。聲をそろへて雪車歌をうたひつゝ。ひきゆく其歌は

深山清水は底からすむが君のこゝろもそこからか
 山で小柴をしむるがごとくこよひそさまとしめあかそ

とだみたる聲してうたふもをかし。かくて又。一里ばかりも過たらんとおもふ頃。やう／＼一簇の人家ある處にいたりぬ。鮫二郎此あたりを見るに。家はおほくあれど。旅店とおぼしきは一軒もなく。皆うちよるぼひたる小家にて。深く雪にうづもれぬ。いづれの家に案内してやどすかと。いぶかりおもひけるに。なかに年のころ五十ばかりの獵戸。ことによくいたはりけるが。立とどまりていふは。みな衆何とおもふぞ。我々があばら家は。せまきうへに風とほして寒く。此客官等をやどすべき便なし。上の村の獵者殿の空座敷をかりて。客官等をやどし申さんとおもふが。いかにといへば。一箇が答て。かの獵者めは。おのれ獨富にほこりて。人には物をしみする奴なれば。心よくうけがへばよきがといふ。そは氣づかひすな。彼は欲深きものなれば。其報に熊の肉を贈といはゞ。速かにうけひくべし。ことに家をかゝるのみなり。夜具などはせんすべなしといへば。みな／＼それにきはめよ。よからんといひつゝ。又雪車をひきて。およそ十町ばかり行長屋門をかまへたる。大家の前にとどまりてかの五十ばかりの獵戸。まづ内にいりてばかりありて出来り。よし／＼。我富妻那尊者の舌をたゞきて。速かにうけがはせぬ。熊は源二が所にあづけよ。雪車は平五が所におけといひて。鮫二郎等兩人を雪車よりおろし。いざたまへといへば。残りの者どもは包をとりてわたし。客官我等はみな。こゝにていとま申すぞゆるゝかにやすませ。藤一老父よく案内してあげませたのみ申すぞといひて。わかれ去りぬ。鮫二郎等導れて裏にいり。こなたかなたを顧るに。よほどの豪家と見えて。藪ぶきながら。棟高き大家立ならび。土庫も二ツ三ツ見ゆ。牛馬もあまたやしなふさまなり。しばしたゞずむうち。家僕とおぼしきが。ともし火をとり鑊子をならしつゝ出来て。はなれたる空家の戸櫃をひらき。火をともし。扱獵戸にむかひて。我等はもはや管まじ。おん身にまかすといひてゆく。鮫二郎兩人は。身上の雪を打はらひ。脛巾草鞋をとく間に。獵戸一盃の湯をとり来て足をそゝがしめなどして。坐敷にとほし。藪柴とり来て。圍爐裏にたき火してあたらす。鮫二郎は湯からぬ志願を感じてあつく湯をのべ。湯を火にかわかしたる。弓兒はみだれたる。湯をあたへた。

うやう心やすまりぬ。獵戸又。腹につけたる網の袋をとりていふは。さだめて飢にのぞみ給ひつらんが雪夜のこゝとなれば。急にとゞへまゐらせがたし。こは我等が山かせぎの糧にて侍り。客官等の。食し給ふべき物にはあらねど。清くとはきよし。しばしの飢をしのぎたまへといひて。さし出し。酒はいかにぞ。すこしもちゐて。寒氣をはらひ給はずや。此村すゑに。濁酒のあるを。もとめ来てまゐらせんといふ。鮫二郎いはく。我酒はつねに一滴もせず。かならずしも心をつひやしたまふな。獵戸いはく。夜具なくて。さぞさむけくおぼされん。此家のあるじは。おほく費をもちて。よろづに不足はなけれど。人の難儀をすくふことをこのまざれば。物を借んも便なし。明なば又まゐりて。道案内ながらに。送りまゐらせん。空を見るに。雪もやがてぞやみなん。はやくやすみ給へといひて。戸をひきたてて行しが。又立もどりて。たき火をよくけし給へと。念入て出行ぬ。鮫二郎は。益彼が情深き志を感じ。かの網の袋をひらき見れば。木の皮もてつくられる。標子めく器に。稗の團子をいれおきぬ。飢に堪かぬる折なれば。やむことを得ず。これをうちくひて。弓兒にもあたへけるが。めなれぬくひ物なれば氣味よからずとてくはず。餉の残りたるをすこしくひて飢をしのぎぬ。扱弓兒。鮫二郎がそばちかくよりていひけるは。前の年木船にて始めてまみえし時は。郎のみやびたる姿にめてて。心をなやましぬるが。今日は又。あら熊とたゞかひ給ひしを見て。猛き健男なるにめてまどひぬ。前の年の心は。化心なり。今の心は真心なり。其ゆゑいかにとなれば。長々しけれど。きゝて給はれかしとて。聲をひそめ。父左衛門。管領持氏公の隠謀にくみし。足柄山にて賊の爲に殺れ。家を没收せられしより。さすらひて旅に赴きしまでの始終。衛守が忠義の志身まかりし事まで。こまやかにかたり。いかにもして彼賊を尋ね出し。父の仇を報んものと。心はやたけにおもひ侍れど。女の身のかなしさは。力およばず。くちをしうも。かひなし。なか／＼にいきながらへて。ものをおもはんより。自害して死んと覺悟をきはめたる折しも。ゆくりなく郎にめぐりあひ。荒熊を殺し給ひし手なみを見て。たのもしう嬉しさにたへず。自害をとどまりて。ともにこれまてまゐり

つ。これも深きえにしとおぼし給ひて。妾を妻となし給ひ。父の敵を尋出し。仇を報て給はれかし。慈悲ぞ情ぞ。あながちに願奉ると。膝の上にもろびおつる涙をのごひつゝいへば。皎二郎は。只さしうつむきて。しばしは返答もせざりけるが。やゝありていへるは。げに途中の行合にも。たのむとあれば。兩刀をおぶる者の。ひくべき道はあらねど。一ツには其賊を尋出さんこと。雲をにぎるがごとし。二ツには勝負は時の運なれば。利の劍ながら。又かへり打にあはんもはかりしるべからず。やつがれ命を捨る事。人にすぐれてきらひなり。わりなきたのみを。なげやるにはあらねど。危きことはけしてしがたし。命にかゝはらぬことにてあらば。何にまれたのまるべしと。思ひの外に臆したる答を聞きて。弓兒興醒顔になり。卑怯至極の答かな。おん身兩刀をおぶるからは。すこしは武夫の道をも。わきまへつらん。事によりては。百姓商人すら。命をすつるは。男のまけじ。魂ならずや。武士をまねびながら。女子に大事を語せて。命に管ぬ事ならば。たのまるべしとの一言。卑怯とやいはん。臆病とやいはん。それ聞ては何いはんもかひなし。とてもながらへがたき命なりとて。涙を袖にかきはらひ。傍の刀をとりて拔はなし。ほとく自害せんと見えけるを。皎二郎。やれ氣短し。はやまり給ふなといひて。刀をもぎとり。今のごとくすげなういひしは。いと深き縁故あり。さばかりおもひつめたる。心底を見るうへは。せんすべなし。つゝまず語りきこゆべしとて。身の薄命の始終を。枝葉も残さず。こまやかにものがたり。やつがれ父の仇を報んため。三年前に家を出て。諸國をめぐり。百折千磨の辛苦をいとはず。さまざまに姿をかへ。ちよに心をくだきて。敵の行方を尋ねれども。今においてしれざれば。只これを愁ひて。寢食も安からず。旅寢のうちに。むなしう三年の月日をおくりけるが。宿志を遂げざるうちは。いつまでも。家に歸るまじと心に誓。陸奥のはてまでも尋ねゆかんと。はるけき旅路をこころざして。こゝまではまうて來つ。やつがれ宿志をとげて後。おん身の父の敵をも。たづね出して打得せん。おん身を妻とするからは。我爲にも影の仇なり。いかでかよそに見なさんや。もし又かへり打にもあふならば。拙き運とあきらめて。

我なきまゝのとのひ。香花をも手胸でたべ。かく互に語りあひて見れば。身の運命は。一ツぞかし。此ゆゑにこそ心に。もあらぬ。情なき事を申つれといひて。打しほるれば。弓兒はこれを聞て驚き。それとはしらず。女のあさき心から。あらぬ事を申せしは。ひとへにゆるさせ給へといひて。助太刀のたのみかなひしこと。且奇縁のむすばれしことを。ひたすらによろこびぬ。皎二郎かさねていはく。前の年木船にて。おん身の忘れおきたる扇をひろひとりて見しに

信濃なるあひ染川のはたにこそ宿世むすびの神はましませ

といふ歌のかきつけありしも。ともにかくさすらへて。萍の水にたゞよひ。此信濃路をたどり來て。あひ染川のよどみに。ながれあふべき宿世にて。かねて月老の紅糸をむすびおき給ひしならん。誠是奇遇なり。なみくのえにしにあらずといへば。弓兒打聞て。そは妾が筆すさびに歌かきて。腰元等にとらせつる扇なり。郎の目にかゝりしとは。露ばかりもおもはざりき。拙き筆の。はづかしさよといひて。顔をくれなみにす。擬皎二郎詞を正していはく。夫婦のかたらひは人の大原なり。媒なうして私にさだむるは。禮において虧る所あり。互に本意をとげて後。媒人をえらびて。婚姻をととのふべし。それまでは。兄弟ともおぼされよといひて。露ばかりも。みだりがはしきことはあらざりけり。皎二郎又いはく。我熊に出あひし時。避のがるべき道なかりしゆゑ。せんすべなかつたかひたれど。今おもへば危き事なり。もし熊の爲に一命を失はば。いづれの命を以てか仇を報べき。身に恙なかりしも。畢竟亡父尊靈の。守護し給ふゆゑならんといひて。行李のうちにつさへし位牌をとり出して。しばらく拜しければ。弓兒もともをがみけり。時に鳥の鳴聲をここに聞ゆ。皎二郎たちて。傍の窓をひらきて見やれば。いつの間にか雪ふりやみて。月光雲をひらき。雪蟲の飛すら。見とむるばかりあきらかなり。見をはりて窓の戸をおしたつ折しも。外のかかにももし火の光りひらめき。秋の聲などし人の足音す。皎二郎窓の戸をほそめにして。ひそかに見るに。年のころは五十をよほど過たらんとおぼしく。頭は斬髪にて白髪生交り。身の丈はひくく。耳のみ長く押たれて。唯狛犬を見

るごとく身には紙子に錦の火打入たる。外套めくものを著色の衿巻して。われは顔なる老人。奴僕三人に棒をもたせ大把をとらせ。みづから敷石に杖をつきならして四方のくまをを見めぐり。用心おごそかなるさまなり。鮫二郎おもへらく。前に獵戸等がこゝは鑿の家なりといひしが。かの老人はあるじなるべし。富る者の心がけは格別なりと感じて。戸を押したる折しも。遠寺の鐘のひびくをかぞふれば。はや子の時なれば。すこし氣をやすめんと。ついでるやうにして。柱に身をよせ。膝胸に腮をのせてねふらんとす。弓兒は傍に手枕してふしぬ。兩人は身も心もいたく疲れたれど。夜のふくるにしたがひ。朔風壁のひまより吹とほして。寒氣はげしく。ことに此空家は。馬舎に隣たれば。馬の足ふみならず音。耳にひびきてねふられず。只いたづらに眼をとちたるばかりにて。一時ほど過けるが。母屋のかたに。盗人いりたるぞ。てあへ〜とよばはる聲きこゆ。鮫二郎おどろきて身を起し。窓の戸をほそめにひらきて見るに。旅人の姿に扮したる盗人四五人。母屋のかたにどろ〜と押入と見えしが。しばしありて。あるじの鑿を中にひつ提出來て。門上につりおきし轎子をおろして。その内におし入。これをかゝげて一同遁去ければ。家僕等大勢。棒鎌鋤鍬のたくひを打ふりておひかけ出。家内大に騒動して。うへをしたへとまどひけり。弓兒も人聲を聞いて驚き。何事ぞとおそれまどふを。聲をたかうしたまふぞ。母屋に盗人のいりたるなり。我等只獵戸の案内にまかせて。家内の者にしかと對面もせず。こゝにやどりたるうへに。盗人等はみな旅人の姿なれば。我輩も旅人ににせて。ぬす人の手引をせしなど。うたがはれて。連累にあはんもはかりがたし。敵をねらふ大事の身にて。少しも危きにをるべからず。幸ひ此家のうしろに徑路あるを。さき程見つけおきぬ。かしこよりのがれゆかば。家内の者の知る事あらじ。いざ〜といひて。いそがはしく身づくろひし。うしろの壁を破りてくどり出。襦を着弓兒を背に負。月の光りに乗じて走り行ぬ。扱かの鑿者は別人にあらず。近江の堅田に住し眼科内海鰻菴なり。かれ奇術を得たりといへども。貧欲の心ふかく。貧人の病をすくはざれば。許多の人の恨をうけて。堅田に住がたく。十年ばかり前當國にうつりて。おほく山林田地をもとめ。半ばは農桑をなし。半ばは鑿業をなして。家ますす〜當けるぞ。爰に又大蛇太郎は賊首となり。大蛇太郎と稱して。足柄山に住しが。かしこを逃て下野國にいたり。黒髮山の岳窟にかくれ住て暴悪ややつり。おひ〜小賊をあつめて。已に三十餘人山ごもりす。かの旅人に扮したる盗人等も。すべてみな大蛇太郎にしたがふ者どもなり。鰻菴が熟睡たる所を捉へ。布を以て兩眼をつみ。轎子におし入れ。きびしくかこみてかけ出し。家僕等大勢。あとをしたひて追來るを。盡く打散して飛がごとくに馳行けるが。鰻菴は魂きえ〜になりて。遁出ん力もなく。轎子のうちにうつぶし居たり。かくて盗人ども。晝は山林にかくれてやすみ。鰻菴にも狼などあたへ。夜は夜どほしに走り。やう〜三日を過て黒髮山にいたりぬ。鰻菴は轎子のうちにありて。いづくへつれ行るゝやしらず。高きに上り低きに下れば。唯嶮き道を行ぞとおもひ。松吹風稍をならし。谷の水音物凄く聞ゆれば。深山にいたりしならんとおもひつゝ。今も命をとらるゝかと。羊の歩みに異ならず。賊等は岳窟のうちに轎子をかきすゑ。鰻菴を引出し。眼をつみたる布をとり。ひざまづかしめおきて。皆奥の方へ行ぬ。鰻菴は唯惘然として。夢に夢見るおもひをなし。魂飛騰きえて。人こゝちはなかりしが。やう〜頭をあげて四方を顧るに。いづれの所といふ事をしらず。只廣大なる岳窟なり。うちに大なる草屋あり。槍斧弓箭太刀のたくひを。いくばくともなくかざり。傍に鐵器をすゑて。松をとます。火の光りあきらかにして。槍斧にてりそひ。きら〜と光りて。見るにすら身の毛そはだちぬ。奥は深くして。四五家の小家をたてつらね。これにも火の光り明かなり。こなたを見れば。人とも獸ともわきがたく。あやしげなる姿の者。たき火のめぐりに居ならぶ。頭の毛は松蘿をかきみだせるごとく。腮の鬚は枯草を刈残せるごとく荒熊のやうなる眼つき。野猪のやうなる鼻つき。狼のやうなる口つきしたる者どもなれば。益驚きこれは妖怪の栖にや。天狗のかくれ家にや。さもなくては立山の地獄なるべしとうたがひ。うちわな〜きて居たりしが。しばしありて。色黒き男走り出。唯今寨主これへ出給ふといひて。草屋のはしちかく褥を敷。几を

つりて。おほく山林田地をもとめ。半ばは農桑をなし。半ばは鑿業をなして。家ますす〜當けるぞ。爰に又大蛇太郎は賊首となり。大蛇太郎と稱して。足柄山に住しが。かしこを逃て下野國にいたり。黒髮山の岳窟にかくれ住て暴悪ややつり。おひ〜小賊をあつめて。已に三十餘人山ごもりす。かの旅人に扮したる盗人等も。すべてみな大蛇太郎にしたがふ者どもなり。鰻菴が熟睡たる所を捉へ。布を以て兩眼をつみ。轎子におし入れ。きびしくかこみてかけ出し。家僕等大勢。あとをしたひて追來るを。盡く打散して飛がごとくに馳行けるが。鰻菴は魂きえ〜になりて。遁出ん力もなく。轎子のうちにうつぶし居たり。かくて盗人ども。晝は山林にかくれてやすみ。鰻菴にも狼などあたへ。夜は夜どほしに走り。やう〜三日を過て黒髮山にいたりぬ。鰻菴は轎子のうちにありて。いづくへつれ行るゝやしらず。高きに上り低きに下れば。唯嶮き道を行ぞとおもひ。松吹風稍をならし。谷の水音物凄く聞ゆれば。深山にいたりしならんとおもひつゝ。今も命をとらるゝかと。羊の歩みに異ならず。賊等は岳窟のうちに轎子をかきすゑ。鰻菴を引出し。眼をつみたる布をとり。ひざまづかしめおきて。皆奥の方へ行ぬ。鰻菴は唯惘然として。夢に夢見るおもひをなし。魂飛騰きえて。人こゝちはなかりしが。やう〜頭をあげて四方を顧るに。いづれの所といふ事をしらず。只廣大なる岳窟なり。うちに大なる草屋あり。槍斧弓箭太刀のたくひを。いくばくともなくかざり。傍に鐵器をすゑて。松をとます。火の光りあきらかにして。槍斧にてりそひ。きら〜と光りて。見るにすら身の毛そはだちぬ。奥は深くして。四五家の小家をたてつらね。これにも火の光り明かなり。こなたを見れば。人とも獸ともわきがたく。あやしげなる姿の者。たき火のめぐりに居ならぶ。頭の毛は松蘿をかきみだせるごとく。腮の鬚は枯草を刈残せるごとく荒熊のやうなる眼つき。野猪のやうなる鼻つき。狼のやうなる口つきしたる者どもなれば。益驚きこれは妖怪の栖にや。天狗のかくれ家にや。さもなくては立山の地獄なるべしとうたがひ。うちわな〜きて居たりしが。しばしありて。色黒き男走り出。唯今寨主これへ出給ふといひて。草屋のはしちかく褥を敷。几を

すゑて。相待さまなり。ほどなく出来る人を見るに。身の丈は六尺に過。相貌兇惡にして。身には熊の短裘を著。鹿の鞋子をはき。長き太刀をおび。二人の美女に手をひかれて。褥のうへに跣居たり。此人は乃。是賊主大蛇太郎なりけり。太郎小賊をして。鰻菴を面前に引出さしむ。鰻菴いかなるめにあはんとおもへるさまにて。胸をば蛙のごとくにうごかし。目は魚のごとくにきらめかして。かしこみをりしが。太郎いひけるは。鰻菴とやらん汝縁故をしらずして。さぞな驚きつらん。汝をこゝにむかへしは別儀にあらず。我頃日鳥目の病を愁ひ。晝は物を見れども。黄昏にいたりては全く見るあたはず。涙の出ることおびたしく。眼中針を刺がごとくに痛て。たへしのびがたし。我は是賊主なり。凡盗人は晝をいやしめて。夜をたふとむものなるに。鳥目を病ては何せんもかひなし。ことに我生れてより以來。涙といふもの只一滴も出したる事なきに。眼病によりて涙の出ること。もつともいまはしきことなり。汝は眼療に妙をきはめたるよしを聞及びしゆゑ。小賊等をつかはしてむかへたり。我すこしも汝を害する心なければ。氣を安んじて。權こゝにとゞまり。我此病を療治せよ。我病だに平癒せば。速かにはなちかへすべし。もし又我命をそむかば。立地に頭をはぬべきぞ。返答いかにとひて。もし眼あきらかならば。はたと白眼べき形勢なり。鰻菴身をぢめていそがはしくいひけるは。命だにたすけたまはらば。療治のことは。やつがれ力を盡してつかふまつるべしとて。やうやう心おちつきければ。太郎これを聞てよろこび。近くまるれといひて床の上にのぼらしめ。病の様子をうかどはしめければ。鰻菴おづ／＼はひより。且脈をおしてしばらく考へ。指をもつて眼皮をひるがへし。眼中の様子をよくよく見をはりて退き。指をくみて膝の上におき。眉をしまめていひ出しけるは。夫人に双眸あるは尺に兩曜あるがごとく。一身の至寶にして。五臓の精華をあつむ。日月に一時の晦ことあるは。風雲雷雨のいたす所なり。眼の光明を失することあるは。四氣七情の害する所なり。目は肝に通じ。血を得てよく明なり。肝經は木に屬して。五輪のうち風輪とす。風輪の氣に。肝氣の虚傳へて眼中に入ば。昏々として涙を出し。滴。窮なしといへり。俗に鳥目と稱するものに二症あり。一に高風雀目。二に肝虚雞盲なり。雀目は黄昏に物をみず。灯を點するに至りては全く物を見ず。是乃。肝中に熱を積み。腎水衰へて。肝火を制伏することあたはざるがゆゑなり。雞盲は酉時黄昏に至りては少しく物を見ず。灯を點する時に至りては全く物を見ず。是乃。肝の虚なり。今寨主の目疾をうかどひ見るに。惡血金井瞳仁の水内に灌入こと。洪水の井中に流れ入かたちのごとし。かの二症のたぐひとおなじからず。甚難症なり。外寒邪をふれて五輪をそこなひ。内熱毒をあつめて五臓をやぶり。寒熱相たゝかひて。惡血眼中にあつまり此症となる。おそらくは深山に住給ひて。雲霧の濕氣をうけ。獸肉を食し熱酒を飲むこと過度し給ひて。内に毒氣をたくはへ。しかのみならず。常に怒ことおほくして。肝經をやぶり給ひしならん。此症をなづけて。内外併傷水母喪鰻の症といふ。もつとも不治の難症なり。もろ／＼の眼科の書に。いまだ此症のことを説ず。偶放光現瑞經に載たり。ゆゑに雀目雞盲のたぐひと誤つ者おほし。もし此儘にて十日を過なばとく盲人となり給ふべし。子夏。左丘明が患。ちかきにあり危し／＼といふ。太郎これを聞て驚き。汝が説ところ甚だ明なり。我は唯尋常の鳥目とおもひて。かろがろしく心得ぬ。望むらくは汝が術を以て。我此患をすくへ。平癒せばかならずおもく賞すべし。鰻菴いはく。寨主の難症をすくふべき術外になし。只我家に蠻人傳方の秘藥あり。蠻名を。フラアテク。アメノマ。ルウダと稱す。我家において。離莫明晴散となづく。此奇方をもちるば。速かに平癒あるべきが。その藥劑のうち一種。甚だ得がたきものあれば。急に調合しがたしと。頭をかきツ、いへば。太郎打聞て。その得がたきといふは何等のものぞ。凡人間世界にあるべき物ならば。我術を以て得ざるといふことなし。鰻菴いはく。腹籠の子をとり。胎衣とともに鍋中に煮て肉醬となし。胞子醃となづけて。藥に和し用ゆ。これ得がたき物なり。太郎呵々と打笑ひ。得がたきといふは。燕の子安貝か。火鼠の裘か。さもなくは閻羅大王の聯醬。阿羅々仙人の生臍にもあらんかと。おもひしに。それはいと安きことなりとひたすらわらひて。心きゝたる小賊をよび出し。汝明日より七日を限り孕女を尋出して。腹籠

稱するものに二症あり。一に高風雀目。二に肝虚雞盲なり。雀目は黄昏に物をみず。灯を點するに至りては全く物を見ず。是乃。肝中に熱を積み。腎水衰へて。肝火を制伏することあたはざるがゆゑなり。雞盲は酉時黄昏に至りては少しく物を見ず。灯を點する時に至りては全く物を見ず。是乃。肝の虚なり。今寨主の目疾をうかどひ見るに。惡血金井瞳仁の水内に灌入こと。洪水の井中に流れ入かたちのごとし。かの二症のたぐひとおなじからず。甚難症なり。外寒邪をふれて五輪をそこなひ。内熱毒をあつめて五臓をやぶり。寒熱相たゝかひて。惡血眼中にあつまり此症となる。おそらくは深山に住給ひて。雲霧の濕氣をうけ。獸肉を食し熱酒を飲むこと過度し給ひて。内に毒氣をたくはへ。しかのみならず。常に怒ことおほくして。肝經をやぶり給ひしならん。此症をなづけて。内外併傷水母喪鰻の症といふ。もつとも不治の難症なり。もろ／＼の眼科の書に。いまだ此症のことを説ず。偶放光現瑞經に載たり。ゆゑに雀目雞盲のたぐひと誤つ者おほし。もし此儘にて十日を過なばとく盲人となり給ふべし。子夏。左丘明が患。ちかきにあり危し／＼といふ。太郎これを聞て驚き。汝が説ところ甚だ明なり。我は唯尋常の鳥目とおもひて。かろがろしく心得ぬ。望むらくは汝が術を以て。我此患をすくへ。平癒せばかならずおもく賞すべし。鰻菴いはく。寨主の難症をすくふべき術外になし。只我家に蠻人傳方の秘藥あり。蠻名を。フラアテク。アメノマ。ルウダと稱す。我家において。離莫明晴散となづく。此奇方をもちるば。速かに平癒あるべきが。その藥劑のうち一種。甚だ得がたきものあれば。急に調合しがたしと。頭をかきツ、いへば。太郎打聞て。その得がたきといふは何等のものぞ。凡人間世界にあるべき物ならば。我術を以て得ざるといふことなし。鰻菴いはく。腹籠の子をとり。胎衣とともに鍋中に煮て肉醬となし。胞子醃となづけて。藥に和し用ゆ。これ得がたき物なり。太郎呵々と打笑ひ。得がたきといふは。燕の子安貝か。火鼠の裘か。さもなくは閻羅大王の聯醬。阿羅々仙人の生臍にもあらんかと。おもひしに。それはいと安きことなりとひたすらわらひて。心きゝたる小賊をよび出し。汝明日より七日を限り孕女を尋出して。腹籠

の子をとり來れ。かならずおこたるなど。おごそかに命じ。鰥菴には酒食をあたへ。よくやすましめよといひつゝ。又美女に手をひかれて。奥ふかく入れれば。鰥菴は吻とため息をつきて。甦醒たるこゝちしけるとぞ

優 曇 華 物語 卷之四上終

優 曇 華 物語 卷之四下

江戸 山東軒 主人編

第九段 野猪老嫗腹籠の兒をとる事

爰に又。かの來海衛守が弟に。健助といふ者ありけり。諸の武藝に達し。わけて弓ひく業をよくし。力量人にすぐれたる武夫にて。原は兄とともに渥美左衛門に仕へぬ。左衛門かれが爲人のなほく。且武士の業に達したるをめで。あまたある家士のうちにも。別に憐みをつくはへてめしつかひけるが。偶左衛門が妻の侍女。眞袖といへる者と。みそかごとし。つひに其事あらはれて。家の掟なれば。兩人とも死刑におふべかりしを。左衛門が妻いとびんなくおもひ。かれ等をとらへ。うちいれおきたる一間を。ひそかにひらきて走らしめければ。兩人は涙をおとし。かゝる報はいつの時にかせんと。ふしをがみつゝ。夜にまぎれてのがれ出しが。左衛門も妻が情のはからひならんと推量ければ。追手をもかけず。其儘にすておきぬ。兩人は日蔭にある身となり。たのむ木蔭も雨もりて。身をかくすべき所もなければ。眞袖が所縁の者の。信濃國にあるを力に尋行。善光寺のほとりに住家もとめて。眞袖を妻とし。劍法打拳を人に教て。かそけき便とし。ほそき烟をたてけるが。業はたくひなく聞ゆれど。こゝろざし高く。人にくだらざる性なれば。おのづから人もなつかず。こゝにも住うきこと出來て。又下野國にうつり。黒髮山をはなるゝこと。一里ばかりこなたの村に住ぬ。此あたりには。武藝を學ぶ人もなければ。せんすべなく。獨戸の業をなしていとなみとす。又ふたりがなかに男子をまうけ。名を小松とよびて。ことし五歳になり。生れつきかしく。顔かたちもいと

5

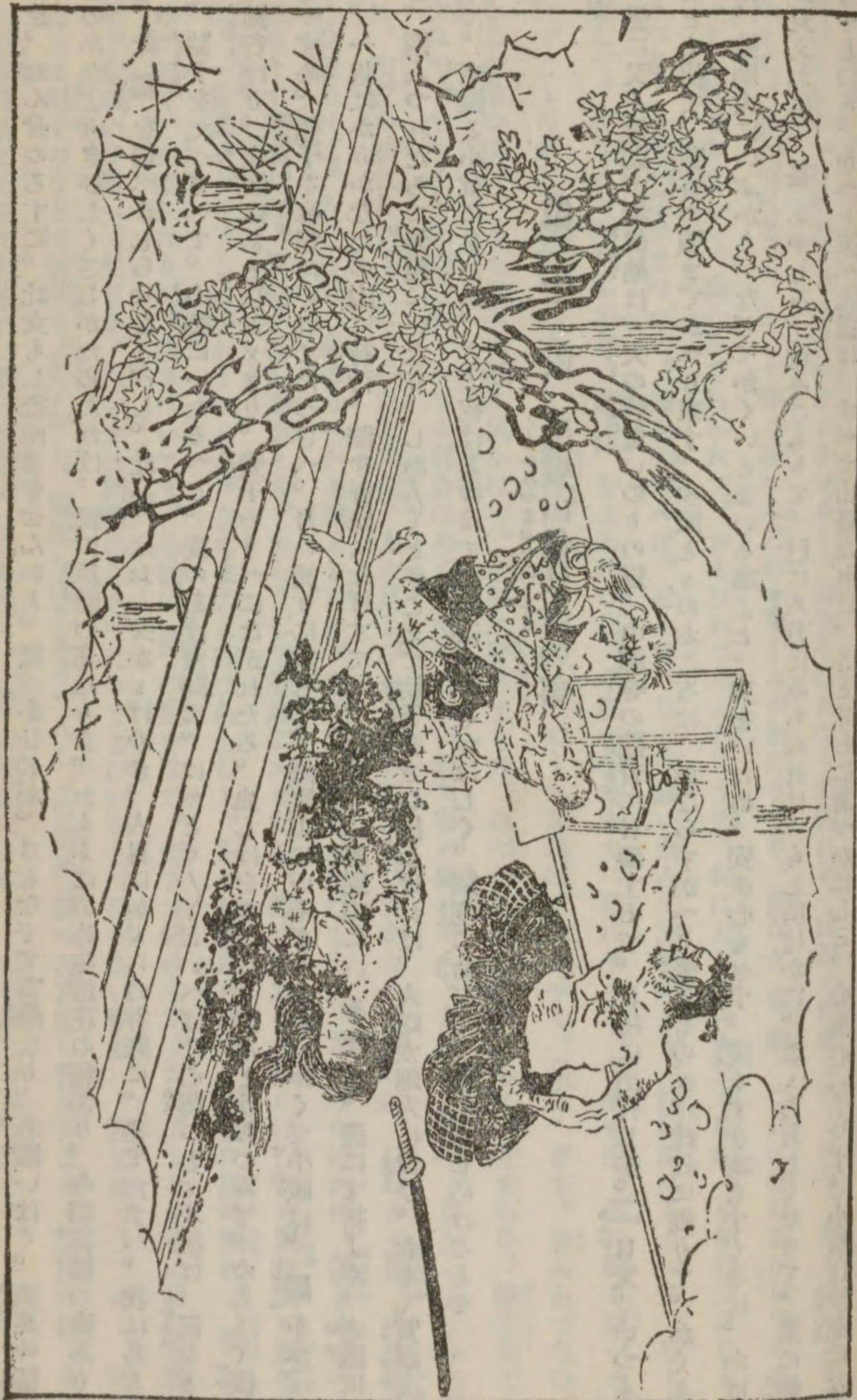
よらなり。扱あるに。健助。去年の冬より長病を愁ひ。百日あまりなりはひをせざれば。益々困窮し。一重の衣やれたる器までも。みな薬にかへ米にかへて。塵ばかりの物も残さず。病は日に異におもりて。いつ怠はつべうも見えざれば。妻はかなしき限りなく。ひねもすよもすがら。枕方につきそひ。心を盡して看病けれど。そのかひも見えねば。今は神佛の力をたのむより外なしと。ひたすら中禪寺の觀音をいのりけり。爰に又黒髮山の麓。茫々たる曠原のうち。黄土小屋をいとなみて。ひとり住ぬる老女あり。うちよろぼひたる破敗屋の。壁の骨あらはれて。灯火にかゆる月をもらし。雷にくだかれし古松の。軒にそびえて。葛藟はおのがまに／＼はひまとひ。苔は深くむして。老龍の雲にのぼるか。うたがはる。高梢颯々として。夜雨櫃を敲の外。人跡たえたる住家なり。抑此老女は。前頃。足柄山の麓。竹の下道に。酒店をかまへて。ゆき／＼の旅人をうかがひし賊婆なるが。原は穩婆にて。生れつき貪欲の心ふかく。毒惡強氣の者なり。一日足柄の山中にて。手負野猪とたゝかひ。片目を牙にかけられて。陥となりしゆゑに。譚名を野猪老嫗と稱じけり。かれ大蛇太郎にしたがひ。賊の徒中にくはりて。しばらく彼地に住しが。ちかごろ太郎とともに。當國にいたり。おもては子をとる事なりはひとし。或は墮胎の薬を賣り。或は人の子をまびき。又は人の子を養ひて金をむさぼり。その子をくびりころして。病死といつはり。門ちかき古井のうち。屍をかくす事。いくたりといふ敷をしらず。たぐひまれなる惡婆なり。扱一日。ひちかさ雨とかふり來て。いとあわただしき黄昏。外のかたに人のうめく聲す。老嫗芋を拈さし立出て見れば。年のころはひ廿四五とおぼしき女。身はとき物の肌薄き衣を着て。いとまづしきさまなるが。なみ／＼ならぬ女の。さすらへしはてと見えて。人品賤しからず。見めかたちうるはしく。顔のかゝり手脚のつまにいたるまで。いとよらにて。頭髮を梳す面上をいろどらずといへども。自然の美艶。人の眼を奪ふばかりなるが。柴垣に身をよせて。くるしげにうめき居たり。老嫗近くよりて。婦人はいづくの人かはしらねど。急病に苦み給ふと見うけぬ。いとをしきことにこそすこしもはゞかり給はず。

こなたへいりて。保養し給へとて。春さすりなどし。瘧氣のさしこむにや。血の道になやみ給ふにやといひつゝ。懐に手をさし入れて探り見れば。いはた帯をむすびて。よほど月みちたるさまなれば。心中且そぞろに悦び。益々猫撫聲して。婦人はみごもり給ふと見ゆるが。いく月に成給ふぞ。女はいく。妾みをもちて。八月に成りぬ。けふしも此邊に詣來しが。途中にて俄にこゝちあしうなり。たへがたく侍れば。お家の門近く立よりて。さわがせ申す。ひとへにゆるし給へといへば。老嫗ほゝろみ。少しも氣づかひ給ふな。幸ひおのれは。子をとる事なりはひとして。妊娠の婦人をあつかふことは。年ごろ手なれたる業なれば。よく介抱まゐらせん。こゝにありて冷氣をうけ。ひえ給ひてはわろし。こなたへいりて。やすらひ給へといひつゝ。手をとりにて裏にともなひ。しづかに腹をなておろしなどして。介抱ければ。淺からぬ志のほど。まうし盡しがたし。よき門に立よりて。かゝる情にあづかるは。妾が幸ひなりといふを。老嫗打聞て。かならずしも心をつかひ給ふな。おん身の宿におはすごとくにおぼし。心ゆりてよく氣を養ひ給へといへば。女よろこび。うちとけて。しばしやすらひけるが。やう／＼少しこゝろよくおぼえければ。夜のふけぬうちに。いとままうしてまかりなんといふを。老嫗とどめて。此雨にぬれつゝ歸り給はゞ。また途中にてこゝちあしう成り給ふべし。雨もやがてぞやみなん。今しばしはれ間をまちて歸り給へ。幸ひ。此原をへだて、かしこの村に。産婦の妙薬あり。おのれ屢試しが。いと驗ある薬なり。一走行もとめ來てまゐらせん。まだ宵なれば。今しばしこゝにありて。全くこゝろよくして歸り給へ。産前は大事のものぞ。かならずかる／＼しく心得て。身をあやまち給ふな。湯をのみたくおぼさば。かしこによく沸であるぞ。ひとり淋しくとも。しばしの間を待給へといひて。竹の皮笠かぶり。松ともして出行ぬ。女はひとりこゝにをるに。松吹風颯々となり。家はゆら／＼とゆるぎ。雨はら／＼と軒にかゝりて。壁をもる冷氣。身にしみわたり。心のなしにや。窓の紙風をすゝり。灯火のまたゝきするも物とはなしに。すさまじきこゝちし。うちひそみをりて。老嫗の歸るを待けるが。野寺の鐘のひゞくをきけば。

はや二更の頃なるに。いまだ歸り來ず。などてかくいとまいることぞ。はやく來よかし。妾もいとま乞して。まかりいでなんものをと。心いそがし。たちて見居て見。待侘ける折しも。家の棟のあたりに。赤子のなく聲きこゆ。こはあやしとおもひつゝ。壁のやれたるひまより。さしのぞきて見れば。雨やみ雲ちりて。皎月四方をてらし。恰も白日のごとくにて。いと物凄き光景なるに。此家の蔭地にうつるを見れば。家の棟に。あまたの赤子の。匍匐ありく蔭。さやかにうつり見ゆ。又かしこを見れば。古井のうちより。一道の陰火朦朧と焚あがりぬ。女これを一目見るより。おそれをのゝき。臆魂をうしなひ。此家はかならず。妖怪の栖ならん。かの老嫗も。變化のものにや。はやくこゝを遁ざるべしと。表のかたへ走り出。樞をひきあけんとするに。外のかたよりきびしくさしかためたるにや。とかくすれどもあかず。裏口より遁出んと。かしこにゆきて見れば。こゝもきびしくさしかためて。いかにともせんすべなく。大にうろたへて。忽ち氣のぼりしめくるめきて。打倒れ。しばし正氣つかざりけるが。軒もる滴の口中におちいりたるが。ひやりとおぼえて。やう／＼人こゝち出來。垣をやぶりても遁出んとおもひつゝ。裙をかゝげて。表のかたへ走り出る折しも。おもひかけざるうしろより。すきひかみたる聲して。やよく婦人。物申すべき事あり。しばし待給へと聲かけられて。又臆をけし。こは／＼後を顧ば。あるじの老嫗。裏口より歸り來て。行燈のかげにすくと立たり。女はじめはこゝちあしきうへに。情ある言に心ゆるして。あるじの姿を見さだめざりしが。今惟に眼をとめてよく見れば。頭の毛は。佐野の白苧をみだせるごとく。片目の光りは。小鹽の鏡を磨たてたるに異ならず。いとおそろしき老女なり。女うちわなゝきつゝ。おん身はいつの間に歸り給ひしぞ。妾はもはやいとままうしてまかりなんとて。走り出んとするをまづまち給へと引とどめ。おん身にわりなき所望あり。うけひき給ふべきや。女はいく。しかのたまふは何等の事ぞ。此身に似合たる事に侍らば。うけがひ申すべし。老嫗いはく。所望といふは別の事にあらず。おん身の身うち。つきたるものを乞得たし。いかにうけひき給ふべきや。女いはく。見給ふがごとく。

貴しき身なれば。身うちにつきたる物としては。此世に一重の外塵ばかりの物もなきを。何を目あてにしかはのたまふぞ。老嫗いはく。我望むもの外にあらず。おん身の胎内にある子が望みなり。こゝろよく。あたへたまはんや。女打笑ひ。その望みならば。それとはやうのたまへば。かばかり胸はひやすまじきに。跨にもあらぬ子を産なば。いかにも望みにまかすべし。老嫗いはく。産出したる子は用いたゝず。いまだ胎内にある子を。胎子といひて。高價を得る妙薬なり。ゆゑに其腹籠がのぞみぞかし。女驚き。胎内にある子を。いかにしてとるべきや。老嫗打ゑみて。つひ其腹をたちわれば。心安うとらるゝ事なり。婦人は何ゆゑ其様に。わなゝきたまふぞ。此老嫗がいたうなきやうに。つひ一思ひに殺し申さん。よき人ぞこゝへおはせ。はやうおはさずやといひて。隻眼をきらめかすれば。女は身をぢぢめ。さすればどうありても。妾を殺さんといふか。くどき言いふ人かな。其薬をもとめたさに。頃日尋し妊婦。世におほきものなれど。尋る時はあやにくに。なきものぞ。これ無益なることいひて。ひまとらしたまはるな。宵からおん身にかゝらずらひて。まだ看經もせねば。はやう殺して佛をがみたし。年老ては後生が大事ぞ。嗚呼阿彌陀佛／＼と。唱る口は耳までさけ。野猪老嫗となづけしも。げに理にて。葬頭河の奪衣婆が。新到罪人を。呵責する光景も。かうぞあらめとおもはれける。女はあるにもあらぬおもひ。妾を殺して。胎内の子をとらんとしたまふも。原は金ゆゑの。ことにあらん。さばかり金を。ほしくおぼさば。此身を遊女に。賣てなりとも。金とよのへてまゐらせん。こひねがはくは。胎内の子を産おとすまで。まちてたべ。よく／＼深き縁なればこそ。妾が腹に宿り來て。已に八月にみつる子に。せめて此世のあかりを見せ。たとひ一日なりとも。親よ子とたがひによびつよばるゝまで。一命をたもちたし。少しは哀れとおぼされて。しばし命をのべてたべ。いきとしいけるもの。あはれみのこゝろなからんやと。いひさして。とりつき歎くを。顔そむけて見やりもせず。何やらものいはるゝやうなるが。年老たれば。聲て聞とりがたしいで／＼。いたうなきやうに。よくはからふべしとて。裙かゝげ襪襪ひきゆふひまをうかゞひ。女

遁出んとするを。老嫗猿臂を伸。衣服の襟ひしとつみて引とゞめ。刃廣なる。菜刀を把てひらめかせば。女は何とせんとすべなく。ゆるし給へたすけてたべと。泣聲になりて。わぶるを聞かず。簀子をあらく踏ならし。息の根とめんとつきかくる。女身を閃し。老嫗が袖の下をくぐりて。刃尖を避けば。又身を轉してつきかくる。つけつ。まはしつおひめぐり。つひに女の肩尖を。二三寸斬こめば。阿と一聲さけびつ。足ふみかねてよろめく所を。又つきかくる菜刀の。刃尖をもろ手にしかとにぎり。苦しき息をつきて。いひけるは。かくまでわぶるを聞入ず。とてもかくても妾を殺すか。死ぬる我身は。因果ともあきらむべきが。かなしきは胎内の子。闇よりやみに迷ひ行。さぞ此母を尋ぬべし。いかなるあしき宿世にて。我身には宿りしぞといひて。もたえ歎くぞ理なる。あなかしき無益の縁言。聞もうるさしとて。菜刀をしごけば。指はらくとされおちて。鮮血したる掌を合せ。慈悲ぞ情ぞ。しばしの命をゆるし給ひ。病にふしをる夫の顔。宿に残せし幼児の顔。一目見せて殺してたべ。此あたりに人はなきか。妾をすくひ給はれと。聲かぎりにさげべども。素人家をはなれたる一ツ家なれば。只空吹風の音のみして。誰こたふる人もなし。老嫗はかれが歎を。耳にもいれず。汝が腹の子は。我爲には寶なり。あまりみじろぎして。寶をそこなふてくれな。もはや冥途へやらんとて。黒髪をつかみ引よせて。のけさまにおさへ。氷のごとく研たてたる。菜刀をとりなほして。むなさかを。さしとほしければ。血しほほどばしりて。紅の泉の涌流るゝがごとく。七轉八倒身をもたえ。手足をふるひ。四苦八苦を。一度にあつむる苦しみにて。目もあてられぬ光景なり。此折しも。黒髮山の小賊はしり來つ。樞をひらきて。裏に入。此體を見て。もろはだぬぎ。女の兩手をしかとおさへ。老嫗どの。心しずかに子ととり給へといへば。心得つとて。菜刀をさか手にとり。乳の下を十文字にきりさき。胎内を發て見るに。胎子左りにつきてあれば。男子ならんとおもひ。引出して見るに。果してしかり。憐むべし。八月にみちたる子なれば。五輪すべて具り。左右の手をうごかしぬ。小賊大に悦び。老嫗どのよくてかされし。此事案主にきこえあげて。辛苦銀はおも



くまゐらすべし。さきほど。おん身の知らせにより。はやく来て。手つだひせんと思ひしが。とかくしてひまどりしゆゑ。おん身のるすに。此女もし逃ゆきもせんかと。氣づかひしが。さもなくて重疊なり。老嫗はく。表裏の櫃を外のかたよりきびしくさしかためたれば。網の魚籠の鳥なりき。おもふに。昨夜燈花の報あり。今朝喜鵲の噪ありしも。此福を得べきしらせなるべし。此屍はおん身かゞげゆき。人目にかゝらぬ谷底に。すてたまへ。我はあとより。胎子をたづさへて。山寨にいたるべし。夜のあけぬ間に。はやとく／＼といへば。心得づとて小賊は。屍をとりて馳行けり。老嫗はあとにとどまり。簀子のうへにながれたる。血しほをのごひ。酒などうちのみて。ゆる／＼疲れをやすめ。胎子を麻笥にいれてたづさへ。月の光りに乗じて。黒髮山にいそぎゆきぬ。かくて小賊は。屍をかゞげて。一里ばかりかなたの山に持行。深き谷底になげすて。たゞちに黒髮山にいそぎ行。道にて折よく。老嫗に合。兩人つれだちて岩窟にいたり。しか／＼ときこえて胎子をさし出しければ。大蛇太郎大に悦び。おもく賞銀をとりて。老嫗と小賊にあたる。さて夜はあけはてたれば。いそがはしく。鰻菴に命じて。薬を調しめけるとぞ

第十段 黒髮山佛法僧の事

爰に又。健助が妻眞袖は。夫の病をいのりの爲。中禪寺の觀音に日參すとて。日毎に出行しが。一日又。いつものごとく出て。黄昏の頃までかへり來ず。夕飯とふころは。かならずかへり來るもの。此日に限りて。かくあれば。健助大にいぶかり。などてかくいとまいる事よと。胸をいため。安き心もせず。戌もすぎ亥もすぐるに。かげだに見えねば。益あやしき。彼みごもりて。已に八月にみちぬれば。もしにはかに。こゝちあしくなりて。道に倒れもやしつる。かへり來べき道は。すべて山路なれば。ことさらに氣づかはしと。心も心ならず。小松は泣聲になりて。母さまは何ゆゑかへり給はぬぞ。母さまのかへり給はぬうちは。物もくはじ。寐もせじといひて。目もあはま

ず。健助さま／＼にいひなくさめ。いろ／＼にこしらゆれど。とかく泣きさげびてやまざれば。もてあましつゝ。もし夜中にもかへりやす。足音やひゞきつると。耳をそばだてて待侘れど。山田の蛙聲しきるのみ。寛の水のおとさへたえて。おとづれなし。かくて春の夜のみじかく時すみやかにうつり。鳥なき雀啼。つひに夜はあけはてぬれば。いよ／＼氣づかはしく。胸のみさわがれて。おもひわづらふ心のうち。何にたとへんかたもなし。小松は父にひしととりつき。とかくなきさげびて。母をしたへば。せんすべなく。腰いたみて立がたきを。枕屏風にとりつき。呀とかけ聲して。やう／＼たちあがり。病床をよろほひ出。小松が手を取り。杖にすがりて家を出。妻の歸り來べき山路を。こゝろざし。朝霧をわけつゝ。尋行けるが。長き病のうへなれば。息たゆく。足なへぎて。歩みわづらひ。かしこの虫のはな。こゝの木根に尻かけて。小松に脊さすらせ。みづから胸を打などして。やすらひ。蝸牛のごとく歩みて。やう／＼半山を過。一ツの谷合にめぐり出けるに。忽ち谷の底さや／＼となりければ。目をくだして見るに。山菅のかれたるうちに。一ひきの狼。人の足くびをくらひ居たり。又かしこを見れば。二ひきの狼。人の屍をくらひ居たれば。もしは妻の身のうへかと胸とどろき。手ごろの石をひろひとりて。なげうちければ。狼どもはみなおどろきて遁去りぬ。健助小松が手を取り。からうじて谷底におりたち。近くいたりて見れば。かの屍は妻の眞袖なれば。一目見るより。こは夢かうつゝか。よもまことにはあらじと。あきれにあきれて。尻居に撞地倒れ。魂なき人のごとく。心空になりて。涙さへいせず。小松は屍の顔をなで。母さま何ゆゑかくこは／＼しき姿にはなり給ひしぞ。ものいひ給へ。父さま。母さまは死給ひしか。はやうよびいかしてたべといひつゝ。屍をゆりうごかし。母さま母さま母子のうとて號哭も。哀ふかし。健助しばしありて人こゝち出來。妻のあさましき姿をよく／＼見れば。みどりの黒髪は血にそみて打亂れ。顔は薄縹のいろになり。唇は濃紫にかはり。目口鼻より血を出して。いまはのきはのくるししみも。さぞなと思ひやらる。肩尖より胸のあたりをくひやぶられ。胎内の子もくひ盡せしと見えて。かたちも

なし。たゞ鳩尾骨臍骨のみ。しろくあらはれぬ。肉はすべて。くれなゐに墨をまじへたるいろになり。血臭きこと。鼻をおそひて堪がたし。五臟六腑もくひ盡し、大腸小腸三膽のたぐひのみ。こゝかしこにみだれちりて。蠅蚋蝸これに敵。上世葬をせざる時に似たり。嗟呼痛哉。玉臉花質盡く變じて。故の容は露ばかりも残らず。南柯の夢と醒はてぬれば。唯南山大師の無常の賦を讀。東坡居士の九相の圖を見るこゝちして。見る目もあてかねたり。常なき世のさがなれば。蟋の夕をまたぬならひは。のがるべきにあらねど。かく悪獸にくひ殺され。手足を異にして死するは。又なき例にて。あしき宿世の報とおもへば。いと悲しく。屍を抱て哭けるが。妻の襤褸の袂より一ツの布袋のまろび出たるを。とりあげて見れば。米粟稗の類に錢をまじへて入おきぬ扱は彼貧苦にせまり。中禪寺に日參するといひなし。我にかくして袖乞をしつるか我彼を妻とせしよりこのかた。困窮にくらし。夏蚊帳をたれず。冬褥を重ず身には襤褸をまとはせ。口には飧食をくはせ。立居苦しく物毎に。心を煩はしめてしげしが程も。安き心をさせざるに。彼少しも愁る色なく。朝夕まめやかに仕へて。よく女の道を守りつるに。なごてかく。あさましき死をなしけるにぞや。世には貞女を憐む。神佛はおはさぬか。胎内の子も八月にみち。五輪も具りつらんを。世界の風にもあてず。悪獸の餌食となすこと。そもいかなる因果ぞ。又彼が袖乞しつる心の内。さぞなくちをしかりつらんなど。日頃の強氣も。悲歎にせまりてよわりけるにや。丈夫に似ぬ。女々しきくり言までもいひならべて。哭けるが。やう／＼涙をほらひ。彼狼は。妻の敵子の仇なり。我病なき時ならば。只一箭に射殺して。仇を報んずるものを。かくやせさらばひて。力もぬけたれば。夫もかなはず。くちをしきよとて。拳をにぎり牙をならしけるがいかなほどなげくとも。今はかひなし。せめて。なきからを。とりをさむる。支度せんと。おもひなほして。屍にむかひ。南無幽靈。成等正覺。阿彌陀佛。ととなへ。泣ふしたる小松が手とりて。よるめきつゝ家にかへりぬ。彼惡婆に殺されたる女は。乃ち此眞袖なり。健助は唯狼の爲めに殺されしとのみ。おもへるもうべなりけり。かくて健助家に

かへり。棺をもとめんにも。一錢の貯ななければ。いかにともせんすべなく。衣服はみな代なし。むなししく空となりたる。舊葛籠のあるを取出し。里人をかたらひ負しめて。再かしこにいたり。むなしきからを。葛籠にをさめて歸りけるが。野邊におくらん便もなければ。とやせまじかくやすべきと。おもひをいたましめ。手を又き首を低て。つらく來しかたをおもひ。我若かりし時。主君の掟をやぶり。おもき罪を犯せしを。深き情をたまはりて。危き一命をまぬかれたる洪恩。泰山よりも高く。北海よりも深く。此事に銘骨に鏤て。身をおはるまで忘るまじと。心に誓ひ。時節を待。一ツの功をたてゝ罪を贖。露ばかりも報んものと。そののみ念慮にかけて。うき年月をおくりつるに。かくさま／＼の災にあひ。世に悲きことのみにてくるは。皆是不忠の報なるべし。妻むなしくなりしうへは。我病を看病べき者もなく。一朝の糧さへ貯ぬ身なれば。是より後は一日をも。おくるべき便なし。しかのみならず。我病日に異におもりて。いつおこたりはつべうもあらず。残れる雪の日蔭まつ間のこゝちして。たのみすくなし。此うへに我身まかるぞならば獨残れる幼兒を。誰ありて養ふべき。餓死せんは必定なり。とても武運に盡たれば。彼をあとに残して。うきめを見せんより。寧手にかけて。我も腹きりて死んじかじと。おもひをさだめ。貧き中にも武夫の魂は失はず。一腰残せし刀を把てうしろにかくし。小松を見やれば。小松は唯葛籠にとりつき。母子のう／＼とて哭叫。健助目もあてられず。涙はふりおちて。きえもいるべきこゝちしけるが。かくてははてずとおもひなほし。小松が背をなでて。汝はかしこき者なれば。我いふことをよく聞べし。母の屍はこゝにあれど。魂魄は極樂とて。はるかに遠き國に行。いかばかり慕とも。再びこゝに歸來ず。さばかり母にあひたくは。汝かの國に行さるや。さもあらば父もともにゆくべし。かの國には。迦陵頻伽とて。おもしろく嶋鳥もあり。鉢特摩華とて。うつくしき花もあるぞとよ。小松打聞て。そはうれしきことよ。はやうそこに連行て。母さまにあはせてたべ。いざ／＼とて。物わきまへぬ幼兒の。いとうれしげに催せば。健助はいと胸ふたがり。汝かの國にゆかんとならば。西にむ

かひて眼をとち。掌を合せて念佛をとなふべし。かまへて。目をひらくことなかれと。をしゆれば。小松おとなしやかに。居なほりて。さゝやかなる掌を合せ。ひたすら念佛をとなふるにぞ。健助も西の方をふしをがみ。一念彌陀佛。即滅無量罪。阿彌陀佛。息もたゆげにとなへつ。氷なす刀をぬきて。小松が背後に立まはりけるが。恩愛切なる悲みに。五臟六腑も惱亂して。さけちぎるゝ想をなし。手抖脚軟て。手をくだすべうもあらず。心たゆたひけるが。かくてはとみづから志を勵し。よろめく足をふみしめて。念佛まうせ。といひつ。小松が頂をなであげて。ほとゝ刀をふりあぐる折しも。外の方より。やれはやまり候な。しばしと聲かくる人あり。健助聲かけられて。心たゆみ。手をとめて。外の方を見やれば。若き旅人。妍婦人をとまなひ。ゆるし給へとて裏に入る。健助折あし。いそがはしく刀を鞘にをさめて。ためらふに。旅人禮をなして。吾主は來海衛守の弟健助といふ人にはあらずやといふ。健助いはく。いかにもやつがれば。その者にて侍り。しかの給ふは何所の御方ぞとて。いぶかしげなる。かほなるを。かの婦人かたはらより。打見て。いかに健助。汝妾を見忘れしかといふ。健助これを聞て心づき。此婦人をよく見れば。主君の娘弓見なれば。大に驚き。いそがはしく。簀の上に伏て禮をなし。やつがれ心中さわがしき事あるうへに。かはりたる御姿なれば。見たがへ奉りぬ。無禮の罪をゆるし給へ。こゝははしちかし。こなたへとて。塵打拂ひ。兩人を上坐にすゑて。恭しくいひけるは。姫君何ゆゑ。かはりたる御姿にて。おもひかけず。やつがれをとせ給ふや。若き御人は。何等の御方にて候や。弓見云。いぶかるはうべなり。これなるは望月健二郎殿と申す御方なり。妾が身のうへのかなしき物語は。一席に盡しがたしといふ。健二郎その尾につきて。吾主信濃國善光寺のほとりに。住れしよしを聞。我等兩人かしこに尋行。今は當國にうつり住るよしを聞。又當國にいたり。からうじてこゝに尋あたり。前程より門外にたゞずみて。様子を窺し。幼児を手にかけんとせられしゆゑ。聲かけてとゞめたり。我等兩人わかき者同士。つれ立來つれば。もしあだめきたることにて。さすらへしかと。疑ひ

給はんが。少しもさることにあらず。仔細はゆるく語るべし。且それは後にし。前に問べきは。吾主何等のせまりたることありて。幼児を失はんとせられしぞ。健助涙をはら。とおとし。はづかしき光景を。御目にかけてつるかな。かくおもひつめたる。我身のうへの物語も。又一席に盡しがたし。且姫君の御身のうへこそ氣づかはしけれ。はやく語り聞せ給へといふにぞ。弓見涙さしくみて。父渥美左衛門。管領持氏公の隠謀にくはより。足柄山にて賊の爲めに害せられし事を始めとし。家を没收せられ。木曾路の雪に苦みて。衛守が身まかりし事。及び健二郎が厚志により。自害をとゞまりて。夫婦の約をなし。助太刀をたのみし事まで。つぶさに語りければ。健助はこれを始めて聞。且驚き且悲み。心もくらみてひたすら哭けるが。おのれが身のうへをも語り出し。弓見が母の情にて。一命をたすかり美濃國をのがれ出しより以來の仔細。且おのれ長き病を愁ふる事。妻が非命に死せし事。幼児を失はんと思ひつめたる心の苦しさを。とりあつめて。こまやかに語りければ。弓見は。幼時わかれたる眞袖にあひ。來しかたのかなしきことどもを語り。せめて心をやらんと。たのしみて來つるなれば。これを聞て甚だ力をおとし。小松が手をとりにて。かゝるよき兒をさへうみしものをとて。悲歎の涙にむせかへりぬ。健二郎も。父の敵を尋るため。旅寐に年をかさねつる仔細をかたり。いかなればかく。寄も集るも。皆薄命の者なるぞとて。三人ともに身をくやみて哭ぬ。扱健二郎かさねて。健助にいひけるは。吾主の物語を聞に。心せまるも理なれど。かならず短慮をいだされな。幸ひ我路銀の貯あれば。貧苦の一ツはすくふに安し。病の事も名醫をえらびて薬を乞。心しづかに保養せば。かならず平癒あるべし。弓見が力とたのむもの。吾主の外になければ。一命を全して。仇を報る力をそへ給へ。我輩みなこれまでは薄命なれど。心長く時節をまたば。つひには宿志をとげて。再び面を起す時あるべし。豈皇天の憐みなからんやなど。いひなぐさめ。扱葛籠を見やり。さしあたりて。捨おきがたきは。妻女のなきがらなり。はやく用意し給へとて。金子を出してあたへければ。健助涙を流して恩を謝し。里人をかたらひて。棺を索。野邊のおくりをいと

なみ。僧を供養してあとねんごろにとむらひ。此うへは病を保養し。姫君をたすけて。主君の讐を復し。聊巨恩に報べしと誓をなしければ。鮫二郎弓兒。大に悦びて。しばらく此家にとまり三人相互に力を得て。末たのもしうぞおぼえける。夫は扱おき爰に又。大蛇太郎は。胎子を得て。鰻菴に命じ。薬を調合せしめて。もちあけるに。靈薬の奇特によりて。不日に平癒し。兩眼全く明になりければ。大に悦び。夜宴を催して。小賊等とも祝酒をくみ。鰻菴をよび出していひけるは。我此山寨地獄にひとしく。一度こゝにおつる者。再活て歸りがたしといへども。爾幸ひにして。我難症をすくひたれば。其功を賞して。前に約せしごとく。今夜家におくり歸すべし。爾は命つよき者なりとて。打笑ひ。且一盃を酌べしといひてあたふ。鰻菴は毒蛇の口。猛虎の牙をまぬかるゝこゝちして喜び。おづおづ盃をうけて。酒をなみくゝとつがしめ。やがて傾んとしたる折しも。佛法々々となく鳥の音。山彦にこたへてちかく聞ゆ。鰻菴耳を倚。松の尾の峰靜なる曙に。あなめづらしと。ひとりごちて。盃をほしければ。太郎聞とがめていはく。爾かの鳥を知るや。鰻菴いはく。かの鳥は佛法僧には候はずや。太郎いはく。いかにもしかり。爾此山をいづくかとおもふ。鰻菴いはく。やつがれ若かりし時。醫道修行の爲。普諸國をめぐりつるが。凡佛法僧の栖山は。高野山。松尾山。醍醐の峯。河内の杵長山。さては上野の迦葉山か。下野の黒髮山に限れり。やつがれ三四夜を過てこゝに來つれば。おそらくは此所。迦葉山か黒髮山なるべしといふ。太郎打うなづき。爾が推量にたがはず。此所は黒髮山なり。我爾に引出物とらせん。ちかくまるれといふにぞ。鰻菴は何の意もなく。みざり出てちかくすゝむ時。太郎つと立て刀をぬくよと見えしが。忽ち鰻菴が頭は。前にまろびおちぬ。太郎血刀をさし出して。小賊に血をのこはせ。此屍酒宴のさまたげなり。はやくとりすてよといひて。床の下に踢おとしぬ。小賊等いぶかり。寨主かれをゆるして歸らしめ給ふよし。おふせられしに。今又殺し給ふは何ゆゑぞ。太郎いはく。我かれをゆるさんとおもひしが。かれ佛法僧の音を。聞知りたるゆるしがたし。昔昏睡の頃。松ノ尾山の賊主。佛法僧一隊の爲に滅びしたる節あり。かれも又口あり。いかでかこれをもちりさざらんやといへば。小賊等これを聞て。太郎が思慮の深きことを感じけり。鰻菴日ごろ食欲の心深く。不義の財をむさぼりし。報によりて。今賊手に身を失ふ。惡の報は善の報より。速かなりといふ。常言も。理あるかな

五、山彦、人

江戸 山東軒主人編

第十一段 皎二郎弓兒孟蘭盆の灯籠を見事

さてあるに。皎二郎は。健助が家狭して。住がたきにより。近きあたりに。廣空屋のあるを索め。健助父子をもここに移して。都て四人此家に住皎二郎貯の路銀を出して。萬事をまかなひ。名醫を迎て薬を乞。弓兒とともに。健助が枕方を離す。心を盡して看病けるが。天の恵にやあらん。程なく平癒し常よりもなほ健になりければ。一齊に悦ぶ事限りなし。しかるに健助。おのが病のおこたるにつけても。兄衛守があへなき最期をなげきければ。皎二郎理におもひ。吾主かしこに行。せめて改葬し候へとて。金子を與へ。其所はしかくと。よくいひをしへければ。健助はかさなる洪恩を謝し。たゞちに發足して。信濃國にいたり。その所を尋ぬるに。はや雪も消果て。一塊の土高き所あらはれ見えければ。こゝならめと。土を穿て見るに。果して衛守が屍あり。寒氣凝たる土中なれば。少しも腐爛せず。故の姿のまゝなれど。年ひさしく對面せざれば。死顔ながら。いたく年老たるさまを見て。いと悲く。涙ながらに。あたりちかき山寺に改葬して歸りぬ。扱健助。一頭の事をとげて少し胸あき。又一頭におもひけるは。かの狼どもは。我妻子の深き仇なり。盡く殺して憤をはらすべしとおもひ。弾いとみじかき弓に。獵箭握りそへて。矛を杖につき。山にいたる。素蕨戸の業をなして。山の案内はよく知りつ。狼どものかくれをるべきくまを尋ねけるに。常々おほかりし狼どもの。只一隻も見えざれば。山越しに逃去しかといふかり。日毎に出。遠き山

山までも尋ねて。一日骨懸山に登り。とある谷川の巖に尻かけて。やすらひけるが。水上より朱腕一ツ流れ来るを見つけておもふは。人跡絶たる山中にかやうの器の流れ來べき理なし。もし此山奥に人家あるゆゑにやと怪みつゝ此日も又手をむなしうしてぞ歸りける。かくて又一日皎二郎。健助にむかひ。詞をあらためていひけるは。我敵を尋る身なれば。此所にのみとゞまりて。いたづらに月日を費やしがたし。陸奥のはてまでも。尋ねゆかまくおもへば。弓兒は權吾主あづかり候へ。我宿志をとげて後は。ともに力を合。渥美殿の仇をも尋出して打とるべし。我もしかへり打にもあはゞ吾主弓兒を扶て。仇を報しめ候へ。もし又我敵より前に。渥美殿の敵を尋出さば。吾主打とり候へ。實父の仇を後にして。舅の仇を前にすべき道なれば。我宿志をとげざるうちは。力をくはへがたし。弓兒と我縁は互に本意をとげて後さだむべしと。心底をこまやかに語りければ。健助大に感じのたまふ所みな理にあたり。主君の敵はやつがれ身を粉に碎きても尋出して打とり日ごろの洪恩にむくゆべし。素是我望所なれば。少しも心をつかひ給はず。只よく宿志をとげ給ひ。恙なき再會を恵み給へといふ。弓兒は傍にありて此事を聞理とはおもひながら。しばしのわかれも氣つかはしと。打しはれてぞ居たりける。皎二郎しか心をさだむるといへどもこのほどの雜費に用ひて。路銀かるくなりければ。はるけき旅に赴むくに。かくては便なしとて。一ツには路銀をもとめ。二ツには古郷の音信をとはんため。飛脚を雇て。肥後國につかはしけるが。遠き國なれば。速かに歸來べきにあらずと。心にもあらで。又しばらく此家にとゞまりけりかくて時光速にうつりゆきて。初秋の時にいたりぬ。此國にも年毎の七月十五日より廿四日までは。精靈の棚をかざり。家々にこれを祭る。又いろ／＼の灯籠をつくりて。或はまつりの棚にともし。あるひは民家の軒寺院の佛殿にもとす。又寺々には施餓鬼を修行し、村々には踊を催す。これなべて此頃の風俗にて。唐土の上元の佳節に似たり。これを見る人道もさりあへず。甚だ賑なり。健助も靈棚をかざりて。兄衛守妻眞袖が新靈をむかへけるが。皎二郎にむかひていはく。此節は所々に灯籠をともして。

5

甚賑なり。今宵は姫君をともし。灯籠を遊覽し給ひて。このほどの鬱悶を慰め給はずやとす。めければ。兩人その言にしたがひ。一ツには兩家の父母の靈をまつり。二ツには衛守眞袖等が。菩提をとはん爲。布施物などたづさへ。兩人連立て家を出。且村々の灯籠踊を見るに。聞しにまさる賑ひなり。見物の婦女おほかれど弓兒は都のうちならず。たくひまれなる美女なれば。田舎女のひなびたる中に立まじりては。ことに目立て。これを見る人膽魂を失ひ。唯沙底をひらいて。金玉を見るこゝちせり。扱兩人は。眞袖を葬たる山寺にゆき。施餓鬼の法會にあひ。布施物をおくりて。諸精靈をまつり。寺中の光景を見るに。こゝにもあまたの灯籠をかけつらね。もろゝの花鳥のかたちなどを。手を盡してつくりなし。一齊に火を點じたれば。あたりもかゞやきて。恰も白晝の如くなり。參詣の諸人。おしこりてこれを見。箇々細工の妙をほめて。餘念なき折しも。暴に一陣の狂風吹起り。灯籠を盡く吹けし。忽暗夜となる。諸人立暈て。あちおしこちおす紛に。弓兒皎二郎を見失ひ。こゝかしこをたづねまどひて。纒に一灯消残りたる。灯籠の下をすぐる時。背後の方に人ありて。弓兒が襟をひしとつかみ。我汝等をとらへんとて。大に苦みぬといひつゝ。手巾を口にはませてものいはず。餓たる鷹の雀を見つけたることく。襟首をつかみて引立ゆ。諸人騒動の中なれば。獨りとしてこれを知る人なかりけり。扱かの者弓兒を小脇にかいはさみてはしり。一ツの松林のもとにおろして息をやすめ。弓兒をにらみていひけるは。いかに賊女。汝我を見忘れつるか。我は信濃國の獵戸藤一といふ者なり。前の日爾等兩人。山中に迷ひぬるを憐み。内海鯉菴といふ。目醫者の家をかりて宿せしに。爾等盗人の手引をなして。あるじ鯉菴を捉へしめ。壁をやぶりて逃去り。鯉菴が生死今において知れがたし。これによりてその罪我輩五人の者におよひ。國の守より。嚴命せられ。日を限りて鯉菴が行方と汝等がゆくへをたづね。已に五人の者。四方にわかれ。近國に走りて。普探もとむ。もしたづね得ざる時は。我輩を罪せられんとのことなり。幸ひにして。且汝をひとり見つけたれば。一ツの手がかりを得たり。何れの遺恨ありて。鯉菴を捉へゆきし

そ且旅宿につれゆきて。白晝さすべし。しか心得よと。罵ざしあらく罵る。弓兒はおもひかけざる事なれば。大に驚き。賊の手引したるなどは。露ばかりもおぼえなきよしをいひとかんとすれども。ものいふことあたはざれば。只身をもたえてぞ悲みける。扱廻國の修行者の野宿するにやあらん。那裡的松林のうちに。紙帳をつり。うちに鉦の聲聞えけるが。藤一が弓兒を罵るを聞つけ。鉦を打やめ。紙帳をかゝけて。修行者顔をさし出し。こなたをうかゞひ居るとも知らず。藤一すぢのくゝり繩をとり出して手あらく弓兒をくゝりあげ。又小脇にかいはさみて。走りゆかんとするを。修行者つと走り出て。錫杖にしこみたる刀をぬき。藤一を只一刀に斬殺して。弓兒を奪とり。鉦をはやめてうちならしければ。林のおくより小賊ども。長櫃めく物をかゝげ出て。弓兒を櫃のうちにおし入れ。これをになひて。みな一齊に馳去ぬ。修行者は負佛のたぐひの。残れる物を取りをさめ。藤一が屍を谷川に踢おとして。しづかに鉦をうちならしつゝ行けり。此修行者に扮作たるは。乃是大蛇太郎なりけり。かくて太郎は。弓兒を奪とりて。黒髪山にかへり。弓兒を櫃よりいださしめて。くゝり繩をとぎ。口にはみたる手拭をとらしめ。灯燭をてらしてよく見れば。おのれ年ひさしく戀慕つる女なれば。あまりのうれしさに。心頭突々と跳り。只あきれにあきれて。ものもえいはざりけるが。やゝ心をしづめ。小賊等をしりぞけていひけるは。婦人汝は四年前の某の月某の日。近江の國鳥籠の山において金鈴道人の入定ををがみたることありしやといふ。弓兒はいきたるこゝちもなかりしが。此ことを聞て大に恠み。おん身は何等の人なればそのことをしるや。いかにも妾おぼえあることなりといふ。太郎果せるかなと悦び。婦人我を見知りつか。其時の金鈴道人は乃ち我なりといふ。弓兒益恠みて。太郎が顔をつれくゝと打まもり。おん身何ゆゑさるいつはりをいふや。金鈴道人は活佛におはしまして。童顏鶴髪とやらん。殊勝なる姿なり。おん身のごとくこはくしき悪相の人。いかでか金鈴道人ならんやといふ。太郎打笑ひていはく。しかおもふもうべなり。金鈴道人の童顏鶴髪なるぞ我謀計の根本なる。ちかごろ世の人。金鈴の道德をしたふによりひそかに文珠白椎寺

の僧とはかり。我年若しといへども。白髪の髪を以て髮髻をつくりなし。道人の姿に打扮て。入定といつはり。あまたの布施物金銀財寶を奪ひとり。かねてぬけ穴をほりおきて。夜中にぬけ出折々別人をいれて鉦をうたしめ。おもふまゝに諸人を欺きて。後には雨鉦の塚といふ名をさへ殘せり。その時汝。紅梅の色こきに。蜻蛉のとびかふさまを摺箔にしたる衣を着。諸人の前にすゝみ出て。我十念をうけたること。心におぼえあるべし。我其時汝が美麗なる姿を見て。深くめてまどひ。おぼえず手爐をとりおとして。ほと／＼事をやぶらんとしつ。やがて入定の時にのぞみたれば。いかにともせんすべなく。只むなく心をなやませしのみなり。いづくの誰といふことをだにしらざれば。尋ねもとむべき便もなく。せめて似たる女もがなと。あまたの婦女を盗とりて。山寨に養ふといへども。いかでか汝がごとき絶色にくらぶべき者あらんや。野花のながめにたらず。村酒の酔に赴なきが如し。しかるに此節は。孟蘭盆の時にて。おほく婦女の出る頃なれば。露ばかりも。汝に似たる女あらば。盗みとらんと。身を扮してみづからうかがひありきけるが。偶かしこにて汝を見つけ。汝とは夢にもしらず。只よく似たる女なりとおもひ。うばひとりしが。はからず再會すること。誠是宿縁なり。我切なる志しを見すべしとて。一間のうちより。錦の手靶に包たる物を取り出て。汝此物におぼえありやとて見す。弓見おづ／＼これを取りてひらき見れば。おのれが手なれたる圓鏡なり太郎いはく。その鏡は入定の時汝が布施物におくりたる物なり。唯それを汝が佛とおもひ。今にいたるまでひめおきぬ。我戀慕の情の深きこと。此一ツをもつて推量せよ。我今賊主となり。あまたの強賊をしたがへて。此岩窟にかくれ住。金銀財寶は心のまゝなり。汝今より心をかたふけて我妻となり。生涯の樂をきはむべしとて。さすがの強悪も。愛慕の情に心よわり。ひたすらかきくどきければ。弓見且おそれ且かなしみて。一言の返答もせず。唯聲をはなちてぞなきける。太郎そのけはひを見やりて。汝速かには胸もきはめがたからん。且今宵はやすむべしとて。とらはれの女どもをよび出し。此婦人をしばらく汝等にあづくるあひだ。心をつけていたはるべしと命じ。やがておのれも。ふしどにいりてやすみぬ。弓見は女どもにいざなはれて。なく／＼一間の房にいたり。心におもひけるは。我とても此所をのがれ出ることあたふまじ。彼に身をばつかしめられんより。寧自害してはてんにしかじ。これまで度々死をのがれしが。此度はまことに我命の限りなりと心をさだめ。身邊に双物のなきをうれひけるが。傍より女どもいひけるは。おん身のかなしさぞなとおもひやらる。我輩もこゝにとらはれ來つる時は。縊ても死んものと。胸をきはめしが。此賊主これまであまたの女をとらへ來つるが。ながくとめおかざるよしをき。命をまつたうして時をまたば。再古郷にかへる時節あらんと。おもひなほして。つらき命をながらへぬ。おん身もかならず／＼氣みじかきことなどし給ひぞ。天の憐みによりて。かれがはなちかへす時をまち給へといひてなくさむれば。弓見心のうち。我においてはいかでかはなちかへさるべきとおもへば。いと／＼かなしく。此夜はつひになきあかしぬ。次の日にいたり。太郎又弓見を寢間によび出して。おどしつすかしつかきくどきけるが。俄に表の方さわがしく。女ども走り來て。小賊等爭論を引出して。同士打いたし候。はやくしづめ給へと告てしりぞく。太郎折あし／＼とおもひつ。にくき奴原かなとつぶやき／＼出ゆきぬ。弓見はかたはらに人なきを幸ひ。此のひまに自害せんと。太郎が枕刀をとりけるに。見おぼえある刀なれば。目をさだめてよく見れば。我家の紋を鏤たるかざりありて。父左衛門鎌倉に下りし時。おびゆきたる刀にまぎれなし。さては父の敵はかの賊主なるか。かよわき力なりとも。女の一念は巖もとほすといへば。しばしの命をなからへて。かれがやうすをこゝろみ。いよく敵にきはまらば。たばかりて刺殺すべしと胸をさだめ。日ごろ念じ奉る觀音菩薩。ねがはくは夢になりとも此事を。皎二郎健助等に。告させ給へとふしをがむ時に。はや太郎かへり來るとおぼしくて。足音あらくひゞきければ。いそがしく刀をもとの所にすゑおき。さらぬ顔して居たりけり

第十二段 眞袖が幽霊夫に告て仇を報しむる事

こゝに又皎二郎は。かの山寺にて弓兒を見失ひ。大にうろたへて。こゝかしこを尋けるが。つひにはあはず。もし我より前にかへりもやしつると。いそぎまどはして家に歸。健助にとふに。いまだかへり給はずといふ。扱はいづくへゆきしぞ。道にまよひをるか胸とゞろかる健助は狼に手ごりしたるうへなれば。大に驚き。長劍をおび。手槍を杖につき。明松をともして。獨り家を馳出て見るに。星移斗轉じて。夜もや更わたり。村々の灯笼の光りもなく。見物の諸人も散失て。いと寂寞なり。扱かの寺ちかきあたりの山中をせめぐりて。普救もとむるに。影だに見えざれば。物狂ひのやうに心を狂はしめ。又かの寺にいたりて見るに。高灯笼の火のみかすかに残り。妻戀鹿の聲。をちこちに聞えてものさみしく。尋ぬる人のまよひをるべくもおぼえねば。ほと／＼力おち墓所のかたはらなる。骨堂の椽に尻かけて。阿伽桶の水に喉をうるほし。しばらく息をやすめける折しも。惟哉堂中より。一陣の冷氣を生じて。身うち冷とほるとおぼえしが。叢にすたく虫の聲かとおやまつばかりのほそやかなる聲して。まうしまうしとよばふ。こは帷やと背後を顧れば。堂中のほのくらき所に。しろき衣を身にまとひ。頭の髪はいと黒き女の姿。おぼろげにあらはれて。さめ／＼と泣居たり健助はもし姫君にやと恠みつ。消かゝりたるみあかしのかげにすかして見れば。妻の眞袖なれば。汝はうつせみの世の人なるに。何ゆゑこゝにはあらはれ出しぞといふ。眞袖ひたすら泣て。しばしはものもえいはざりけるが。しろき糸のごとくほそりたる手をあげて。涙をかきはらひ。息もたゆげにいひけるは。妾おん身に告まうし度ことの侍りて。閻王に願ひ奉り。しばしのいとまを給はりて。こゝまでは詣來つ。これ別の事にあらず。黒髮山の岩窟にかくれ住城主に。大蛇太郎といふ者あり。かれはすなはち犬太郎玄海とて。皎二郎殿の父母を害し。又足柄山において。主君産美殿を殺したる賊なり。姫君も今宵かれが爲に扱れて。岩窟

のうちに居給ふ。かの太郎三十餘人の強賊をしたがへて。勢ひ猛き賊なれば。かろく見なし給ふことなけれ。かれが住岩窟のほとりには。佛法僧おほく栖ば。その聲を知るべに尋行。はやく打とり給ひて。姫君をもすくひ出し給へ。又妾が非命に死したるは。狼の仕業にあらず。黒髮山の麓。曠原のうちに一ツ家をつくりて住。野猪姫といふ者。妾を殺して胎内の子までをとりぬ。願くはかれを殺して我恨みをはらしてたべかれも又。かの太郎が徒中の賊婆なり。かしこにいたり家の棟に。赤子のはひありく家あらば。かれが住家とおもひ給へ。これ凡人の目には見えざることなれども。妾かゝる身になるべきしらせにや。前の日。月かげにうつるを見たり。おん身には妾が靈を通じて見せまうさん。又かれは騎なり。人たがへなし給ひぞ。狼どものおん身の目にかゝらざりしも。罪なきものなれば。妾が靈を通じてたすけしなり又かの太郎。さきつころ目をやみて。ほと／＼盲目にならんとしつるを。信濃の國なる。内海鰈菴といふ目醫師を捉へて療治せしめ。妾が胎内の子を薬となして。不日に愈たり。鰈菴もつひにかれが爲に殺されぬかれもし盲目とならば。復讐のかひなかるべし。盲人を打て仇を報るは本意にあらず。胎内の子不幸にして。非命に死すといへども。かたきの眼病を癒したるは。主君に對してすこしく思あり。しかも男子にてありしぞや。人死すれば靈なりといふにたがはず。妾よくこれらのことを知りつるゆゑに。告まうすなり。今妾が住國のおそろしきこと限りなし。身はきえもやらば。炎のうちにあかしくらすもあり。又出もやらで。雪氷にとぢられておきふすもあり。あるは又牛頭馬頭のおそろしき者どもつどひ來て。身をきだ／＼にくひさくもあり。又惡鳥に眼を啄るゝもあり。毒蛇に身を纏るゝもあり。又にかゝりて死せしものは。刀山地獄とて。垂氷をそらさまに植並たる如き劍の山をおそろしき者どもの。くろがねの管をあけておふに。罪人はせんすべなれば。なきさけびつ。はせ上りはせ下りして。苦むことなるが。閻王妾が貞節を憐み給ひて。無佛世界能化の導師。悲願金剛地藏菩薩の寶處にをらしめ給へば。さる苦みもなく。只目に見るのみなり。やがてぞ極樂國におくりやらんとの給ひき。さてかく申すうちにも。閻王のまた

せ給ふとて。黄泉の使しきりに催せば。今はかへりなん。妾冥途にありても。只忘れがたきは小松がことなり。母なき子なれば。別に憐みをくはへ給ひてよとて。又さめくとなきけるが。忽ちかげろひのごときえうせて。常香の烟のみぞ立のぼりぬ。健助は夢の醒たるこゝちし。残りおほげにあとをながめて泣けるが。妻の亡靈委細を告て。事の分明なるうへは。猶豫すべき所にあらず。我前の日かの山にいたり。朱碗を見つけて恠みつるが。賊の住家あらんとはおもはざりき。片時もはやく此事を。健二郎殿に告まうさんとて。いそがはしく走りて家にかへり。健二郎にしかしがとかたりければ。健二郎をどり上りて悦び。たゞちに馳むかはんと飛立を。やれはあまり給ふなといひて押とどめ。かれ三十餘人の強賊をしたがへて。こもるときけば。かろくしくむかひては。ことをあやまち申すべし。やつがれ且腕さだめに。かの悪婆を殺して。門出の血祭をいはひ。よく胸ををさめてかしこにはむかふべし。しばしまたせ給へといひつゝ。身ごしらへして。飛がごとくに馳行ぬ。さてかしこにいたりて見れば。茫々たる曠原の月。朦朧とくらくして。物のあやめもわかず。風騒々と亂草の上を吹わたたりて。いと物凄き夜なり。こゝにやとたつぬゆき。やうく一ツの小家を見つけ。近くよりて見れば。家の棟に。血に染りたる赤子どものなきさけびつゝ。はひありく姿。さやかに見ゆ。又門ちかき古井のうちより。一道の陰火閃々と燃あがりぬ。妻のをしへし心あてはこれならんと。壁のくづれたるひまより。さしのぞきて見れば。白髪の老女高軒して臥居たり。便宜よしと戸を踢やぶりてうちにいり。簀子をひし〜と踏ならせば。老女目を醒して起上り。何等の奴なれば夜中狼藉をなすや。我を誰とかおもふ野猪婆とて。強氣の譽高き女なるぞ。おのれ目にも見せんと誓つゝ。菜刀をさかしまにとりて。立むかふを見れば。畸なり。健助果して此奴なりとおもひ。ものをもいはず。忽脚を飛せて。のけさまに踢倒し。のんどぶえをしかとおさへ。我は偏が爲めに殺されて。胎内を發かれたる女の夫なり。我に告たる者ありて。汝が仕業といふことをよく知れども。汝が口より白状するを聞されば。明白ならず。速かに白状せよ。もしあらがひていはずんば。身の皮をさか刺にして。肉をきだ〜にきざまんずるぞと。息巻あらく責。臍ふとき老嫗なれば。健助をはねかへさんと。身をあせりけるが。膽氣烈火のごとき勇士の力にひしがれて。苦しさになへず。つひに眞袖を殺し。胎子をとりと。大蛇太郎が眼病の薬にもちひたる始終を。詳らかに白状し。すこし手をゆるめ給へと。くるしげにいふ。健助なほつよくひしぎて。又大蛇太郎が仔細をとひければ。老嫗いはく。かれが昔しは知り侍らねど。はじめの名は犬太郎玄海とかいひつるよしを聞ぬ。足柄山にて渥美左衛門とやらんを殺したる事は。我よくこれをしれりとて。又その始終をつばらに告。今宵しも太郎。美女を盗來て。しばらくこゝにやすらひ。酒などたうべて。山にかへりぬと。とはぬことまでを語りて。唯一命をたすけ給へと詫にけり。健助なほ太郎が隠家の案内を。くはしくとひをはり。皎月のごとき眼をいからし。奔雷のごとき聲をいだしていひけるは。汝豊にあらざばよく聞かし。明なる所には王法あり。暗ところには神靈あり。大罪を犯せる者。いかでか罰をまぬかれんや。我妻子を殺せし報。今おもひ知らせんずるぞと冒りなぶり殺しはいかにして殺さん。爪をはなち髪をぬかんとひまいる業なりと。あたりを見まはし。ありあふ杵を右りにとり。左りに髪の毛をつかみ。ちうにさげて外のかたに出。ひらみたる石のうへに頭をのせ。杵をあげて。餅を擗ごとく。はじめよわく漸々につよく擗ければ。老嫗は苦しさにたへず。手脚をものがきて泣さけぶ。健助かれを飽までにくるしめ。つひに力を極めてつよく擗ければ。忽兩眼飛いて。頭微塵にくだけて死にけり。この時うしろの方に。あなこゝちよと。今ぞ恨みははるけつといふ聲す。健助身をひるがへして。見れば。叢のうちより眞袖が姿。まぼろしのやうにあらはれしが見るうちにきえうせぬ。健助おもふまゝに。響を復し。妻の物語といひ賊婆の白状といひ。網干渥美兩家の仇は。大蛇太郎にきはまりぬとて。悦ぶ折しも。松の梢より。あやしげなるあら男飛下り。やをらぬきあしして。健助がうしろにまはり。刀をぬきてだまし打にうたんとす。健助地上にうつる人影を見つけて。忽身をひるがへし。手ばやく刀をぬいて。只一刀に斬伏たり。此者はこれ誰ぞなれば。かの老嫗をたすけ

5

て。眞袖を殺さしめたる小賊なり。此夜老嫗と酒をくみかはし。いたく酔て。此家の暗き所に臥居たるが。健助が猛き勢ひにおそれて逃出し。遠く走らばかへりてあとを追れんとおもひ。松の梢に上りて始終を見聞し。大蛇太郎をつけねらふ者と知りて。だまし打にせんとし。かへりて健助が爲に殺れぬ。乃ち是悪報の速にめぐり來つるものなり。ときに曉ちかくなるにやあらん。森の鳥飛わたりて鳴こゑするに。健助夜あけて人に見とがめられなば。ことむづかしくおもひつゝ。いそがはしく走りて家にかへりぬ。さて賊婆を殺したるはたらき。又かれが白狀の委細を。皎二郎にかたり。しばらく心氣をやしなひて。心しづかに身土をととのへ。もし山中にて飢たる時の爲とて。靈棚に供じたる團子を取り。布の袋にをさめて。健助が腰につけ。小松をば隣家にあづけおき。兩人龍の雲を生じ。虎の風を起す勢ひをなして。黒髮山に馳行けり。兩人が扮作をいはゞ。品ことにおほからめど。爰にかいつけんはくどくしかるべし。

優曇華物語 卷之五上終

優曇華物語 卷之五下

江戸 山東軒 主人編

第十三段

金鈴道人因縁を説事

かくて皎二郎健助兩人は。ほどなく黒髮山の麓につきぬ。抑此山は希有の高山なり。うば玉の黒髮山を朝越て。木の下露にぬれにけるかなと。ふるき歌にもよめり。根は地角に盤り。頂は天心に接る。遠觀は雲痕を磨斷し近看ば月魄を併吞す。深嶺幽谷のうち。常に雲霧をこめて。奥の限りをしらず。天狗もおほく栖とて。杣人柴刈のたぐひすらおそれてかよはず。人跡たえたる山なればのぼるべき道だになし。佛法僧。慈悲心鳥などの。棲をもつて。山深きこと推て知るべし。健助は膽ふとき男なれば。これまで折々此山に入りて。獸をとりたることあり。山口の案内はすこしく知るといへども半山より奥にはのぼりたることなし。ゆゑに只妻の教へし。佛法僧の聲をしるべとし。前頃朱碗のながれ來し。谷川の源をしたひてはせのぼり。林木原いと深く石群としく立かさなりたる處をすぎ。尾花刈萱ふみわけつゝ。木の下露に袖ひちてゆくに。いまだ初秋なれど。寒氣凝たる深山なれば。山越の風いとさむく吹わたりて。笹のくまびなりさやぎ。谷の水音はるかにきこゆと。おもへばめぐり下りては。殆げなる岨をつたひ。峯の松風は雲井にと。おもへばめぐり。上りては。岩根はひいてたる所を越。これよりあふげはまかべなす峰あり。磐石は階にふみ。からうじてのぼること凡三百歩。姫子といへる松の延わたりて。碓をつゝみ。霧もる日に映ずれば。衣を緑に染なせり。岩壁高くそびえ。瀑布なのめに飛て。恰も糸がけるごとき。好景なれども。心いそがはしけ

れば目もとゞまらず。ひたすらのぼり。又くだること數百歩にして。大なる谷川のほとりにいでたり。兩人手を取りあひ水中にいでたる。岩のかしらをふみて渡りけるに。皎二郎滑かなる岩をふみあやまりてのけざまに倒れ。ふかき溪水のうちにおちてけり。健助驚き。救あげんとせしが。急流なればはるかに流れゆきて。ほと／＼溺死んとす。時にあまたの猿。藤葛にとりつきて谷に下り。且一隻の大猿。皎二郎が手を取りて。岩のきはに引よせければ。その餘の猿ども。襟をとり袖をとりて。つひに皎二郎を。岩の上に引あげたり。此ひまに健助。岩を飛越々々して。此所にはせまあり。皎二郎が身に恙なきを見て。ため息つきて悦びければ。猿どもはみないづくか去りけり。兩人は嶮き道を過來つれば。息なづみ足なへぎて堪ざるうへに。飢にさへ臨たれば。健助携たる。團子をとりいださばやと腰をさくるに。袋のくちとけて物なし。かのいそがはしく走りたる時。おとしつるか。こは何とせん。かく飢ては敵にむかふに力なしと。心をわづらはしめける所に。いづくともなくあまたの鵲群來て。健助が失ひたる。團子をくはへ兩人が前にはこびおきて。つひに空高く飛去りぬ。兩人大に喜びこれをうちくひて。飢をしのぎ。氣力再び盛なり。皎二郎俄然としておもひあたり。健助に語ていはく。我亡父過つる年洪水の時。猿と鵲をたすけたることありしが。今我等が。危急をすくひしは。その時の猿鵲にて。友をあつめ。そのかみの恩を報たるならん。やさしくも忘れざるかな。鳥獸すらなほかくのごとくなるに。かの大蛇太郎はおなじ時。溺死とせしを。これも亡父に一命をたすけられたるに。その恩人を殺して讐敵となること。鳥獸にもはるかにおとりたる悪人なりとかたり。兩人ひたすら猿鵲の所爲を感じけるをりしも。前面の霧深きうちに。人の聲あり。四句の偈をとなへて道

天行洪水浪滔々 遇物相援報亦饒
 只有一人來一休顧問 夙恩到底敵讐招

と聲たかやかにとなふ。皎二郎これを聞。心におぼえある偶なれば。大に怪み。かく人跡たえたる山中に。かの偈

をとなふるは。何等の人にやと。あふぎ見る時。怨器はれてあきらかなれば。なほよく見るに。前面の岩上に草座をしき。童顏鶴髮の道人。金鈴をとり。端然として座し給ふ。是乃ち過つる洪水のきざみ。水災を告給ひし。聖僧に疑ひなければ。皎二郎いそがはしく。地上にふして禮まひけり。道人見やり給ひ。我此所にありて偈をまぢぬ。我そのかみ水災を告て。汝來一家の者を救たる時。今となへたる四句の偈をさづけたるに。汝が父慈悲深きあまり。偈の意にもどひて。犬太郎をたすけ。果してかれが爲め非命に死す。素是宿世の因果なれば。いかんともすべからず。楊生が犬。楊寶が雀のたぐひ。鳥獸の恩に報たるためしすくなからず。かへりて人は仇を以て。恩に報る者おほし。顧問することなかれといひしは。是なりとの給ふ。皎二郎恭いひけるは。やつがれ曾凡慮に疑ことあり。かしこけれどとひ奉る。やつがれが父母は深く佛を敬ひ。専ら慈悲を好み。おほく陰徳を積といへども。露ばかりも善報にあはず。人を救て其人の爲に害せられしは何ぞや。天理もし如此ならば。世に人をすくふ善人はあるべからず。積善の家には餘慶あり。天道は善に福し。淫に禍すなどいへる語は。いつはりにて侍るや。此疑とけず。ねがはくは示し給へといふ。道人莞爾と打ゑみてのたまはく。汝すこしく儒道の理を曉すといへども。いまだ佛道の無量なる教を知らず。太史公が伯夷叔齊を憐みて。天は是歟非歟と疑たるに似たり。いかてか天に非理あらんや。夫善惡因果經に。善を行て禍を致あり。惡を作て福利なるあり。受報の不同なるは。皆先世の用心等しからざるによる。是以所受。千差萬別なりといへり。又傳燈錄に闇夜多と云者。鳩摩羅多尊者に遇。我父母素三寶を信ずといへども。常に疾瘵に榮。營作する所皆意の如くならず鄰舎にひさしく旃阿羅する者あり。彼は身常に勇健にして。所作みな和合す。彼は何の幸ひにして。我は何の罪ぞと問ければ。尊者曰。何ぞ疑にたらん。且善惡の報に三時あり。凡て人は但。仁は天。暴は壽。逆は吉に。義は凶なるを見ては。すなはち因果なく。罪福むなしといへり。影響相隨て。豪蓋もたがふこと靡ことをしらず。縦百千萬劫を經とも。亦磨滅せずと答ければ。闇夜多これを聞て。頗に

疑を釋たるよしをしるせり。汝が疑念も又このたぐひなり。三世因果のことわりを曉ざれば。しかおもふもうべなり。抑汝が父母は。前生において大に隱惡を犯せる者なり。前世にて其罪あらわれざるにより。今生にむくい來て。汝が家三代盡く非命に死し。つひに血すぢをたやし。泥犁地獄に墮落して。ながく呵責の苦患をうくべきはずなりといへども。汝が父母今生において。おほく陰德を積ぬる功によりて。其身は非命に死すといへども。今已に天堂に生れて。無限の歡樂をきはむ。しかのみならず。三代におよぼすべき罪を滅したれば。汝よりしもつかた子孫にいたるまで。福利満足意のごとくならん。これまつたく汝が父母。今生積徳の功。むなしからざるゆゑなりと示し給へば。皎二郎忽ち日ごろの疑をとぎ。胸中の雪はれて明月のかゞやき出たるこゝちしてけり。道人かさねてのたまはく。此山の賊大蛇太郎といふは。すなはち大太郎支海なり。弓兒も彼にとらはれて窟岩にあり幸ひにして。身をはづかしめず。まつたく貞節の徳なり。かの賊我姿を似せて入定といつはり。おほくの寶をむさぼりつれば。我爲にも佛敵なり。かれが罪惡今日にせまり。汝等に打るべき時いたれり。しかりといへども。かれ三十餘人の強賊をしたがへて。いきほひ猛烈なれ。たとひ汝等。兩頭六臂ありとも。敵することかたからん。彼等今窟岩のうちに酒宴をもよほしてあれば。今一時を過ぎば。盡く酔伏べし。其油斷を襲て打ば。勝利まつたからん。此所より凡三百歩をゆけば。彼等が往來する間道あり。それよりさきは行に安く迷ふべき道にあらずと。こまやかに示し給ふ。時にはるかの峯のあたりに。佛法僧の鳴聲あり。こだまにひゞきてちかく聞ゆ。兩人これを聞て眞袖がことばにたがはずとおもひけるに。道人あふぎ給ひて。我國はみりの道のひろければ。鳥もとなふるはとの給ひつゝ。柱杖をとりて空になげ給へば。たちまち一朵の白雲と化し。くだりて岩をつゝむ。道人はすなはち雲中にかくれ入給ひ。只金鈴の音のみひゞきて。雲はやゝ高くのぼり失ぬ。兩人はあとをふしをがみて。感涙をおとし。教のごとくしばし息で。氣力を養ひ。皎二郎は淵衣をしぼりなどし。時の過るをまちけるに。ほどなく日もくれ果て。夕月夜の光りあきらかなれば。時刻いたれ

たすら走りゆきてつひに岩窟のほとりにつきてけり。向上れば萬仞の青壁劍を削り。直下ば千丈の碧潭藍に染り。岩窟は廣大の自然窟にして。石門をきびしくとざしたれば。打るべきやうもなし。兩人彼此をめぐりて。便宜をうかがひけるに。はるか岩上に少しの空なる所あり。かしこより忍びいらんと。蕙葛にとりつき。岩の尖を階にふみ。からうじて門内に飛下り。まづ樞をうちやぶりて。扇をおしひらくに。一箇としてとがむる者なし。折こそよければと深くすゝみいりて見るに。焚すてたる篝火かすかに消のこり。そこら杯盤をとりちらし。數十人の小賊等。いたく酔たるとみえて。高駢して伏居たり。兩人床の上ののぼり。簀をひしゝとふみならしければ。小賊等睡りを醒し。夜打のいりたるぞ。みな目をさませとよばはり。弓上槍よと大にうろたへて。立噪といへども。みないたく酔たるうへなれば。跟々踏々として物の用にたゞず。皎二郎は壺斬の名劍を打ふり。健助は槍をまはし。みだれたちたる衆賊のうちを馳いりて。こゝに斬伏かしこに突とめ。四面八方をはせめぐり。蜘蛛十文字にかけちらし。いきほひたけく戦ければ。小賊等敵することあたはず。右袈裟左袈裟に。斬るゝもあり。胸板を突とほさるゝもあり。から竹割に斬れて兩段にわかるもあり。吭を突れて。のけさまに倒るゝもあり。腰車を斬はなさるゝもあり。頭を立破にわらるゝもあり。暫時に十四五人打れて。死人の山をなし。鮮血の川をなせり。残れる賊等も。過半手を負たれば。防戦ことあたはず。秋葉の暴風にやぶられ。春花の猛雨に戕るゝがごとく。皆ちり／＼に逃去りぬ。彼等をいくたり打取とも。益なしとて追ゆかず。皎二郎奥の方にむかひ。大蛇太郎はいづくにある。はやく出て勝負を決せよ。かくいふ者は網干兵衛が一子望月皎二郎なるぞと。聲たかやかによばはりければ。やがて大蛇太郎。惡龍の深淵を出。猛虎の幽洞を出ること勢ひをなして。一間のうちよりをどり出。狼藉をなすは何奴かとおもひしに。皎二郎にてあるか。我沈醜熟睡のうちに。小賊等を打せたるぞ安からぬ。いで／＼つかみ殺して。肝なますにつくらんずるぞといひて。

頭の髪は上さまにして。みだれたること蓬のごとし。目大にしていなびかりのごとく光り。鼻をふきいからし。牙をかみ。髪髭をそらしてぞ立たりける。げにこれ盗跖があれたらん勢ひは。かくぞあらめとおもはる。鮫二郎小をどりして悦び。めづらしや犬太郎。汝がゆくへをもとめんため。碎身粉骨千辛萬苦たとへいはんに物なし。やうやく時いたりて今あふこと。盲龜の浮木を得。優曇華のひらくを見るが如し。恩人といひ養父母といひ。汝が爲には天地とひとしき者を。殺害したる大罪人。いかでか天罰をまぬかれんや。速かに勝負を決せよとよばはる。健助いはく。汝足柄山にて。渥美左衛門を打たること。おぼえあるべし。我は乃ち渥美が家士來海健助といふ者なり。昨夜汝が爲にとらはれたる婦人は。左衛門が娘なり。又汝が眼病の薬の爲めに殺されたる女は。我妻なり。主君の敵妻子の讐。萬段にきざみて恨をはらさん。覺悟せよとぞよばはりける。太郎雷のやうなる聲をして。かや／＼と打笑。汝等此岩窟にいたれるは。夏の蟲火を撲燄を惹て。みづから身を焼に異ならず。正に是汝等が運命の盡たるなり。いで／＼反撃にすべきぞ。觀念せよと。ほざきにほざいて。力足を踏ならし。長劍をぬきて。只一刀ときりかけたり。鮫二郎のぞむ所ぞと。刀をまじへて相闘。一來一往一去一回。鬪已に三十餘合におよぶといへども。いまだ勝負をわかつた。健助は鬪をあらそはずしりへにありて。もし鮫二郎危く見えば。相たすけん。槍をかまへ眼をはなさず見居たりけり。太郎は身材六尺に過て相貌凶悪なり。鮫二郎は女びたる風流士なり。立ならびては。餓たる虎の前の羊羔のごとく。いと殆げに見ゆるといへども。鮫二郎が打太刀は盡く法にかなひ。ことに早業の達人にて。身のかるきこと飛鳥の如く。右りに避左にひらく身のはたらき。太郎が眼に見とむることあたはず。太郎は権力比類なしといへども。劍法は深く熟せざれば。太刀すぢやみだれぬ。ときに鮫二郎。ひとつの空所を見。呀と一聲さけびて打太刀を。太郎うけ損じて。肩尖を斬こまれ。大木をたふすがごとく。尻居に撞とたふれたり。鮫二郎ちか／＼とふみこみて。をがみ打にうちけるが。太郎居ながら手ばやく。席薦をとりのけて。床の下に飛入ければ。鮫二郎が刀は空を斬る。健助太郎をとりながすまじ

第十四段 鍛冶橋内ふたゝび女兒に遇事

かくて兩人つゞいて穴にいらんとせしが。穴のうち暗々として。淺深をはかり知らざれば。容易にいたることあたはず。かくばかり辛苦して。偶敵にめぐりあひ。本意をとげずしてとりにがしつるは。何たる不運ぞ。日月は我輩がためにはてらしたまはぬかといひて。大に歎ける時しも。一朶の白雲空にあらわれ。雲中に金鈴の音ひゞきて東の方にゆく。兩人これを屹と見て。まさしく是はかの道人我輩を。みちびき給ふならんとて。外のかたにはしり出雲のゆくかたにつきてゆきければ。つひに岩窟のうしろにめぐり出たり。此時月の光ります／＼あきらかにて。恰も白日の如し。さてかの白雲は。はるかむかふの峰の上にとゞまり。しばししてきえうせけるが。忽ち大蛇太郎峰の頂にをどり出。こなたを見やりてあざみ笑ふ。鮫二郎これを見て。おひゆき打とらんと心あせれども。深き谷をへだてたれば。翼なくてはいたりगतく。只拳をにぎり。牙をならして。身をもだゆるのみなり。時に健助携たる。二所藤の弓の握太なるに。たかうすへの尾の矢をつがへ。籠かつぎのうへまで引かけて。暫かためて丁と放つ。その矢あやまたず。太郎がむなさかを籠深にくさと射とほしたり。一箭なりといへども。屈強の矢坪なれば。何かはもつてたまるべき。忽ちさかしまになりて。谷底におちてけり。鮫二郎身ををどらせて喜び。誠に希代の弓勢かなと賞嘆し。兩人いそがはしく谷底にはせ下り。火把をふりてらして。彼此をたづぬるに。太郎が尻溪水のうちにあり。引あげて見るに。岩に打れたると見えて。頭くだけ烏珠とびいで。鼻歪腹やぶれて。五臟六腑を出し。手足の骨盡とく折て。恰も斷線偶戲の如し。兩人これを見て。あなこゝちよき死ざまかなとて。悦びあへることかぎりなし。鮫二郎千辛萬苦してつひに仇をむくい。共に天を戴ざるの語にたがはざるも。まつたく至孝の徳なるべし。おもふに犬太郎洪水の時。溺死んと

せしをすくはれたる。恩人を殺して讐敵となり。今又死て屍溪水の裏に漂たるは。因果觀面の理毫蓋もたはざる所なり。天理彰々悪人はおのづから惡報あり。豈怕欽ざらんや。彼が出生の地。筑前福岡の海中に。常に風波のあらし所ありて。屢々渡船をそこなふ。これを支海ヶ灘となづけ。彼が暴惡のおほく人を戕たるに比して。後世の戒とし。且千歳の後までも人の憎みをうけしむるとなん。さて皎二郎大蛇太郎が首を打おとしてたづさへ。いざこれより弓兒をたづねいざさんとて。兩人ふたゞび岩窟にいたりけるが。弓兒はさきつかたより石門の邊に出て。兩人をまちけるに。折よくいであひ。互に恙なき體を見て心を安んじ。皎二郎太郎を打とりたる。はたらきの始終をかたりて死級を見せければ。弓兒は只喜びに堪ざりけり。扱弓兒小賊等はみな逃去て一人ものこらざれば。心をゆるして疲をやすめ給へといひて。湯をはこびて吭をうるほさしめなどし。昨夜かの山寺にて皎二郎を見失ひ。獵戸藤一に捉られ。太郎に奪れて岩窟にいたりたる事。太郎がそら入定の仔細。父左衛門がおびたる刀を見つけて。敵なることを知りたる始終をつぶさにかたり。かの刀を出して見せければ。皎二郎健助はかはるく。眞袖が靈の告るによりて。よろづの事を詳に知り。惡婆を殺して仇をむくい金鈴道人に遇て示しをうけたる事まで。こまやかにかたり。互に恙なき再會を喜びあへり。しかるに皎二郎。父母の法名をしるしたる。位牌を出して岩上にすゑ。太郎が死級に刀をそへて手向。地上にひざまづき禮たゞしうして云。父母尊靈ともにきこしめせ。やつがれ今敵犬太郎を打て死級をさゞげ奉る。又はからず御かたみとなりし。壺斬の刀をそへたれば。靈魂みづから手をくだして。恨をはるけ給へ。南無幽靈頓生菩提。阿彌陀佛／＼となへて。しばらく伏をがみ。さて死級をとりて健助にあたへ我志は已にとげつ。このうへは弓兒が宿志をもとげしめ候へといふ。健助心得侍りとてこれをうけとり。弓兒とともに渥美左衛門が法名をとなへて伏をがみ。死級を地上におき。左衛門がおびたるかの刀をぬき。弓兒にもたしめておのれ手をそへ。死級を梨破に斬破て。志をとげにけり。弓兒喜びにたへず。再び又亡父の法名をとなへていひけるは。健助家の位牌を賞し給ひ。前日の罪をゆるして。もとのごとく君臣の誼をむすびかへさせ給へといひて伏をがみ。健助にむかひ。亡父汝が罪をゆるし給ふしるしに。おび給ひつる此一腰をとらすべし。かたみとも見よとて興へければ。健助欽てこれをうけ。弓兒が深き情を感じて。涙に袖をしぼりけり。かゝる折しも。とらはれの女ども走り出。我々は太郎が爲めにとらはれたる者どもなり。何とぞ故郷にかへし給はれとなげく。皎二郎これを聞。心安かれ皆それ／＼の家に。おくりかへすべしといへば。女どもはひたすら悦びあへり。かくて皎二郎健助兩人。おくふかくいり。太郎が貯おきたる金銀を探出し。盡とくわかつて女どもにとらせ。衣服雜器のたぐひはその儘にすておき。大把をとりて家に火をはなちければ。折ふし山越の風はげしく吹て。暫時のうちに灰燼となる。ほどなくしのゝめの空あかくなりゆけば。いざ麓にくだらんとて。健助は弓兒をおひ。皎二郎は女どもをゐて。かの間道にかゝりてくだりければ。のぼりたる時の艱難にかはり。纒のあひだに麓につき。中禪寺の山にのぼりて觀音を拜し。しばらくこゝにやすらひぬ。

第十五段 橋内が母年賀を祝事

その時むかひのかたより。夫婦とおぼしき旅人。山駕籠のごとくつくりたるものに。老女をのぼし。兩人してこれをかゞけてのぼり來。此三人の者すべて笈弦を着。觀音の詠歌といふものをとなへつゝ來れば。三十三所の觀音。巡禮の者とは見えぬ。かの者ども堂上にのぼり。皎二郎等女まじりにこぞり居るを見て。老女をかたはらにおろしおき。それなる婦人のうちに弓兒といふはなきや。もしあらばたづねたき仔細ありといふ。皎二郎いぶかり。しかいふは何等の人ぞ。いかにも此うちに弓兒といふ者ありといふかの者どもこれを聞。果してたがはずといひつゝ。兩人ともにはしりより。いづれが弓兒なる。はやく遇たし見たしといひて。婦人のうちをいそがはしく見まはず。健助兩人をつ

きのけ。汝等は物狂ひにや。何にまれあやしげなり。まづ其人をたづぬる仔細をかたれといひてにらまへければ。かの者どもや、心つきたるさまにて。俄に腰ををり。もみ手しつゝいふは。我等心いそがはしきま。仔細をいはずればあやしみ給ふもうべなり。抑やつがれは。近江の國滋賀の山里に住。鍛冶の橋内と申す者也。これなるは我雲にて名を小雲と申す。駕籠のうちなるはずなはち我母なり。我四歳になる女子ありしが。十五年以前。鷲にとられて失たれば。悲さやるかたなく。愁にしづみて居たる折しも。童顔鶴髪といふにやあらん。面は童の如く髪は雪よりもしろく。凡人とは見えざる旅僧。鈴をならして我門にたゞみ給ふにより。うちにむかへ奉りて。兒を鷲にとられたる物語し。菩提をとひ給はれと願ひしに。旅僧我等夫婦の相を見給ひ何やらん呪文をとへ眼をとちて。しばし念じ給ひ。よし、汝等愁ふることなかれ。其兒は死せずして富人にひろはれぬ。今より十五年を過なば。再びめぐりあふ時あるべしと告て去給ふにより。唯これを霧ばかりの力となして年月をおくり。已に十五年を経て。今年にいたりぬれば。よろづに一ツかれにめぐりあふこともあらんか。もし又世になき者ならば。菩提の爲めにもなれかしとおもひ立て。西國三十三所の觀音巡禮にいて。前の日美濃國谷汲の華嚴寺に詣て。通夜しけるその夜の夢に施無畏の寶處にいたるとおぼえて。觀音菩薩岩上に座し給ふ。韋駄天とおぼしきもおぼし。善財童子にやあらん。みづらゆひたる童子もおほしき。彩雲しきみち。異香薫じわたりて。たふとさいふべうもあらず。時に觀音告たまはく。汝等夫婦の孝心を感じ。前年金鈴道人をして告しめたるごとく。鷲にとられたる兒に。再會すべき時いたれり。今年某の月某の日。下野國黒山髮の邊。中禪寺にいたりてまたば。かならずめぐりあふべし。背上に鷲の爪の痕ある女こそ汝が女兒なれば。今は名を弓兒といふぞ。努々疑ことなかれ。金鈴道人といふは。原填星の化身なり。その精をくだして假に下濁の凡身となし。過去の因果を示し未前の禍福を告しむ。皆是大悲拔苦のためなりと告給ふと見て醒ぬ。母も妻もおなじ夢なれば。奇異のおもひをなし。その月日をたがへまじと。いそぎて當國にいたり。今日しも此に

まうて來つ。それなる婦人のうち弓兒あらば。心におぼえあるべし。又鷲にとられし時。かれが身につけたるまも袋に。觀音の小像をいれおきぬ。是たしかなる證なりと。こまやかにかたる。弓兒はさきつかたより。物語の半を聞いてうれしさにたへず。心頭突々と跳てやまざりけるが。かたりをはるをまちかね。あわてまどひて走りより。弓兒と申すは妾なり。今のたまひしこと。皆心におぼえあり。さては實の父母にておはすかといひつゝ。ひしととりつきて哭ければ。橋内夫婦つらく見るに。幼顔におぼえありて。疑べうもあらず。十五年ぶりにて我子にあひ。夢に夢見しこゝちして。何といふべきことばだにいでず。唯さきだつは涙なり。老母も駕籠のうちよりはひ出て。孫にてあるか我はそちが祖母なるはとて。四人手をとりあひ。うれし涙にむせけるはげに。理なり。橋内弓兒をつれつゝと打まもり。さてもうつくしうおひたちけるな。何人に育られて。かくみやびたる姿にはおひたちけるぞ。我兒とはさらにおもはれず。養立給りしは何人ぞ。なみくの恩にあらず。せめて遇まらせて。一言の禮をのべたし。とくとかたるべしともよほされて。弓兒は養父左衛門が洪恩のほどことに深きをおぼえ。非命に死せしかなしさ。更に又おもひいだされて胸ふたがり。涙あふれおちて返答もせず。時に健助かの女どもにもむかひ。汝等はかしこの小堂に到りて待べしと云て退。扱近く進みて云く。先程の無禮は恕せ給へ。姫君は幼時のことは知せ給ふまじ。僕かはりて語はべらん。やつがれは美濃國の郷士。渥美左衛門高敦と申す者の家士。來海健助と申者にて侍り。前頃主君左衛門。一子なきことを愁ひて。谷汲の觀音にいのり。一日華嚴寺に詣てかへるさに見れば。年舊大鷲。をさな子をつかみて飛來り。老松の梢に翼をやすめ。をさな子をひきさきくはんず氣色に見えしが。ものにおそるゝやうにて。翳をあてかねたり。主君これを見て。あな、危し。誰かあるはやく鷲を射殺して。兒をたすけよと命じ給ふ。その時やつがれかたはらにしたがひありしが。やがてたつさへたる弓に矢をつがへ。しばし打しぼりてかなぐるに。矢は鳴ひゞきて鷲のむなさかを射とほし。鷲はたちまちひるがへりて地におちたり。をさな子は着物枝にかゝりて。梢に

とゞまりければ。やつがれいそぎまどひて木にのぼり。兒を懷にしてくだり。主君にたてまつる。主君抱とりて見給ふに。玉のごとき女子なり。身うちを見れば。守り袋のうちに觀音の小像あり。かの鳥鬚をあてかねしは。まさしう此尊像の擁護なるべし。これまつたく佛のさづけ給ふにうたがひなし。普門品に。説欲求女便生端正。有相之女。宿植徳本。衆人愛敬と説給へば。此女子はかならず宿世に。徳本を植たる者ならめ。我養女となしておひたてん。此兒危命をたすかりしは。一ツには觀音の冥應。二ツには汝が弓勢のつよきによれば。此兒の名を弓兒となづけ。此後々までも汝が功をあらはすべし。しかりといへども。此子の父母死に失しとおもひて。さぞ歎ん。着たる物を見るに。貧者の子と見ゆれど。佛のさづけ給ひし子なれば。血すぢの穢たる者にもあらじ。汝かれが父母をたづねいだせと命じ給ふにより。普探しけれどもつひにしれざりき。志賀の山里より。遠くへだちて。谷汲までかの鳥のつかみ來しも不思議なり。みなこれ菩薩の擁護なるべし。其後主君左衛門殿横死せられ。ゆゑありて家亡。姫君かくさすらへ給ひぬと。かたりければ。橋内等三人ますく菩薩の靈驗をたふとみ。且渥美が仁心を感じて。涙に袖をひたしけり。皎二郎は双方の物語を聞て奇異のおもひをなし。金鈴道人は填星の化身と聞果して凡人にあらざりけりとひたすら感歎し橋内等にむかひて。初見の禮をのべければ。橋内はいく。さきつかたよりとひ申さんとおもひしが。物語のかさなるによりてひかへぬおん身等異なる裝束して兵具をもち給ひ。身上盡く血にそみたるは何ゆゑぞこゝに來る道にて。里人のかたるをきけば。今朝黒髮山に敵打ありしといひしが。おん身等にて侍るや。皎二郎はいはく。たまふごとく我輩は昨夜かの山にて。我父母の敵。弓兒が養父渥美左衛門の仇なる。大蛇太郎といふ賊を打とりぬ。その仔細をいはんは一席に盡す。ゆるく語り申さん。まずやつがれが寓居にいたり給へとて。皎二郎健助湖中におりたちて。身上の血をあらひおとし。橋内等三人。小堂にまち侘たる女ども。一齊に連立て山を下り。健助が家にかへりぬ。かくてまづかの女どもの住所をとふに。みな近國の者なれば。人を雇ひてことごとくにぬかりゆかしめければ。みな恩を謝して出ゆさぬ。扱皎二郎弓兒健助三人かはるく。これまでさまの。災にあひて。千辛萬苦したる事を。こまやかに語りけるが。弓兒肌につけたる守り袋より。觀音の小像を出し。妾自害せんとおもひしこと度々なりしが。危き死をまぬかれしもまつたく此尊像の擁護なりとて。感涙袖をうるほせり。橋内等三人も。むかしの艱難をかたり。一同に喜びあへること限りなし。此時しも。肥後の國につかはしたる飛脚の者。網干が家僕を同道してかへり來家僕皎二郎にまみえて家内の無事を告路銀一百兩を出して渡しければ。皎二郎折よしとてよろこび。宿志をとげたるうへは。一日もはやく古郷にかへるべしとて。旅よそひをととのへ。健助父子をもとに連ゆくべしとて。家をとりをさめ。眞袖が墓に詣て靈をまつり。足弱の輩はみな駕籠にのぼし。皎二郎健助等は擔つけたる馬に打乗。一齊に發足し木曾路にかゝりてゆくに。弓兒は前日の艱難をおもひ出し。道すがら橋内等にかたりなどし。衛守があへなき最後を憐み。墓をたづねて香花を手向。それより美濃國にいたりて。渥美の墓をまつり。故郷の地をふみて。懷舊のかなしみに袖をしぼりつゝ。谷汲に詣て觀音を拜しけるが。鷲の翼をやすめたる老松の。依然としてあるを見るに。なほ佛の靈驗ぞとふとまれける。ほどなく近江の國にいたり。橋内が家をとりをさめしめて又連立。つひに肥後の國にかへりつけば。家内の悦びいふべうもあらず。皎二郎まづなりはひの事をとふに。家僕等は皆故主兵衛が洪恩をうけたるうへに。老實の輩なれば塵ばかりもわたくしなく。家産むかしに一倍せり。扱一日あまたの僧を請じて佛事をいとなみ。網干渥美兩家の父母并に衛守眞袖等が靈魂をまつり。又渥美屋が菩提寺。衛守眞袖を葬たる寺に家僕をつかはして。常住金ををさめ。ながく追福の料とす。又吉日をえらび。あらためて皎二郎弓兒婚儀をなし。家僕等に祝酒をあたへければ。皆喜びて千秋萬歳といはひけり。其後別に家をつくりて。橋内等三人をおらしめ。兩家の父母再生のおもひをなしてかしづきたれば。かれ等三人昔の艱難にかはり。身には暖衣を襲口には珍味に飫て。世界のたのしみをきはむ。誠に是橋内夫婦至孝の徳なり。健助等父子をもとにをらしめ。朝夕を安く過さしけり。さるほ



どに皎二郎よろづのことみな心のごとく。一點の不足なしといへども。よき君につかへさせ。先祖の家名をあらはせしめんとおもひし。亡父の宿願をとげすこれのみ一ツの不足なりしがほどなく嘉吉の一亂おこりて義教公赤松満祐が爲に弑せられ給ひ。その子義勝公早世によりて。次男義政公將軍に補せられたまふ時に管領源勝元。皎二郎が文武に達したるうへに。孝義のあつきことを聞て感ぜられ召出して高祿をあたへ家臣とす。これによりて皎二郎亡父の宿願をとげて大に喜び。たゞちに京都にうつりて居住し。忠義をはげみて仕へけるがつひに三男二女をうみ一ツとして心のごとくならざるはなし。しかるに皎二郎主君勝元になげき渥美が家再興のことを義政公に願ひければ。義政公理におほされ先將軍持氏の陰謀を憤り。渥美等まで家を没收せられしが。かれさまで罪なきことをしろしめされ。もとのごとく田庄をかへし給はりければ。皎二郎恩を謝し奉り。次男をもつて家をつがし渥美高運と名告し。健助をそへて家事をつかさどらしむ。後に左衛門が血すぢの女子ありしをたづねいだして高運に娶しけり。扱橋内が老母年百歳におよびければ。まれなる長壽なりとて。年賀のむしろをまうけ。兩家の一族つどひて大にこれをいはひけり。皎二郎は勝元卒去の後も。その子聰明丸政元に仕へて。ますく忠義をはげみければ。漸々に恩賞を得て家富榮けり。皎二郎等衆人かくのごとく福利を得ること。圓通菩薩の冥應とはいひながら。まつたく彼等が忠孝義貞のあつきにより。此事ふるき物語にもかきて侍るとなん。人のほのくかたりしばかりをかきけるなり。

此册子百年前不知何人所撰。簡編已做爲反故。貼屏障。百年後不圖出爲全本著于世。猶優曇鉢羅之三千年而華也。其所記孝子復仇。淑女執貞。暨鐸仙施教。惡漢蒙罰之事。精細垂教戒。相傳鉢華有七德。於此書亦然。一孝子寢苦枕塊。執兵遂志。二至誠通神。神人感格。三淑女意思。嘉耦自成。四萬福來聚。恩惠播布。五吉德成鄰。國無賊民。六子孫蕃殖。僕從衆多。七身無疾病。齡保長久。是此七德久隱而不顯。今得醒々叟以現出于世矣。書舖仙鶴請之鐸梓。彼問所以命其書。乃把筆題外簽曰優曇華。他日叟聞之曰。優曇華之稱。浮屠氏所以喻妙法希有。而非敢所當也。宜刪去之云。余之所稱。唯歷久以出。待其人以著。七德一出。是彷彿乎優曇華之現金輪王哉。非敢僭其德也。叟冷笑而諾。因題無辭。禦他人之誹謗耳。

關東 蘭洲 東 颿 撰

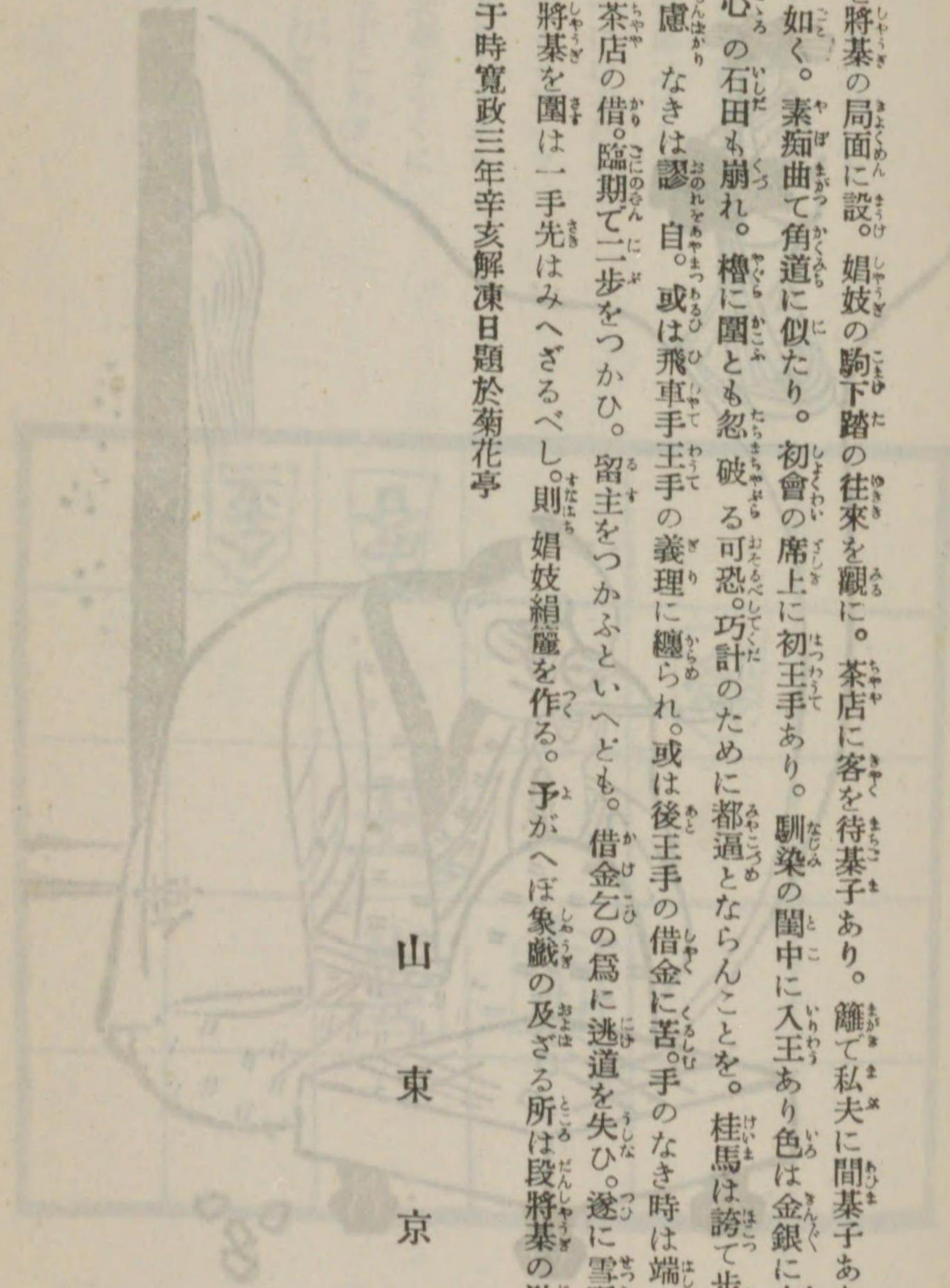
手段詰物娼妓絹籠

手段通物娼妓絹籠自序

煙花を將基の局面に設。娼妓の駒下踏の往來を觀に。茶店に客を待基子あり。離て私夫に間基子あり。大通直して飛車先の如く。素痴曲て角道に似たり。初會の席上に初王手あり。馴染の閨中に入王あり色は金銀に有て思案になし。堅心の石田も崩れ。櫓に圍とも忽破る可恐。巧計のために都通とならんことを。桂馬は誇て歩兵の餌となり。香車の慮なきは謬。自。或は飛車手王手の義理に纏られ。或は後王手の借金に苦。手のなき時は端の歩をつくぐ。苦にする茶店の借。臨期て二歩をつかひ。留主をつかふといへども。借金乞の爲に逃道を失ひ。遂に雪隠通と成あり。嫖客と將基を圍は一手先はみへざるべし。則娼妓絹籠を作る。予がへば象戯の及ざる所は段將基の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭

山 東 京 傳

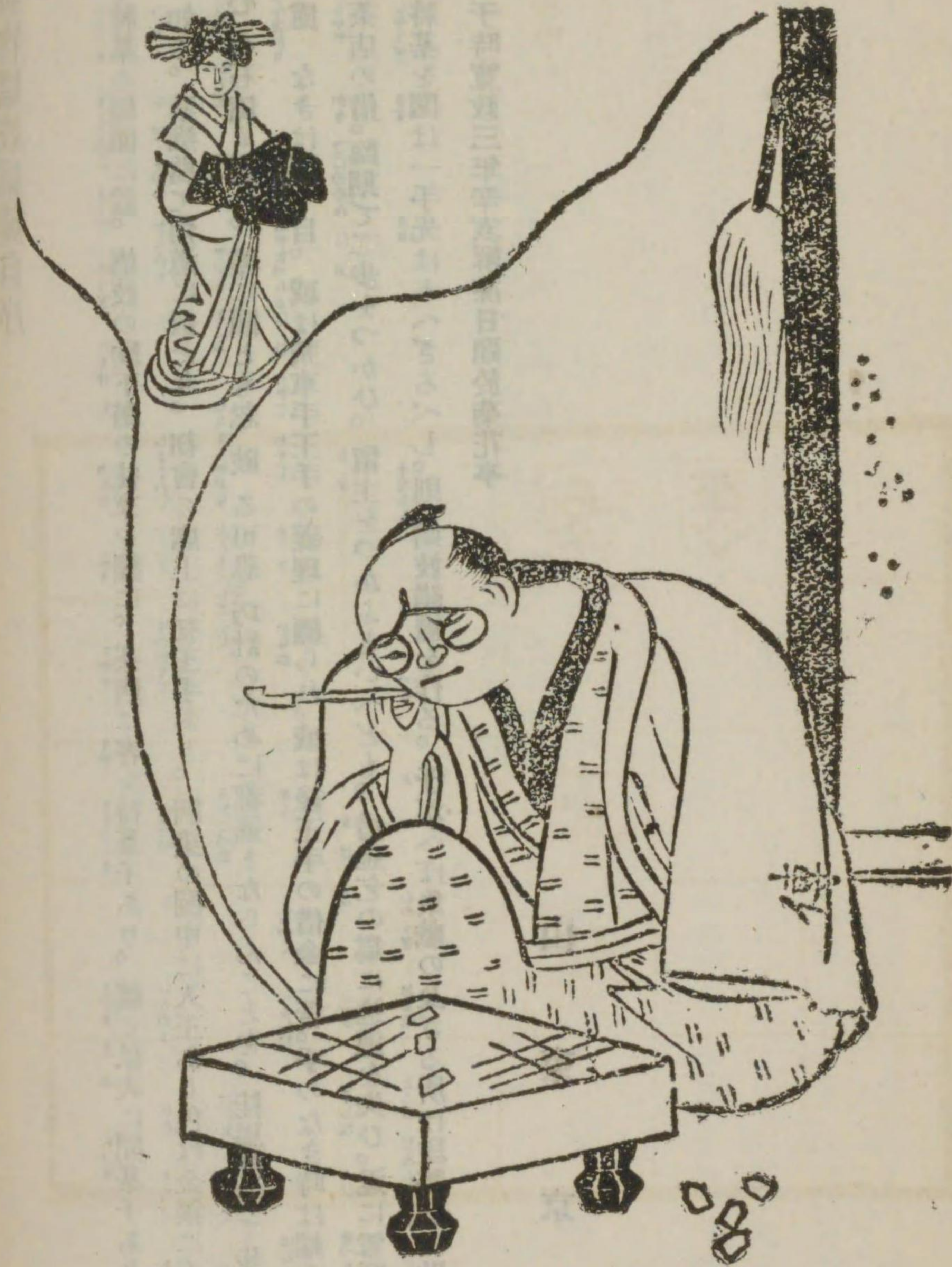


手 段 通 物 娼 妓 絹 籠

客はしごを二だん上
 る女郎てうづのかほに
 てよこにゆく藝車を一
 まいうつ女郎二けんめ
 のざしきへにげるひら
 いて大手をとる又一ツ
 けんにげるあたまから
 銀とうつ女郎ふそくに
 おもひとらずにわきへ
 よる又金と打女郎がそ
 こで死ぬ

右 惣傾城

	平	卒			
			銀		
		王			
		藝	禿		



目 録

第 一 回

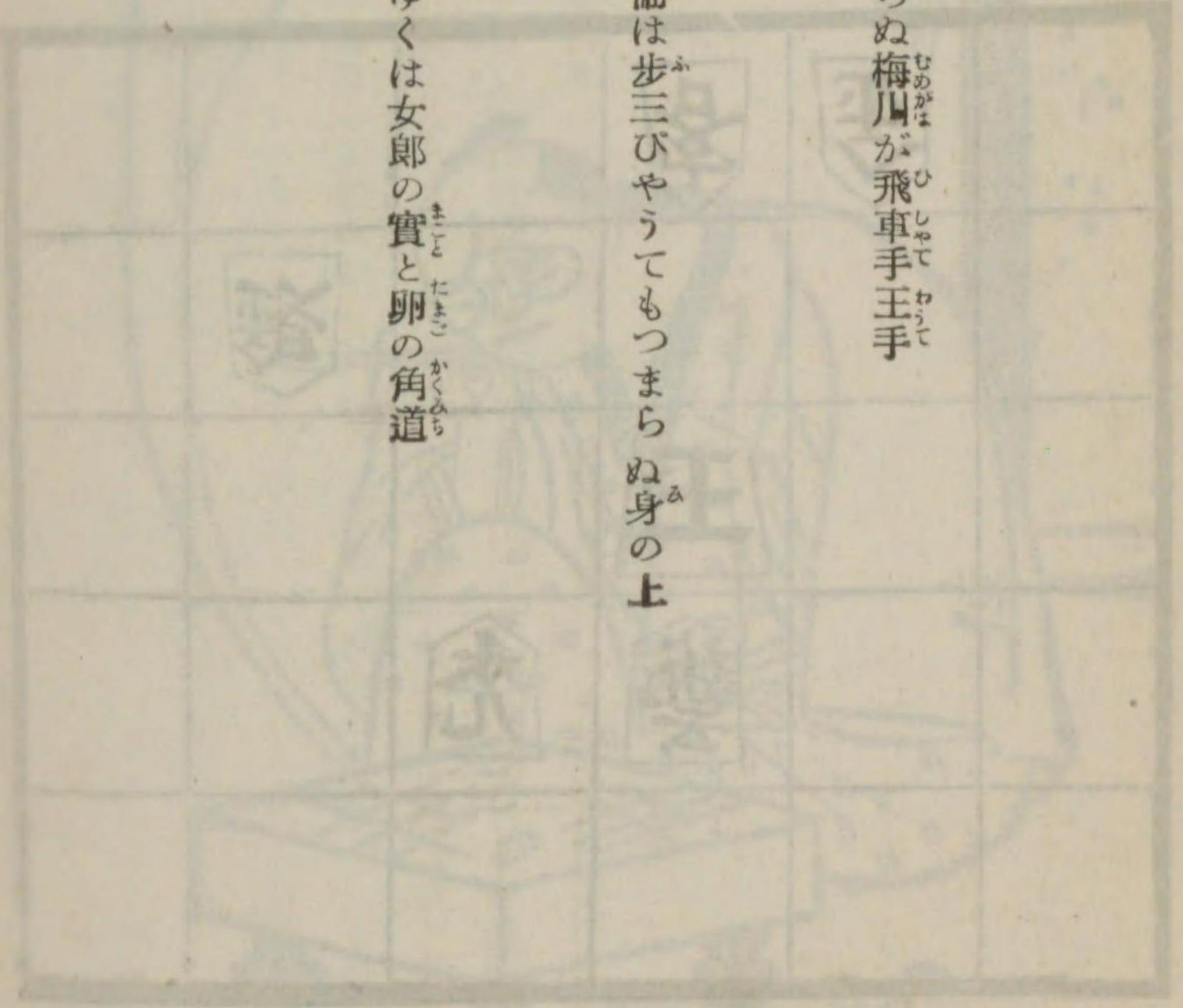
義理と情の二夕道には間基子もならぬ梅川が飛車手王手

第 二 回

つかひはたして二歩残る龜屋忠兵衛は歩三びやうてもつまらぬ身の上

第 三 回

金銀をつかふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道



手 段 詰 物 娼 婦 網 籠

山 東 京 傳 著

○ 第 一 回

義理と情の二夕道には間基子もならぬ梅川が飛車手王手

□砂糖屋の丁兒甘きをきらひ鱈屋の猫見心をこのます李白一斗詩百篇といはれし底ぬけも劍凌て居風呂をたて三日ばかり入ておいたらまつひら御免といふはしれた事花の下にて死たひといふた西行も飛鳥山に居つゞけをさせたらばかならず欠伴をするなるべしされば久米仙人も女湯の番人にしたら素駁に通をもうしなふまじく弓削某とても女護島へながしたらたちまちおいとま申べしどれほどに美麗ても朝夕眼前にぶらついて居てはこのましからず女郎買も命から一番目の大切な金銀を出し其くせゆきところを都合と工面で饅茹にした首尾をもめ主親の四ツの眼をはじめとして人目をしのびて通へばこそおもしろくもあつたもの一升買の是るをしらず心のまゝに樽酒のたのしみせんと女郎の跨ぐらに家藏をうちこんで贖身をし渾家にしたところが三日もたゝず鼻につくは世間にくらもあるかたなり雙ヶ岡のしれものが花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはといひしもまことに如在なき法師也こゝをもつて推ば女色の迷ひもはれぬべし嗚呼さうじやとひとり悟顔に口ひろきとはいふものゝ捨がたきはとかく此まよひの二ツにて上は一人よりして下も八萬人講の講頭兎の毛のボツトセの髻に天乍て出やうといふ耆夫さへもむかしおもへば信田の森のうらの朽家てちよろまかした徒にてかの川柳が選に母の名は親父の腕にしなびて居とは頗る穿なりわつち

51

やこういふかなしいことがおさんすと酸鼻ば酒呑童子と腕をもししかねまじき丈夫の涅槃像の二玉みるやうに己に似あはずうちしほれてともに涙をこぼすをみれば實に女色は斷骨の斧迷 心の毒にきはまりたり佛祖三經に浮屠子の曰愛欲は色よりはなはだしきはなしと宋の景之元が美色のために命を没するをもつてみれば忠に死こと甚輕しとかたく出かけしも 理なり賢を賢として色にかへよとは 則此場所ぞかし又媚は比 封狐機は 深 穿 虎 など、明人もいふて置たれば女郎に身を 謬 こと中華の人情もたがふことなく夏の温石と女郎の心はつめたいがちの者なればいづれゆだんはなるべからず其又戀といふ川上をたづぬれば僅方寸にたらざる節穴なれどむかしから此穴へ國を陷城をおとし家をおとし身をおとす者倭漢にかぞへつくしがたく周室を陷したる褒姒が穿も波錢一ぼんおとしたる鳥炮川岸の穿もついに填たうはさをきかず清の曼翁が碧海の迷津ちやといふたもうそばなしむかし混沌未分のとき耳か鼻からか子をうませ社 禊 宗廟をつかせこんな節穴をばあけぬ相談にきはめたらこふいふ惑ひもあるまいもの何につけても邪魔な厚口 怖 の風ぬき穴あやしむべくおそるべきの妖洞なり

○爰にむかし大坂新町の廓ちかき最と閑なる所あり世を捨人のくれ筈地名を箕輪とよびなれしも箕輪となえの通ずればぬれのちかきにあるゆへならん箕輪の寮として人もしりたるあたりに目だちし一トかまへは新町の女郎屋榎屋治右衛門が別業なり抱の女郎梅川といふおいらんぶら／＼と煩ひければ保養のためにしづかなる此別荘がしかるべしと番頭新造の梅春も看病のためもろともしばらくこゝに遷居るころしも秋の露さむく菊はたげこにむしられて尾花は炭の俵につくられ庭の草木もうつろひていとほそく啼すゞ蟲の音をきくにさへ苦海の身は夜みせしらする鈴の音かと耳おどろかすも 理なり折からそぼふる宵しづれ遠寺の鐘の音もしめりいと、あはれの秉燭ころむめ川はかの福清がいつしにひとしく幽霊の漬かぜにあふたるやうにおとろへて臥具に其身をもたれるそばには新さうむめ春が氣をなぐさめの本よみさし。モンおいらんのとこへ心もちはどうておさんすへ。アイけふはいつそようおさんす。ヲ、それで

はモウだん／＼とよくおなん／＼すておさりのいしやう風のあたられぬやうになさりんしドレ薬をあたまめて上申しやうと尻輕にとし下なれど姉とよぶおいらん大じの心根は 妹 女郎のかまなり梅川は涙ぐみ。ホンニ何から何まで心づけしんみもよばぬぬしの介抱死でもわすれはいたしんせんにへ。なんのマアばからしふおざりいす灸すへの文句のとをり世話になるのをあねといひ憂をかたるを 妹 と名をよびかはすながれの身はせはにたり又したり互のことしておざりんすものそんなことに心づかひをなさりんすなサアくすりをおあがんなんしへと薬ちやわんをさし出せばむめ川は手にうけて。それにつけても苦勞になるは忠兵衛さんの事でおざんす。ヲ、それもくらうになさりいすな おまへさんの病氣さへよくなればわたしがどふとも都合してかけますまして上申内證の手まへもとりつくるひ二階のあくやうにして上ゲ申す縁といふものはあぢなもの忠兵衛さんの初に來なんしたは去々年の三月さくらの初日でおざんしたね。アイぬしはよくおぼへておいてなんす。アイサわたくしは其時のことわすれはいたしんせんしかも其晩忠兵衛さんの形は羽織も小袖も黒八丈。ヲ、それ／＼下着は對いの結城縞。もちものや何やかやもいつそ意氣ておざんした。わたしも其晩まんざらでないと思ひんしたから床へもはやくゆきなんぞいひたいとおもつてもモンへほれた男にやものゝいひにくひものでおさんすねへ。それはたれしもさうておざんす其夜はしかもわたしが次の間に寝てゐんしてよく聞ておりんした忠兵衛さんのいひなんすニハ梅さん初から此やうなこといふてもねへが此間中からお前を仕廻によこしても御全盛といふものでついにいばんがなく初名代て來るも何か己ぼれらしいからじれつたく思てゐやしたが今夜かうしてお目にかゝるといふはわつちやア夢かとおもひやすトまづをつな手を出しなんした。ホンニ忠兵衛さんの癖がいつそぬしは上手だよそれからわたしがかういゝしたわたしがやうなはかない女郎でもマア虚にもそんなことを。いつておくんなんすはうれしふおざんすとよくいふものでおざりあすがわたしがマアうれしくおざんせんまんざらでないと思ふ心からひよつとさうおつせへすをほんにしてとやかうおもひてもこれぎりでお出

なんせんときは大たいつみじやおざんせんにへそれよりはやつぱり正直にをれはわきに馴染があるが今夜はそこがわかいゆへしやうことなく夜をあかすまでに来たのだからかならずとやかうおもふてもむだほどに思ひきれといつておくんなんすがわたくしはうれしおざんすトわたしが申したアイサそれから又忠兵衛さんがいひなんすにはフウおめへはむごひことをいふものだ此ごろうち茶屋からたび／＼聞によこした事もてへげへしつてもあるだらうにそれをわきへこかしてそんなことをいふのはフウきこへた思ひきれといふなぞだらうがれ死をするまでもさういはれては是非がねへと一ツすねなんした。ホンニさうでおざんしたそれからわたしも面白なつて来てヲヤじれつてへどうしやうのうさう思ひんすくらゐならこんなな気はもみんせん何をいふのも。フウ初會だといふのかこつちは久しくとやかうとおもつて居た心からは初の裏のと思ひはしねへしたがこつちばかりさう思つてこないやらしい事いふはつもられる所がはづかしいモウ何もいひやすめへ。トあちらむいて寝なんしたゆへやう／＼あやまつてこつちをむかせモシマア聞ておくんなんしおまへさんも人にしられたお方なれば今までお近付でこそなけれ茶屋でもたび／＼お見かけ申とうからしつておりんすもの初會の心じやおざんせんおまへさんさへほんに來ておくんなんすならわたしやシツかくごをしてよびとげ申ておざんす。ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞の事。ソリヤほんにかへ。ム、しれた事こんなうつくしいしやつつらをなんの持ずともいふことにこんなにをれを迷はせる。ト煙管でたゞくまねをしなんしたはづかしいが其ときは眞にうれしくおもひんしたそれがやつぱり悪縁でおざんしたとほれた男は噂にしてもふさぐが女郎のならいにて梅川は梅春とかけ合の此はなしにのりが來てすぎこしかたを思ひ出し我身にかゝる夜具を出れば梅春はそばから氣をつけ引かくるほどなく四ツの鐘なれば氣くたびれても梅川は其まゝそこにすや／＼と寝いりつけばむめはるが夜具かいつくろひ屏風ひきよせ見かけてをきし淨瑠璃本一枚あくれば秋のかぜ障子のひまより方燈の火をさつとふきけす折から封櫃のあたりと思れて迷子の久太郎ヤイ。ト、トンチヤン／＼賑へをす雨の音

サラ／＼

第二回

つかひはたして二歩のこる龜屋忠兵衛は歩三兵衛でもつまらぬ身の上

口朝光也浪速の色をせきとめて黄金でかけし木擁はながれの里の浮しづみ贖身あれば梳籠あり日に新にして日々にあらたなる町の夜みせのにぎわひはるよみせのすがよきチヤンラ／＼ゴシ／＼／＼地すはす「さいもん小ぐり清水のたんいたはしやてるの姫とある所へ立よりて口説ごとこそあはれなりづれレン／＼〇いめへましい下踏のはなをふんぎつたコレ鐵やこれから西川岸をそゝるべえきを付るまがりつとにみづつたまりがあるぜへまだかはきやアしめへかぶる「かうしへかほ山本屋エイ人ウ／＼「こなたには里町「かうしをコウ見さつせへアノ如意輪觀音が消しるのこんりうに出たといふ身てほうづへをして居る女郎は扇風が一度かつて揮られた女郎だ「花「フウなんたるひつてんらしい女郎だのう茶づけ店のならづけといふうすひ櫛に水膠をみるやうな笄をさしてゐるぜへふめねへあたままだコウあけほのへわきざしも一しよにあづけてくりやアよかつたのうごうせへじまやになると「犬尾をふまれて「へきやん／＼「花「おきやアがれとんだ氣のきかねへ犬だ「馬「犬をふんだも今道心じやアねへか「花「わりい／＼「馬「こつちらの初だけのさひといふ色の着ものをきて何かふさいで居る女郎はにげそくなつて判人の所へさがつたといふつらだ「花「うさアねへアレあくびをすらア大キな口だぜ「馬「かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎は素人繪の濱むら屋だ「ト花「腕ははやとなりのかうしをのぞいてゐるともしらこつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着ものをきてゐるしんは茄子のさしこみをこせるとつて鍋のふたでおつべしたといふつらだのう「ト「へどもあいさつなきゆへ「ホイこいつア大わらひだ「ト「自註二曰此里町花腕はいづれも助六かまたくをくらふて十年ぶりといふ實はすてをふつてもどるゆへ素手振といふあやまりなるよし在古吉原にてはとりんば「待客「見なへどれもうつくしいものでらと云今は素見といふそこで女郎はすかんといふか〇現此むかふより来る二人の客はやかたものと見へ

ござるの 今一人なるほどきれいなもじやこう見た所は御年始に奥へ出たやうでござる 客「いかさまアノまん中に
 柏の定紋ぢやうもんを付てをる女郎はよい器量きりやうりやうではござらぬか金田氏の内室うちむろに少しにてをる 客「なるほどイヤこちらの黒い衣裳
 もよくござる 客「モノ是は何屋といふのじや 茶屋男ちやうやうおとこ「つきそてのうちからかんばんでうち
 榎屋えのやと申のでござりますんならこゝにおきめなされませさうこういたすうちそろくよい女郎衆はあがりませ
 客「イヤもそつと他を見物けんぶついたさう トこいつはなはだきが多チヤンラくくく かいら折しも表のかたそりやけんくわよと立さわぐかのむ
 かけられ 忠兵衛ちゆうべゑ「た手をとつて コリヤアどふするのだ トふりは きたひ定あんまりうぬがづらが大きいから此定さまがむし
 たるなり 客「うぬがやうな野郎が此土地へへいりこまるからおいらが格子かぢへ立てもすのこんにやくの
 とやかましい崑崙くわんわんの灸點きうてんをみるやうに白イつらをはりまげてやるべいむねつくそのわるい猿唐人ざるだんじんじやアねへか
 定「へたに齒箱こはばをならしやアがるとこうだぞ ト大黒のつらへ白毫を入たやうにしんちうのびやう
 をうつたくるぬりの九けたをぬいでふりあぐる 忠「其手をしつ コリヤアわいらアだ
 れにかたのまれたなア「コロリンシヤン。たそや此夜中にさいたる門をたくはたくともよもあけじ宵のやくそく
 なければ トむかふの二かいの響きこゆる〇又(響)すきをみて(忠)にぶつてかゝる(忠)しづんで身をひねる(響)はづみにて天水桶 響「七尺の屏風も
 へころびかゝるすかさず(定)又ぶつてかゝる(忠)ひらいてよこにはらふ(定)よろしくとしてとふへかたあしふみこむ 響「所へ人々出やひ引くるてうど二かい
 をとらばなどか越さらん (定)鐵「兩方より一度に 響「羅綾らりやうのたもともひかばなどかきれさらん の響きれる〇扱此つちやの樓上にはお
 もてぎしきのおいらんむめ川きやく人あつてもはやん間にとこおさまつてゐる 梅香「じれつて火だのうなせ おこらねへのう ト折かな廊下
 次の間には番頭新ざうむめ春しかみ火はちへどびんをかけた紙であをいてゐる 梅香「おめへさん ト折かな廊下
 浮浪「ほんにかへはりさけすね ト何かいひながらかけ むめはるさんへ御つぎのものをおあんなしたか 梅「ウ、おかたじけ
 のちに喰ふと思つてしまつておいたよき役人はおめへどうした 響「あいサ聞ておくんなしへにくつてなりとせん
 あれからとう／＼かけだして参りした茶屋からも人をよこしいしたけれどもわたくしやアかまいせんひさしいもん
 でおざりいさアな 梅「おめへもほんにあれほどほれられたがつてゐるものをモウちつとほれてやればいゝ 響「おめへ
 さんさうおつせへすけれ共わたくしだつてもそねへにやアはれられんせんものを此ざしきの さよ世「あの人さんもばか

らしいよ／＼おかけ出したんすねへ 響「ホンニいつでもせわをやかせる客人でおざりいすよ トふりながら梅「コレ
 藤路ふじぢや今いひ付たことをきり／＼しねへか何をして居るのだ 秀「アイ今こゝに 梅「久しいもんだ早くいかねへか
いふ折ふし本問のびやう 梅「アレよばつしやるマアあすこへゆきや 秀「アイト此用をたすちうかに うき
 ぶのうちにて手をたたく 梅「今こゝから出たといふなりふとこる手してはわり口から 梅「浮なみさんへ
 出なんしツサおいらんでサ 響「アイ今参りいしやう トたつ所へ来るきやく下着のま、おびをじだらくにむすび 梅「浮なみさんへ
 ぶそはくするの格子かぢへ地いろでもきたか 響「よしておくんなしわたくしらア色と土用干とちようかんはいつにしたことがおつ
 せんいろといふものはどんなものだへこの井戸からわきんすねへ 梅「井戸からはわかねへがへその下からわく虫
 よ。こいつにひよつとたかられると女郎衆ぢやうぢゆうもしめへだまづ二采ふたさい一步いっぽの小金から喰ひはじめて櫛笄くしけいから着物をくひそ
 れから髪かみをくひきり小指こゆびをくひだん／＼臟腑ぞうふへくひこんでいろ／＼な氣をださせとう／＼命いのちをとりおはんぬなんぼう
 おそろしき物がたりにて候。さこれをなづけて死々心中ししやうぢゆうの虫といふはなこいつをよけるにやア鍋屋なべやのうは氣うせくす
 りといふがあるおめへがたもちつと用心にしめなせへ 梅「ぬしも女郎衆ぢやうぢゆうにほれられなんすから其虫むしの部ぶだね 梅「おき
 やアがれ みな「ヲホ、、、、 トわら 響「たんとおしやべんなし ト出てゆ 梅「ぬしやアなぜそねへに廊下らうか下かをしなん
 すへ色でもできなんしたかへ今おつせへした虫にでもなるきかへ 梅「爰こゝの二階にひろしといへど 梅「ぬしたちの相手あてに
 なるやうな手のある女郎衆はねへといひなんすのかへ 梅「あるといふとさマア茶ア一ツくんねへ 梅「ぬしやア口果くちくわ報はう
 があるなすよ今丁ど茶を入した 梅「くふものなら口がほうだがこりやア呑のものだから咽のどがほうだ 梅「わりいしやれ
 だねコレ小夜舟せやふねさんついであげ申シな 梅「アイ ト火鉢のかげにあつたちやわんをとり中にはいつておたし 梅「こいつアイ、茶だコ
 ウその紙につゝんだ物はなんだ トあけてみれば火はちの灰のかた 梅「おきやアがれおらア又豆まめこくりんかと思つた 梅「なからき
 ついげびぎうなこつたね トいふ所へか 梅「山本屋やまもとやじやア十二せんのはきれたと申シイすからわきてとつて参りした トのり
 きかみを出す 梅「馬鹿ばからしいこの子こア柳りゅう嬢ぢやうさんだからいゝけどもあんまりゑんりよがねへぞよちつときをつけや 梅「き

51

をつけずともいゝぞよやつぱりこんだからおいらんの客人のめへでもかまはず此筈は二百ばかりいせんなまつげの
 かうくはたつた二ツはうつてよこしいせんと正直にいやヨ 梅「馬鹿らしふおざりいすはな おぶしやれなんすなわた
 くしらアそんなげびはしいせん 柳「それでもいろ男の所へさつまいものむしんをいつてやつたさうだ 梅「うそうおつ
 きなんだがさうまうしいした トいふ所へきたるへやもち女郎左の袖で口をかくし右の手にみすかみをもちそへてつまをとるなりは紫のいたじめの
 わせ ませがき、ヲ、つめてへヲヤ柳嬢さんへぶましておざんすね ト火はちのそばへ おやきみのわりいたれぞすはつており
 イしたかへ 梅「なぜへ ませ「いつそたゞみがあつたけへよ トつめてニツツ 柳「ませがきさんかういつちやアそれ鏡らし
 いがごうせへにきれぬだぜそしてあいけうがこぼれるやうだかならずそこらへこぼしてくんなんひよつとふんづ
 けると氣がもめらアおめへの紋はおつなもんだの枝巴かきついのをゑだつきにしたの 雷の鉢植じやアあるめへし
 五だがしはゑだき、ようなどにならひてあやまりてまゝゑだたるのは五 柳「むくのすそもやうもこいつアあんしたあやすきに二葉葵か
 べちやアねへ芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ ませ「そんなにわる口をおつせへすとくらアしんすにへ
 トラはこいたのちやほ 柳「コウあやまつたりおりよヲば野郎のまりだと思ふさうだおつとまちげへ羽根だとおもふさうだ
 梅「ヲホ、、、 トたはこをす い付て出しぬしやア今夜は誰さんだへ松さんかへ ませ「いゝへ何此ぢうの松屋からまいりしたらうさ
 梅「色おとこじやアねへかへ ませ「後生でおざりイす甘露梅のすくなつたといふいろのぢいさんておざりイすよ 柳「イ
 ヤごうせいにむづかしくたとへるぜ晦日ばきの鼠いらずじやアあるめへしコウトもちつとなんぞわかくいひてへも
 んだ トそこらを 梅さん此びやうぶの虎は女郎衆の座しきにやア目出たくねへせ 梅「なぜへそれでもとらは千里はちつと
 のうちにあるくと申すから待人がさう早く来るとよふおざんす 柳「それはさうだが又千里もどるといふからわりい
 梅「あんまりかへらねへとうちをしくじりんすは 柳「なるほどこいつアさうだのしたが此虎のつくばつてかたをいか
 らして居る所はなんの事はねへたばこやの 質粉切といふ身だぬぬだはけいせいにはおち 梅さん 筈をちつとかしな

梅「おめへもいゝ年をして酒中花をからみつけてをくことおねへおとなげねへトおめへ 梅「時際らしひまだ
 としがいきませんは 柳「としがいかねへも氣がつゑへおめへこととして三ツと斗り球人にあふだらう 梅「どうしんし
 たとへ ト是もあまり 柳「これさませがきさんさはんなんな耳があぶねへ トしんさよ舟いねむつてゐる 柳「みねへ小夜舟さん
 がはじめたソレごらうじろ釜ひつくりかへつてたことかはる傘ひつくりかへつて介六とかはる八文々々 ませ、梅「ヲ
 ホ、、、 舟「此こへでめをさ 柳「さよ舟さんどうだ氣がついたか トいふところへ胡々とり上られる 初雁「らうかをか
 柳嬢さんにはながてきたからおいらんがきておまんまをおあんなんしツサヲ、せつねへ トためいき 柳「がうせへに鼻息
 のあらひ子だぜ箔屋のうちへはおかれねへなんぞうめへものがあるか 柳「いけへことおざんす 柳「先へいきねへ今い
 かふ 初「サア早く御出なんしをしてね百代さんがね此文をこらうじいしとサ トしんぞうの文とみへわかりみへ書たあく筆の文を
 柳「いつてみち フウなんだ〇一寸申上りりうひやうづらにこんやはよくきたなせ御やくそくのまげいはへのきれを
 もつてこねへにくいやつだ御うらみにぞんじり〇ぶしやれな文句だサアよめねへ沈金ぼりの唐草をみるやうな
 字の文だ 初「マアあつちへいつておよみなんし トむりに引ずつてゆく、此きやくべしてほられるきもなく又きいたふうのともからにもあ
 のしみに来るきやくなり 柳嬢さんのむたかおかしくつてあすひすきんしたまいりしやう 梅「モウ一ツぶくおあんな
 んしな ませ「又いつて参りしやう ト出てゆく 梅「さよ舟さん視箱を出してくんな ト文を書かゝる折からひけ四ツの かふるまはし「子
 とも衆寝なさへよくく ト二かいちうふれる〇これなかみのやくにてかふる 〇下には簾をおろす音のきこへ夜響ひければおち
 やを挽た 妓は大赦にあふた罪人をみるやうなこゝちにて欠をし伸をしながら梯ばた／＼二かいへ上りわか局々へ散
 亂するかつかちめへおまんまを喰ふ雛姫は恰も飢たる虎のごとく器にのこりし魚の骨は化野に異ならずとやかくす
 るうち音もなく右も左もしづまりて此所に海誓山盟あれは彼所に顛倒鳳ありて襄王が夢をむすぶときなりけり〇
 龜屋忠兵衛は梅川と深くなびて金にはつまれど身はつまらすあけ代かた、まりて此二階かとまつてゐればばんと梅春がはたらきにてねすのばんに金を
 やりこよひやり手部やのひくるをあいづに下さしきへかくしをく忠兵衛は下ざしきくら所につめたいよきふとんの中へはり身をしのびる折からむめ

川はさしきのきやくをねごかし 梅川「さぞきうくつておざりヒしやうモシ文はとどきいしたかへ 忠兵衛「きのふとどいてくは
ててうづのかほてこへ來り しくみた手前もいよく 懷妊にちがひなく近々にひっこみ寮へいつて脱すとのことむかしの身なら相談のしやうも
あれと何をいふも金がさきたつしつてのとをり勘當の今の身の上むかしわすれぬ朋友のよしみにて少々づゝの合力で
かすかのくらしはなしにならぬけちなしぎ 梅川「初におめにかゝつたはわすれもしんせん去々年の三月それから一夜
が二夜とたびかさなりじれつたいとあひたひといふ癖を心につけてからとやかくとするうちに 忠「コレサ愚痴な今さ
らそんなことをいつたつて借金しゃくきんの云わけにもなるめへ。みゝをだしや 梅川「わたしもとうから其りやうけん
引込ひっこて寮へゆけばぬしにはあはれず文のたよりもしにくゝなりんすそれにまだきくさへ怖いおろしぐずりとやらひよ
つと死ぬまいものもおざんせんよしや身にけがもなく出勤しゅつぎんをしてからが傍輩ほうはい衆に顔みらるゝもはづかしおざんす
それにしつておいてなんすとをりおまへをせいてきやく衆もきれおもだつた馴染もなくあの八右衛門づらの外は此ご
ろのきやくしはみな初ばかりそれにつけてはだんゝたゝまる呉服屋のかり所々のかけとでもつまらぬわけなれば
忠「そんなら逃にるりやうけんか梅川「あたりなきを 忠「そのりうけんなりやしやうがある實はむめ春が此智慧を付てくれた
聞ばあしたアノ八右衛門めがしまつて下の鯨いけすへ手めへをつれていくさうだおれをせきてめへにきをもませたかはりあ
いつがおちどになるやうにいけすからふけるがいゝ宵に地まはりめらがおれに喧嘩をしかけたがあれも八右衛門め
がたのんだに違はねへ何かにつけてにくひやつだ折よくあすは宵闇なればたんぼへ出る庭のうら口おれはさきへまわ
つてあやうにげさへすればこつちのものだ打もなく今まではなしもせぬがこゝからは四里半わきの田舎二の口村と
いふ所におれが實のおやご孫右衛門どのといふのがあるおちつき所はまづそこサ 梅川「そんならアノ梅春さんもしや
うちで 忠「がしてくる注文ちゆうもんであの子が胸におさめてあるあすの手はづもあの子にきゝや 梅川「ホンニ梅はるさん
は懸かりておざんすよつき出しからぬしがせはについてくんなんしてからわたしは苦勞を身に引ひけておなじとき

突だしに出た女郎衆より夜具もはやくしなをして又内證のせはも早くはなれ新造出しもはなやかにしてしまひつねづ
ねも客衆きやくしゆうのもめ其ほかにちつとも人にひけをとらせずたいこ持や何やかやにも切はなれがよいとひやうばんされ着も
のゝ模様もようのあんじまで人にこれはとほめられるもみんなぬしのせはゆへておざんすわたしが逃にたらばてつきりあとして
ぬしにうたがひがかりんしやうそればかりがわたくしや苦勞くろうておざんす 次つぎの間より おいらんへ 梅春「さ
つきにからあすこで始終聞きした跡あとのことはわたしは吞込のみにんておりあすからかならずお案あんじなんすなひとまづこゝを立
のいで身二ツになつてから忠兵衛さんも勘當のおわびをなんしておもて向からいらんの身うけをし日かげのお身
にならぬやう目出たく女夫におなんなんしわたくしもかけていのつておりんすにへ 梅春「折ひからねづのばん八ツのひやうし木
おとこがさきへ立はやがへりのきやくはしごとをおりる○此き
やくは風流の人とみへはしごとをりながら即興を口すさむ

雞鳴曲

青樓撃析唱雞鳴 夢裡陽臺雲雨清
唐突佳人彈枕起 無情亦復是多情
客「駕かははいつてゐるか 茶屋男「とうにはいつてをります

第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横に行は女郎の眞の卵の角道

□世の中は道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿を鳴なるとはとつと昔淺草に鹿茶屋のなき時代の歌なりけり今繁花
のときなれば鷓鴣かんていもさみしきことをしらず熊谷の堤つてて小判をかぞへても氣づかひなしされば人の心もおのづから豁達
にて烟花えんかのにぎはひなどはいふもさらなりやぼにはあらぬ水戸尻色じりいろと戀との鯨いけすの二かい水の底なる鯉こいまでもうかれう

51

きたつ大きはぎはむめ川がけふのきやく中の島の八右衛門といふは金銀まんくの金貨にて女郎のにくがるにくていつら正めん到大あぐら 八右衛門「コウかれ野をみはらした所はどうもいへねてはねへか こ持 闇子「左やうでござります 茶屋てい主「こゝは二かいの眺望は妙さ 新ざう きよ母「モシおいらんのとこへお富士さんがみへんすは 梅川「ほんにノウト 女げいしや 里吉「観音さんの塔もみへます 八「なんだかおもしろくねへ日だ 闇「なぜでござへます御酒がしみますめへサアこれではじめましやう 八「いんや狸々が出番にてやアしめへしさけはかりもはじまらねへ 茶屋てい主「まづおいらんがうかねへちつとうかし申さうじやアねへか 梅川「ちつとこゝろもちがわるふおざりいす 番とうし 梅春「モシおいらんへちつとうきくしなんしなこゝがしらけんすにへ トむめ川にさとられるなとめ 闇「モシ一ツおとしばなしがございます トふもんをちよひとつくり 花欄瓶に紫檀棹の三絃が會所の棚にゐて朋友の象牙の撥にいふにやア聞ば三河島に湯治ができたさうだ芝居の三みせんなんざア土用休の内いつたといふこつたがナントおいらもいつてみやうじやアねいかと咄すそばに食客の櫻棹犬皮の見世さみせんが聞てゐてモシ湯治をなさるならわたくしもお供をいたしたうござります三ツ星の膏薬でもとくなをりませんと しは いうから紫檀棹がどふしたよこねでも出来たかといへば鬺三みせんがハイちとかのさほを痛めましたかこいつアどうでござります 茶屋てい主「おきアがれ 梅春「ばからしいねへ みなく「ヲホ、トほどなく日もくれ燭臺など出しみなく八右衛門かきげんをなをさんとうか ○かくてむめ川は忠兵衛がさぞ待どをならんと心せきざしきのやうすうかゞひてはづして出る庭の面さいはい宵闇折よしと心はさきへ飛石づたひ番頭女郎梅春は萬事に心築山のうしろにしばし立とまり 梅春 小ごま「モシおいらんそのうちかけは人目だつわたしが下着の此小袖を上へきて御出なんし 梅川「ホンニにげる今になつてまで此おせはしんでもわすれはいたしせん 梅春「ナンノおれいにをよびんしやう二の口村へ落付たらやうすをくはしく 梅川「文の便で 梅春「かならず待ておりひすにへあれくおまへさんをよぶのはたしか八右衛門づらがこゑでござんすみつけられては一大事と梅川が手をとつて足ばやにはしり

ゆき庭のしをり戸をしひらけばさぐりよつて 梅川「由忠兵衛さんかトむめ川か思は才腰をはつすればそばに本を讀居たる梅はるがモシおいらん何をひとりことおつせんすと氣をつけられてきのつくは夢野の鹿のゆめにはあらでやはり箕輪の別荘に寝そびれしまゝ梅川がとつゝをいつの胸算用おもひに迫る此時節モシこふしてにげたらばいかゞあらんと心のうちに思ひしはさためにかくもあるべしとすいりやうしたる其始終筆のゆくまゝかきつゞり色情に終身を謬るともがらのすこしは戒めともならんと鳶の唐丸がもとめにまかせ紙くずかごよりひろひ出しそこらこゝらをつゞりあはせてついに小冊となし侍りぬ

51

5
1

戲作四書京傳予誌

山田清三郎
清三郎は、
...

續刊四書京書子集

序

近來世におたは行る。經典餘師と云書をみ閱に。鹽梅よしのおてんより。上手をゆきたる美味にして。盲目の杖闇夜のちやうらん提燈。愚鹵な八兵衛をもあかる明し。土手の八町をも照して。徳に入の大門口にいた至らしむるのかはや籃輿は。此にこれしくもの有べからず。雖しかりといへども然乾坤てかく。癡呆組のま俠々徒は。馴染の文ほどあり難有からず。妄作ほどは手にふ不觸。固や小人にして大道をま學は。鱧を割に鯨の刀を用が如く。是等にはか難からん。彼等をりやうるはう庖丁には。録作者が相應と。筆をつ操て立あがり。已にす艸紙を編けり。夫大樂通用とは申ども。永樂通寶の貨にもあらず。豊後申と號れども。兼好法師の類にあらねば。戯作の四書とはおそれ恐あり。顔觀らるゝもはつかしけれど。頭巾と見せてほ頬包。妄言からみ導木曾海道近道のか拔裏も。至る所は芝蘭の室。鱧の店よりかんばしきを。一度嗅て實に入れ。虚々邑のひ瓢介等が。鼻毛にとんまるか蠅蝋こい。そつちにやア道はね云爾

時

寛政二年庚戌孟陬

山東市隱

京

傳自序

5/1

戲作四書京傳子誌目録

○大樂

大樂は月雪花をおさきにつかひ色と酒とにたのしんでたることをしらざるをいましむ

○通用

通用は質物の通用物の事にしてひどいくめんの女郎買をしめす

○豊後

豊後はすべて江戸げいしやのこんじやうをうがつ

○申

申はまうしんすの申にしてをつりきな所をさす

六

樂

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虚言而兎角入欲門也於隙可見通人為樂氣質者獨頼金銀之損而貧乏次之客者必由是而迷焉則庶乎氣差矣

それ大樂のうへをいはば春は品川の沙干にあそびて身代のひかたとなるも思はれず戀の淵の深みにはまりてれん手くだといふ悪魚のゑじきとなつてはじめてをどろけどもをそまきなり或は上野御殿山飛鳥山の花見に敷間藝者を引連ては諸行無常の鐘よりもやたらむしやうに散したる紙花の下りを食ひ武家方の血氣盛なるは春色に心うごきはじめはよいりやうけんにてずいぶん錢のいらぬ樂と出かけ一日金一分の借馬に鞭うつて遠騎の游山もかへさには忽心の駒の手づなゆるみて大門口につなく中の町の家櫻は寛保の昔にかはらねど人をなじからざる突出しの君が名びらきの蒸籠饅頭の山をなし櫻もひよんな所へうえられて生た花に見らるゝ花のくるしきぞかし目に青葉山時鳥初堅魚かつほくの聲にはじめて心づきも夏が來たそふな今日はいつかだと禿に聞くは居續に氣ぬけのした客人と見ゆる其居續のるすはうへを下へかへしとどのつまりは二ばん番頭がむかひに來てしかつへらしく左やうなお心てはござりませなんだにといふにこちらは闇か雲にてをきやアかれそんまじめをいはすとマア一ツ呑かよいイエ／＼左様な氣せんではござりませぬとはいへとしたじはすきはら御意は吉原一ツのみ二ツのみついには酒か人をのんで宿の事はエ、まゝの川へ流してしまひ氣違ひ水をほれてともに碇をおろし木乃伊とりが蜜人になつて遊ぶもあり夏は墨水に游船をうかめ江戸藝者のひつこぬきをつかみこみだんひとり神八人此人數舟なればこそ涼哉と口ずさむをばから三

5

弦四てうてひきたてゝの大きはぎさいぜんより陸に此舟を見て居たる隠者と思しきが嗚呼愚なるかな花飛ひ蝶をどろけとも人不知と詩の意はうたへとも盛者必衰の道理をしらぬ其はづじや千住の悪臭をかいてさへ女は臭皮袋と云所に氣がつかぬ俗物じやものあのやうにさはぐもみな臭骸の戯れじやほんに凡夫てはあるぞと憂世を悟顔なるも實は錢なし組のまけをしみ金持にはそんなめいつた思ひはなし物に感ずるも根か己か心の欲する所にしたかはす志を得ぬゆへの述懐ぞかし此隠者も錢があらば生者必滅の場所へ氣もつくまじ陸から舟を評するも岡焼餅の謂なるべしむかしは日もくれぬはや舟にのれといひしが此舟は日もくれぬ早々舟からあがりて呑なをさんと神頭の何某が水室に下知して隅田堤の下にこぎよせ中田屋かむさしやかたゞしは舟をもつとのぼせて真崎の崎玉屋といふはらか涼といつばこれ酒色の二ツに而已とまるとなるなり文月は廓の燈籠五町を照しもし總角に棒があたるともなか／＼闇夜とならん景色なし軒毎にともしつらぬるてうちは客人の身よりあくがれ出し金玉かとうたがひ唯人の氣をつりあくるせんまいしかけには萬客の目をおどろかせさらに内しやうのからくりと思はれず絹張の燈籠はすいて見ゆれど女郎の薄情なる胸のうちはずこしも見へず二のかはりの硝子細工は名君をさかさにつるしたるかと思はるこれもそのをこりは正徳の昔中萬字屋の玉菊が追善のためにとぼしはじめしなれど今はそれにひきかえて衆人を迷はす煩惱のなかだちとはなれり近來附合の句に其意をいへるあり去るものはうとく燈籠のさいく過とまことにむべなり十五夜の月見には高も賤も今宵の月をめてて詩を作歌を詠し發句を按す又此夜色里のにぎはひはことにさらなり此日深川八幡の祭禮にて土橋仲町三櫓新古の石場にいたるまで一年の大紋日月見と祭禮とを兼備したる遊び千日にかつた茅も一夜にほろぼしてつけのぼせとなりもとの百姓となる店者あれば百日の説法も尻一ツに放て院をひらくお寺様ありこれぞ眞如の月にあらでついに隱居の月見とせられたり旅行の月も一風流と南驛の傀儡にうちこみ兩松坂村田新叶己がさま／＼介六の氣位になり髪のはけの間から安房上總の月見と興じ田毎より手事を考へて異見する伯母捨山あすが日業をさらしなまても

須磨ぬ籠してくらすは擷と氣はむしやうに高輪のまはりかぬる錢金散して遊ぶもあり其外端々といさゝかなる色里まで月の光りのわりなくて夫相應の月は見る事ぞかし青樓の月は今さらいふも愚なり亦海安寺正燈寺の紅葉見にはふしぎや今までありつる息子とり／＼化粧の見えぼうしてはては鬼住里にこけてしまひ丹楓の錦より正眞の紅閨の錦にくるまるゝ樂み又わすられず冬は雪見とて家根舟に居火燵うはきにあらぬしんの事晋の謝安にまけぬ氣で馴染の妓を携雪見にころぶ所までといふ句によくかなひこじまが崎よりむかふ島のことく浮舟の心意氣も見ゆるなり春秋の角力三ツの戲場杉田の梅見江の島の月見玉川の鮎狩真間の紅葉見金澤の雪見四季折々の樂みはかぞえ盡し難し是天地と云細工人の大からくりにしてたのしみつくることなししかれども樂は月雪花の三ツにとゞむといひながらつまる所は女色ほどの樂みはなし月の清きとて女郎の胸の鏡にしかず雪の色白なりとて抱て寝たためしもなく花ものいはねばむなづくしとつて口舌もならずそれよりも眉は月をまかし肌は雪をあざむき姿は花をはぢさせ雨にいたまず嵐にちらぬ美人を見てたのしむほど如何外に樂のあらんや花より團子色氣より喰氣とは飢饉年に生れた人の言なるべしこれ無量の味ひある女色の極意しらぬ故ぞかしと衆人皆是に同心にて今時の樂を見るにつまる所みな女色へこけるなり昔も人情にかはる事なく夫子衛の君が女にのろきをみてわれいまだ徳をこのむもの色をこのむが如くするものをみずと曰しなり兎角捨がたきは此道の迷ひとせられたり然れども富乏のわかちあつて艶なるたのしみしたくても難し花がうつくしいとて飛鳥山に居續もならず月の明なりとて引窓から見ては興もなし裸で雪も面白からずさればたのしみは女色にとゞむるとはいひながらつまる處金なり金さへ澤山なれば愚なるも奇才と思はれいやしきも貴見へ鶴にのり鯉に乗じ飄から駒を出し石をうつて羊となす仙術よりもはるかをきをこぐ猪牙は天へのぼり四ツ手駕は中をとばずこれ金術の勢ひとせられたりしからば金なくては樂はならぬかと思へどけつして左にあらず顔淵は臂をまげて枕とし樂み其うちにありと太平樂をのべしがこゝを思へば樂みは又金にもあらず唯心なるべしその心の樂みといふは世の

常の俗物には得事難しされば樂みは其身に應ずる處あり骨牌にくらす日もあれば酒にあかさぬ夜半とてもなしこれも己が好ゆへのたのしみなり又女と心中してあたらしいのちすつるも樂みのこうじたるものなり又酒半買て鉢植の蕃椒見ながら女房とともに一盃のんで嗚呼てんとたまらぬ天徳寺ひきかぶりて寢てのくるもたのしみと思へば樂みぞかし金持とても樂みの極意をしらぬば氣鬱を散ずるために樂みをもとめて多くくるしみに至るなりしかれば大樂の樂の字にをりて得事あらばあやまちあるべからず昔世の諺に親苦勞する其子樂をする孫乞食すると一人の樂より孝と慈との二ツをうしなふいましめの言なりこれむべならずや昨日まで日本一の涼の場處ともてはやされ貴賤群集したる地も今日は忽一河の流れと變ずこれ清水ならぬ盛衰の世の中を天の然らしむる處なりほんにそふじやナアと歎息するものをのれがをひこみのしるしか

大

樂畢

通

用

意氣狂句

若衆曰無錢之謂通不迫之謂用通者半化之貧乏用者紋日之出入其錢乃寬
 永年中通寶大夫恐其久而絕也故筆之於文以授格子其子宵言無理中亂寢
 客衆不逢其夜爲千里語之則渡苦界省連則恨藏於店(下畧)

それ通とはなんぞ列子いへることあり徳を以て人にわかつ之を聖人と謂財を以て人にわかつこれを通人と謂と此言こじつけて見ればよく今の通としやうずる者にあたり然れども金銀はのろまなやつでも澤山に持て居るなり氣質は安く難得唯通と野夫との差別を知るを以て通と謂ひ通と野夫との差別をしらざるを野夫といはんか予こゝに通用の二字を以ていさゝかすこたんをして風諫せん夫萬里を井といひ井を十あはせて通といふ是をもつて考れば千萬里の外までもよくせうちするを通といふべし又書的首末全を通といふしかれば初會の首よりきれての末までも全くしていきかたのわるき事なきを通といふべし如來に三妙六通あり井井に圓通あり衆の仙人も通をうしなふては下界たはけと笑れ狐も通力うせては麴町の市にさらさる吉原通深川通芝居通といふもよく其道を得たるをいふべし又用の字をいはん天地全功なし萬物全用なし又人に四用ありと人用らるゝ時は下女もたちまち御新造様とあをがれ用られざる時は麒麟も魯人の古傘に包まれ牡丹紅葉の類とならん又傾城の言に金銀をやくそくし紋日物日をたのむこれを總て用といふなり又急用事と書たる文に用のあつたためしなし酒屋の御用御用の外車留これ等にはもつとも説なし又通用とつゞく時は質物の通用物の事なりこれについて頃日一ツの奇談あり爰に表徳を烏有といふ者あり其身代は飯器に車をしかけ

るくらゐのくらしなれば何くからず一盛は傾城買に身をゆだねて花にめて月にうかれ雨にもしのび嵐にも通ひ逢方の鼻ひくからねば宿の鳴居を高しとせず元旦の庭のたき火より大三十日の蛤賣來る頃まで月雪花の三ツ蒲團の上に座して他念なかりしも其とどまる事をしつて而後世に隠笠きて簀輪の別業に引こみ孤獨のくらしも世をあぢにすねたる處なるべしされば昔とつたる杵屋流の三味線も心の根よければうは氣の調子あらはれず憂世を壁チヨロの帯に結び邊鄙も心安ければひとしほ住吉屋の煙管に心のやにを通し小人閑居して不善をなすのいましめを常にわすれねばかんにやくも片肌をいれて臍下にをちつき腕のいれぼくろも外山の霞にひとしくだん／＼にきへてなくなり額ぬきあげしもいつしか角とれてゆたかに眠る手枕をおどろかすは誰そ時宗にあらねば祐成が幽靈にもあるまじく時ならねば池の水鶏とも思はれず夢かうつゝかと首をあぐればこはそもいかに異類異形の怪物あらはれ出たり風をおとし家うごきてをそろしたたとへんかたなく濕氣の臭き事鼻をつらぬく鳥有は一目見るより氣も魂も天上へ飛でさらに人心地はなかりけるが彼化物のうち頭と思しきぐるしげなる聲して申けるはいかに鳥有かならず懼ることなかれ我々は壽永の昔西海にほろびたる平家の一門にもあらず化物屋敷の煤拂でもなく質物の精なり世の中のたはげどもの爲にぶち殺されて繩目の恥をうけ七ツ屋の藏にしづめられて浮みもやらず流もあへず迷ひ居ることはや八ヶ月にをよべり夫昔より質と云物なきにあらず戰場に人質あり喧嘩に言質あり借金を質にをくとは女房が自腹を切る時の捨言葉にして清水の舞臺と同日の論なりむかしさる何某の上人とかや十念を質におきたる事ありしが貸主十念のうち一念をもどさず故に此上生涯九念のみまうしけるよりて九念寺と云寺號何所にか今にのこりたるよしを聞くしかれば佛の方便ともなり又露と云字を質にをきたる連歌師もあれば風流の友ともなれり古人訥子は己が名を質にをきたる噂あり新田義貞はこがねづくりの太刀を相州鎌倉稻村ヶ崎の海中へ質にしづめて軍の利運を龍神にくどかれし事あり龍神これを感應して彼太刀海上に浮流しとかやこれ質物に流るといふ言残りしは此時よりの事なりけり今に其所を質利ヶ濱といふ

も此所謂なるぞかし又質卿といふ言に由ては荻の上借萩の下質あり或は燕と雁の入かへ物あり天地も又質屋の度をいは置主受人のなき質物をとらず火事盗人は兩損鼠食ひは置主の損と提札にたゞしくしるす或は質に曲ると云言あり是十の字の尻をまくれば七の字となる是よりをこりしこじつけなるよし七ツ屋と晒落るも則此ゆへんなりそれもはたにゑんりよある時は唯ゆびをまげてみすればそれとさとるなりしやれすぎたる凡夫にあらずや唐土にもありと見へて質店を印子舗と云質物を典貨といひ質札を當票なぞと云俗語あり固我々は持主の身がはりにたちて憂かんなんをこらえ火急の難儀をすくふものなるに今は己が放埒に身をもちくずしやゝとすれば我等をくるしむる事ぞかし或は女郎を身受せん爲に親からゆづられし家藏を家質にいれ其又女郎も間夫に狂ひてすつ裸となり奔駒下駄輝まで質入して苦界十年損料屋の爲にくるしむあり或は初堅魚の名代に給をくるしめこゝが江戸ツ子の尻の穴の廣き所と隣家のとくじつをそしりながらこれを喰ひ又は一人の娘を人質に入て博奕にうちこみ又は五臟のわづらひなる夢をたのみて富の札を買過し主人からもらひたためたる仕着せの布子を殺すもあり武士はなまくらならぬ大小もまげ出家はすぐな心の佛像までもまげな質を置いてうける事なきは恩をうけて恩を知らざるがごとくなりとも我々つうくつならず利あげをされんよすがもなければ此身は鼠にくひさかれついに骸は柳原の干店にさらされん此恨をはらさんには貧乏神の末社となり彼恩不知の徒が皮肉にわけり長く是等をくるしめん汝はすいもあまきもせうちの介なれば此事をかたりきかせ世の中の不埒者どもに傳へてもらひうけもどさんあてのなき闇雲質を置ぬやうに心得させんと質屋地獄の番頭大王にしほしのいとまをこひこれまであらはれ出たるぞやとヒウドロ／＼のおさだまりかきけすごとくにあらずして南風にあふた海月のごとくふはり／＼とうせにける鳥有も始のほどはおそろしかりしが質物の幽霊に逢ひし事古今に奇なる事なれば彼等が述懐なかく面白く有増をおぼえしを予にかたりしが彼質物の精がいひし如くもし金銀の急用ありて質を置ともうける心がけなきは恩をうけてひどき工面をまぬがれし恩をしらぬにあたるべし其時

は必ず質の怨念とりつきて己々が身をくつがへすことうたがひなし金をひろふたら浴衣を染よ肩にかなて裾には
錠質に置ても流れはせまいと謠へども八月がたてば流るゝなり利上のしがらみせんよりもつまる所は儉なりいろは短
歌のしの字の一句に質置事が上手にてと女房をいましめしも不宜乎

通

用畢

豊

後

意 氣 席 中

樂 酒 亭 主

此長幕茶番而時語之不肌柳橋乎
有隙日待夜來未茶飯食乎
人不聞而不喜不亦素人乎

土佐上下に外記袴半太夫も語人なしあまつさへ中あふみの半婦もまでが其名絶たり義太夫は今に盛なりといへども是も
かず外記は勿論半太夫も語人なしあまつさへ中あふみの半婦もまでが其名絶たり義太夫は今に盛なりといへども是も
好不好あり豊後はきらひなく常盤津の津々浦々まで富本の末廣し世の中此二流のとゝかぬ處なく上は玉簾のうちより
下は薦張の芝居にいたるまでかたらずといふ事なし彼方の横町此方の新道常盤津富本の表札なき所なく店子の娘の寒
弾には大家の親父が看經をさまたけ鳴物停止の浴室には湯番の氣をいたます豊後梅豊後竹あきなふにさへ此音聲を
うつすこれはまた名によるゆへとも思ふべきに蝶々とまれ放し龜々までが此淨瑠璃の節あらはるゝぞかし夫淨瑠
璃は信長の時代小野の通女か牛若丸淨瑠璃女の事をつくりしよりをこりたる事人の知る處なり又極樂淨土に淨瑠璃
世界といふありて迦陵頻伽の藝者てやい日夜淨るりを語て留主居并息子ぼさつ或は年季ぼさつのたぐひまで此世界に
て金箔をはがさるゝ事不鮮と此道に識のお寺様のはなされしなり斯て淨るり世々に流れて今其中に豊後節といふも

の出来たるなり是いやしけれ共樂の餘風にして人を和するの器なり樵歌牧笛樂ならざることなし固豊後節は文章に色欲多く音聲姍姍なりしかれども其とり處によりてまんざら姑の小言馬士の悪言を聞にはましなり試に一ツ二ツをいはん高尾懺悔と云にいつかおの字の名をつひてといふ文句あり曲禮に女子許嫁して筭而字此語にあたり又お半の淨るりに唯うつむひてなんにもいはずと云文句あり詩曰奏假無言と此たぐひ多し爰に又さる新道に黒格子をしつらひ竹の管すだれかけたる淨るりの稽古所あり表札に難波津野路梅と猿山流にてしるしたり火とほし比こへ来る二人の者いづれも年季ものと見へて一人は澁染のうはばりをしてさらしの手ぬぐひを肩にかけ一人は伊勢綿の布子に棒縞の前だれをしめ是も角もつこうを染たる手ぬぐひをかたにかけいづれも湯がへりと見へ門口にて伊八「サア源介どんへらつし源介「マアさままへらつせへ伊「ナンノかまうことはねへさきいへらつしな源「わしやアはじめだからさささまさへへらつし伊「そんなら待つし小便を一ツやらかして下路次のわきへ小べんするとモシそけへ小便はなりません伊「ホイこりやア御めんなせへ大わらひだト又むかふのどぶへそのあとをた梅「さんうちか梅「どなたへ伊「わつちサ梅「ヲヤ伊八さんかあがんなせへな伊「さあ源介あがらつしト二人内へ入る内の道具だてを見るに獅子口の花いけははりつばな鏡臺の引出しのかわんに三味せんの三の糸をひもにつけたるぬか袋かけてある（お梅）はあいうへだのよごれた小袖に鶯色を黒くいろあげし大どんすの帯をしめあらひがみと見へてわらでたはねたひつづめの島田此げいしややすやくしやと云る事にてその文をわいてみたるがたよせて梅「伊八さん此間はおさうくごさいやしたモシおまへこつちらへおいてなせへし源「アイこまがようござりやすトこいつはまたいつかふなさいゆへすこし伊「コウ梅さん此男アわつちが友だちだがちつとならつて見てへといふから連れてきたはにかみ伊八からしるのくらき所へすはる梅「コウ梅さん此男ア何しやうはへだと思ひなさる梅「とふもしれやせんやした梅「よくお出なせへしたねへそりやアもうト火ばちのふちをモシマアもつとこつちへお出なせへしわつちやアもう伊八さんもしつてゐなせへすがとんだぶちやうほうもんとやらなれば源「是からおたのん申やすト手ぬぐひをひ伊「武士のつきやいはかたひねトおもしろくも梅「ヲホ、、トそらわ伊「コウ源主もつとこつちへきさつしな此男はわつちらとちがつて口きようだからてきやせうよこはいるなんざアきようさ梅「ほんにかへきよてへねトおはせ伊「コウ源主氣

をつめちやアわりいぜ梅「そふくわつちらアふざけもんだからそれじやアわりいのさモシへもつとこつちへお出なせへしなトたびいひはれて源介やう伊八か伊「梅さん此男ア何しやうはへだと思ひなさる梅「とふもしれやせんトすこしかんがへてまちなせへト源介かきものをよくかいて見てしれやしたたばことんやかへ伊「にほひをかれちやアしれるわつちらアなをだじきに木薬やと見られる梅「伊八さんおめへ清明丹はへ伊「ほんにあげるのだつけ又わすれてきやしたまだわすれた事があるト此ごろはやるにがほのゑをすつたいせもみのたばこ梅「さんこりやア此男が弟子入の何サト出梅「こりやアもうもしあなたト源介にもあモシか、さんちよつと來なやうじをあげ口にくはへたまち出で母「こりやアもうおありがたふござりますトきげんよくなりぬるひちやをわかしなをして二ツくん梅「伊八さんおとつひおめへのめへを通りやした伊「フウどこへいきなすつでくる雨一の光りこんやのあいそきついのなり梅「伊八さんおとつひおめへのめへを通りやした伊「フウどこへいきなすつた梅「百川に座敷があつてさ伊「頃日はさしきほどふでござりやす梅「留主居家の寄合がやんでからいつかふさ此うち源介はたまちりとはな梅「モシなんぞはじめやしやう伊「コウ源主をれといれかはんねへしやみせんほこりをはたいしをきひてておる梅「心づき梅「コウ源主をれといれかはんねへしやみせんほこりをはたいしをきひてておる梅「心づき梅「柳松のめでたき事萬木にすぐれ源「口のうちそもく茄子のめでたきとはんぼくにすぐれ伊「コウ源主そりやアなすじやあんめへ松だぜ源「わしやア又一富士二鷹三茄子いふからめててへは茄子かと思つてさ伊「そりやアわりいれうけんだ（梅）ふきだしそなるをこらへきを長くをしへてある折から来るは紙問屋の手代らみゆへになりさんとめ仕立よほどくめんもできるなり此げいしやも此男をできるやうで半六「は、ア稽古じやナト内へ入梅「半さんかきぬやうに折々ひちをあて、をくゆへ時々ためになりこの内をよほどしこなししたしうちあり半六「は、ア稽古じやナト内へ入梅「半さんかちつと御めんへトやはりをし半「なんのイナ御ゑんりよはいらんじや源介は人かきたゆへなをばかしく伊八もすこしとけ半「こりやなんぼ御時節がらじやとてゑらひけんやくじやなか、さん炭とりかしておくれんか母「半さんかサア炭とり半「をつとよしおやぢさんはどこへいてじや母「題目講へめへりやした半「きついで後生のねがひやうじやなそれじやもう極樂のさきへゆきすぎるじやらうが母「それだけにつみをつくるから五分さトげいしやの母だけ半「コウか、さんこれ夜食のおかずにさんせト藤に身をこがすうなぎのかばやきこ母「こりやアいた、きやすちやうどあの子もやしよくま

へさりのきせりまはしながら 半「あしやうがでゝをるが座しきでもいふてきてか 梅「けいこをあした堀のうちさんへいき
 やす 半「何をあてじやか信心をなさるもんじやな トイふうち四ツのひやうし木子ヨン〜とうち来る源介も伊八もびつく 伊「なんと
 きれいなもんだらう。 子「本町三丁目木子より仲間唐 ぐらゐぢやア、いふ代物はねへきさまなんざアかほがあたりしい
 からよくするとできるぜ〜 源「又あすのばんいつしよにあゆんでくんねへ内がもうしまらねへけりやアいゝが
 伊「そつちの番しうもやかましいナアおやかたはそふもねへナ トいそぎゆく跡に半六はすこしいちやつきたいきあ なんじややら
 もやくたいなほど夜がみじかひぞこゝが勤の身じやかへつてこまそ〜 母「もちつとはなしなすつてもよからう
 半「店でも又ふたりほどかぶつたじやそれじやさかいこちらもたいていきをつけにやならんじや 梅「半さんそれでも
 おめへ頃日は石場の豊倉へ又しこんなほるそふだね トすこしやく思入いふてうれ あほうらしいたがマアそんな事いふてじや
 せいもんじやはいノ 梅「いゝよあすのばんきゝやしやう 半「ない事いはるゝほどつらひ事はないもんじやコリアあ
 のわるたちがざうりはきちがへはせんかなワツトあるじや〜 梅母へかくすやうにしてせなかつた なんじややらいかふさむ
 いばんじや トたちかへる 是等のでやいさまで稽古するでもなけれど皆此藝者を一ツてんばりの色ちよぼいちと見ゆるなり
 又博奕の壘と女藝者はころびやうて一夜檢校の幸多し七ころび八をきとは藝者のうへの事なるべししかれども藝て
 はやると顔ではやると二いろあり是鳥に 鶯 孔雀の有がごとし娘は主君のごとくたかぶりわれあればこそと恩にき
 せて我まゝいふ不孝は象牙の撥とゝもにあたるべし親は臣下のごとく我子にうやまひかしづき三味線箱をかつき駒
 下駄をなす事皆欲の皮より出て三絃の皮よりもあつし又これらがをこりをたづぬるにかゝるいやしきものにあら
 ず漢土にては妓といふて。莫愁。陽阿翠翹。などゝいふ名妓多し和國にては白拍子とよび。島千歳。和歌前。など
 世々に名あるものかぞへ盡し難し今の女藝者此流れと謂つべし上方にては藝子舞子といひ江戸にても前には踊子
 といひたり元文のはじめに名高き。衛門。照。艶。などあり其後。辨天豊。地藏幸などときめきけり。新富。直。百
 合。税などちかごろ是につゝきたり唯人の愁を忘れしむるの器なりしかれども今はをとろえてこれらに比すべ
 き者をさかず

豊

後畢

51

申まうし

酒しゆ 氣き 貧ひん 通つう

町傾城辛苦情ちやうのけいせいしんくのじやう 年凡十

通子つうし 町ちやう 馴な 染せん 傾城けいせい 馴な 染せん 三會目

傾けい 主しゆ 不遠ふとん 千里せんり 而來にきて 亦將またまじ 有あ 以も 見み 艷えん 書しよ 乎や (床花反叫三商人他女郎之文通子在懷中)

通子つうし 妄まが 曰い 君何必きみなんかならずや 曰い 茶終ちやしん 爲な 腎虛じんきよ 而已のみ 矣や (茶言虛也)

田の中に棒の壹本立たるは甲か申か扱は申か。柳のかけから申シ／＼とよび。花道から申上ますといふもみなそれその身の業なり。人間萬事さま／＼に。世わたりする中にもためしすくなき流の身は。うそいふことの常なりといへどもそのうちにも實ありて。ほれた程忘れぬものなく。惚られたほど捨てたきものなし。こゝに去ぬころ。大岸屋といふに花衣といふ娼婦あり。彼が客に富士井田藝吉といふ艶治あり。たがひにほれつほれられつ。かのわすられぬと。すてがたきが。こうじ／＼て終に心中と極まり。二人が中は深けれども。淺草の中畷畷へ忍び來り。氷の刃ぬきはなし。すでに胸のかゞみを破らんとせしに。お双の手の内御無用とこゑかくるもの有り。はつとおもふてあたりを見れど。峰に立たせ給ふ石の地藏尊と。案山子の外。人らしきものなし。扱はわれ／＼が心のおくれかと。又刀とりなをせば。又御無用と聲かけしは。たしかに石の地ぞうそんなり。兩人はびつくりし。申地藏さま。われ／＼は心中してしぬるもの。となせども。小浪でもないに。御無用と聲をおかけなされしは。なにゆへとふしんうてば。地藏尊莞爾としてわら

ひたまひ。嗚呼やぼしや凡夫じや。そちたちがいのちは今が九段目じやないか。おれがとめたは外でもない。さだめて先の世をいそぐでもあらうか。ちと話したい事が有ルから死出のたびぢのはなしのたねに聞て置きやれ。かならず又歎の變化じやと思ふな。夫心中死は無分別な事しれてあれど今好色の世の中に。双ものざんまいこそせね。一生連そふ女房ゆゑに。腎虚して死ぬも品こそかはれ道理は一ツ。又は金がたんとはしいとて。氣をつかひ氣病して死。或は食傷して命をうしなふなどはらは金心中下卑とも謂つべしおなじくは女の道にて果る事こそ順なり。世界の人皆其穴門より生れて。又その爲に死す是花は根にかへるのだうりぢやものと。定規杓子にしたる不了箇より。二ツなき命を一女の爲に捨。心中死を自慢らしく骸を野經にさらして。じやうり繪ぞうしに長く恥をあらはし。讀うりの外よろこぶものなし。今時の心中は義にもあらず。情でもなく。唯不自由故のむり死し又うは氣なるむすこ娘は。ぶんごぶし新内ぶしを聞き。しばゐを見る度に。半七三勝が死だは尤もじや。おそめ久松が心中は道理じや。あれほどまでに戀の情をつくしたら命も捨さふなもの。われらとても捨かねはせぬと素痴なる心より心中死をうらやましがれど。しばいでする心中はあゆむところが板じやゆゑ犬の糞をふむきづかいなければ。着るもの引ずりて行に品よく一ツ對の美服。紫のほうかぶり。どうもいへねど。もし是がほんまの事なら。一ツ町行くとお手に逢はしれた事。又うしろにはじやうりといふもの有りて。拍子よく。今死ぬる身でおどりながらゆく事。いかにもおもしろさふに見ゆるなり。扱双をつらぬいた所がいたくもかゆくも何ンともなく。骸に毛氈をかけるゝとすぐさま。三階で休息し。嗚呼今の心中はきついものであつた。よふ見事に死だと切落してじや／＼のくるを聞ているなど本的心中がかふ行かふものなら。なくさみに死んで見ぬものは壹人もなし申々そんな甘口な事にあらず。ほんまに死るはきつふさへぬものなるべしいつたんのむふんべつて死ぬるは。ひつきやういのちを弄にするやうなもの。どの道無益のさいご。三世めぐわのたねをまき不忠不孝のつみいつの世にかはまぬかれんと。自笑腹にて曰ければ。兩人是を聞。是地藏どの。

57

そなたはいかうしんぢうを茶にさるゝが。そりやかたおしぢや。みやうもんに死ぬとばかり思はしやるは。無量の味ひ有る戀の情をしらぬからの事。どうりてそのやふにわるかたひ石になられた事と憤ふれば地藏尊。なるほどおれを戀しらずとの云ふん尤じや。高が此うそさびしい所に立てある安地藏じやもの。おりふし朝がへりの客がおれが頭へ。煙艸のふきがらはたくより外。戀句はさつた身の上なれど并をしてくらすたすけには。先の世の事はまた大通じや。固心中の腹といふはとて此世では添はれぬから。來世で契らふといふが山とみへる。したが外の事はみなそつちが尤もにもせよ。是ばかりはあてにはならぬぞ。今生にあるほどだにやすきいとまなき身の。むなしきのちはいふならく捺落の炎に心をこがし劍の枝に身をつながれ。修羅の陌に争闘して。こちの女房どもとよびかはす隙さへなく。ふたり〇〇〇〇〇〇るなどは思ひもよらず。もし又最期の一念により。上々の首尾にて淨土へ往生することありとも。變生男子といふて。かあいと思ふ女は。たちまち男となれば。極樂へ行てからがしまらぬ事女が男に成つたならいなもので有らふぞやとけちをつけたまへば。二人はおどろき。扱はごくらくは女が男になりますか。とてもぢごくはたのみなし。すりや來世でも添はれぬか。しからば死ても益なきことと。うちしほるれば地藏尊。ヲ、いたい思ひをせふより思ひ直して生たがまし。外に思案をしかへて見やれとねんごろに。のたまへば。兩人はやう／＼とく心し互に小袖のちりをはらひ。扱はなした刀とも命をチャンとさやにおさめ。すご／＼くるわへ立かへる。地藏尊跡うちながめ。あゝはいふて見たものゝ心中死もみなるんゑん。天命じやと獨つぶやきもとの蓮座に立給ふ二人りが延命地藏尊。利益のほどぞありがたき

申 畢

京傳予誌大尾

自跋

夫洒落ること難し。黄山谷が曰。周茂叔が人品甚高し。胸中洒落たる事。光風霽月の如しと。是等を洒落の親玉と謂べし。然れば世界の洒落悉皆洒落にあらず。於是予がしやれ本の不洒落なる事をしるといふ。

57

51

大磯風
磯俗風
仕懸文庫

目次
磯俗風
仕懸文庫
大磯風
磯俗風
仕懸文庫

51

仕懸文庫目録

第一回

大磯往來游戲船中之談

第二回

朝夷名祐成醉風流忘還

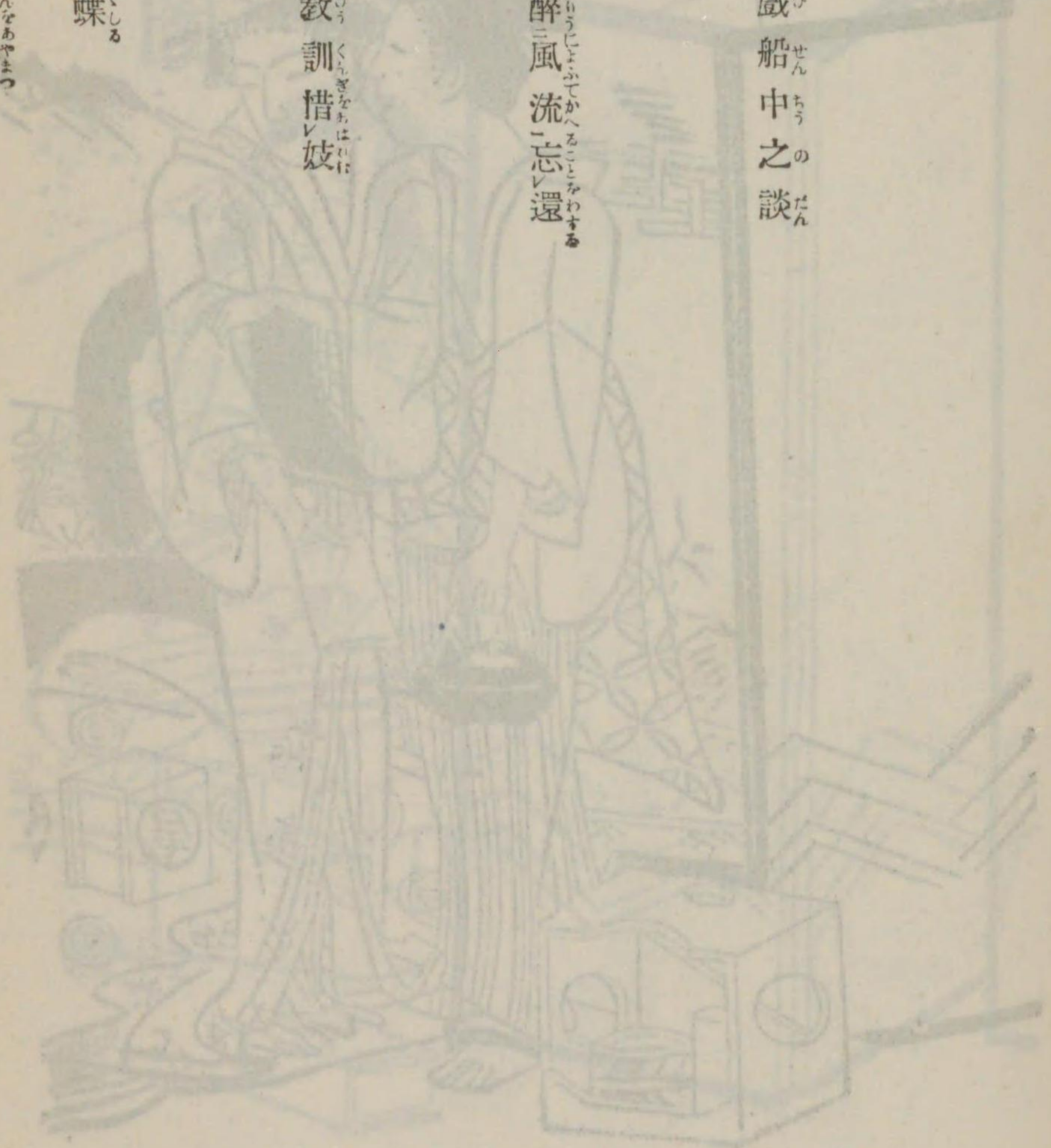
第三回

舞鶴屋傳三教訓措妓

第四回

梶原誇口罵蝶

妓爲三時致謬終身



大風船仕懸文庫

51





其二

四 園

自叙

夫頼朝公の御齋會より。大は獨大磯の賑ひなり。虎少將を初として。許多の妓女色をあらそひ。萬客爰に通ひ乍。梶原か 佞は。宵宿りの矢筈を違へ。小林が 慢は。左右の髻をかき撫。祐成が二日酔の衛足。時致が疳積は煙筒の皿を挫く。羽織工藤あれば。羽織歌妓あり。兄弟の男子等あれば。梳籠の妓女衆あり。或恍惚て近江の實情あり。八幡て首の義理づくあり。汐息の猪牙舟に頼頼公は。鳴子の音に神を飛し。一切遊びは對面の三方のごとく。扱れ。外へ出て居る妓女をば。寸間狩場の切手あり。於是友切丸とともに。魂を紛失し。赤木作とともに家を鞆ばしる。豈滿江心を痛さらんや。鬼王が忠言。却て耳に逆ふ。是鎌倉時世の妖境にして。星月夜の井の深く。戒。且惡所ぞかし。

北條時方寛政三郎
 祐安辛亥の荒次郎
 鬼王の正月和田醜
 の三日目

京傳醉中誌

51

第 一 回

東山に妓を携し漢土の驕者もいまだ綵貝舗の出番のちよつきり遊び酒肆の枝藏がへりのたのしき事を知るべからず爰に後鳥羽院の御宇文治建久の昔鎌倉の巽にあたつて一ツの女肆あり大磯と名づく爰に來りては陶朱倚頓が富も桂林の一枝のごとくこゝに居ては昭君楊妃が美も崑山の片玉にひとしく黄金の塵塚鬱氣の捨場湯氣盛の場所にして顧卷安坐の失禮も所がらとて目にたゞサツサおせの鄭聲じつに雅樂をみだし忠臣もまよひ孝子もうかれ老たるとなく若きとなく權介となく八兵衛となくやたらに行むしやうに通ひ振らるゝあれば照らさるゝあり或は討或は被り陸を行ものは稀に舟を行者多しゆく舟のいさみある風情かへる舟のおもひあるやうす猪牙舟の柏餅は苦舟のまんぢうを過り舟棧橋へつけば心とんで先へ上りおちかいうちと港板をつき出せば神あとにのこる船頭たつとまれて君のごとく客人茶にされて臣のごとく羽織といふは衣服にあらず新子とよぶはもち米にあらず昨日の娘分は今日のかみさんと變じ羽をり化して子どもとなるなんどはいまだ禮記の月令にもみず初會をもらひぬすみを賣跡をつけて待あればなをして鼻をあかする有宵どまりの客のをちつきがほ朝なをしのねむたき顔四ツあけのしつぽり晝あそびのいさみある妓の文は獨立の草書のごとくよめず蜜言は蠻夷の風調にして解す呼れて來りおくられてかへりいやがられてのぼせるあればすかれてすゝまぬもありうはきの風は鼻のさきをふき實情の雨は膝のあたりへふるさやくは千差萬別妓の臨氣應

變實に是平康の盛事なるぞかし○馬やひらの馬のりばか大小のこしらへに氣をつくれれば刀はつがもなく長くてつがふちかしら鐵のむく目つばにうでぬきの付たやつつかは鷹のへをのろびねりさやはにかはだ、き身はびぜんもの、三分ぞり、やういと思はれわきざしはぐつとみじかく竹のこがたといふやつもつとも木づかきやは四分一のどろがね入ぼく刀こじりのとき出しみは長刀こしらへの開打など、おもはれわきざしはぐつとみじかく竹のこがたとそくのおどし糸をうつたやつぶつきさきのうしろへ扇をさしてつとやたてをこしへつけ髪はをしどりといふやつもつとも小びたるあり手に花色のめりやすをかけすげのふかき笠をかぶる年は廿四五ぐらゐなり(供)は十三四の小さむらいらくもあたまたまのやらう黒きぬのひとへばをりおとなのきるやうなやつをかたてあげをし大小もはかまも不相應に大きく竹の子笠をかぶりはり弓をしやらぶかほだめの袋へ入ゆがけ袋とつか袋と雁まとを一所にゆひつけてかつきかた手にべんとうをさげる○一たい大いそ三めん堂のけいこがへりとみへるなり 五郎丸、コレ風でまをふきとられるな氣をつける 小侍、ハイ、モジさきほどのお矢はとう、見へませなんだか 五郎丸、ウ、三面堂も場所はいゝが草がおほるから悪くすると矢をしてやられるコレあすは又由比がはまでみせ馬か有がふりはせまいか小侍、どぶござりましやうかモンあの佐々木様は善おあてなされます 五郎丸、何てうしあたりだゆるみがある トすこしかア、此橋で上足を騎てみたい トつきそでにてしやつつきばり花水橋の上をゆきすぐる○折から秋のはじめつかたにてざんしよあれば川にはすゞみ舟なればしんつのはなをひらきにのる船中一人のきやくは(小林の朝ひな)としは三十ぐらゐゆうきじまのひとへものろの小るんのはをりぬいでそばにをくれはかねて大いそのつらなり今一人の客は(そがの十郎)としは廿三四もぐさじまのまぢこに白じゆばん黒ろのはをりしぶ地紙のあふぎをもつこれは青襦きやくにて大いそはまだふつらなり今一人は(團三郎)とて 十郎、コウ朝さん今花水橋のうへを通つた侍 はかのやつがつとめてゐたそがの十郎がかみなりこしらへはすいりやうあるへし 十郎、コウ朝さん今花水橋のうへを通つた侍 はかのやつがつとめてゐたやしきの次男だぜ 朝ひな、フウなんだかごうせへに武ばつたなりだのうみねへ檜垣もこうしてみると大きなもんじやアねへか 團三、此おや船には大ぶんいみことばがありやすね茶わんなどのこわれた事をはしつたといひやすわつちやア一度へツツてみやした 朝、おぢい此ころはなは、どふだののせんは、久、あんまりてりつとくからにがしほていけやせん 朝、さうだらうヲ、けふもよつぼど南がで、きたはへてへぶうねりがある 波の立事けふはいつかだのヲ十二日だのこウ一三四八ウ、ハツ八ぶたからてうど今あげるせへちうだのりにくいはずだは大磯つらの情なり 十郎、アレ鶴がうなぎをとつた 朝、ホンニ 團、ごうせへなうなぎだアレもふのんでしまつた 十、又しりから出た 船はしんつへわたるはしをくるといゝさがりがあつたナ 向の船頭、ヲイおぢさんどけへいく久、繩町だア 向の船、しづかにいきねへ 久、アノやらうもてへぶ鱸ぶりがよくなつた 又むかふから鎌倉引丁の舟たなものとみへるきやくおくられてくる女げいしや 團、こけが心學をならやア

57

しめへしむしやうに茶わんをたゞくやつサ 十「こりやアできた 朝「まんざらでねへくびだのおぢい鳥羽瀬だの 久「ア
 イついていくナア鳥羽瀬の釣屋の娘ぶんサ ト新市葉のまへへ来る龜子 屋あたりの二かいにて イタコ「おまへしゆうもちわたしはかへ天じよつか
 へてまゝならぬセへへへへへトウへへへへへ 十「こゝが大磯の新市葉といふのか 朝「そうサ 團「こゝの坂戸屋
 のうちへ京の次郎さんときた事がござりやしたい、うちだねへ 久「こゝの新みせもすだてができたばかりで 朝「今に
 こうしてあるのう 船中のたばこばんはおくりの時茶屋からかり 来てすばいに入ってきたりしなり火がきへる 久「モシ枕箱の引出しにほくちがござりやす 十「ヲツトしやうち
 中から文を引すり ト火なほ箱のふかい引出しをあくれば舟手がたとあたらしいるが二本四 文せんが十五六もんうちに仙臺通寶が一文有ほくちをさがし出してうつ 朝「引出
 田し上がきをよむ ふたもを井へ入りちや屋へしらせに行所へおくりとみて客と子供と娘ぶんつきそひあとより下女すざり 船頭「おあぶなうござります
 なんだ青砥屋にて藤綱さま夢の戸にてしげよりコウおぢい此おしげといふナアどつから出る 久「ホンニ
 その文をとどけるのだつけなにさ中うらのちゝぶ屋のかゝへサ 大いそなは丁の子どもやある所をなかうらと 十「大いその振市葉
 といふのはこゝかへだいぶ舟がついてるにぎやかださふだ 朝「よくするからにぎやかサ 十「こゝの大智屋とやらいふ
 はどれだね 朝「大ちやといふナアあれアノ下駄うりの荷のをりてあるうちがそだ 十「富倉とやははへ 朝「とみくらは
 アノ赤くぬつたとうろうの出てるうちさ 團「モシ爰のとみくらの出見せが花川にござりやすねへきよねん山のかへ
 りによつてしやれやししたモシはやりやすねへ 朝「コウおぢいアノ湯川屋のわきのちいさな稻荷りやアなんといふ 久「山
 田いなりといひやす 朝「コウ祐成さん此左りの堀が日記どのぼりといふヨ大いそつうのよくしつてる所だ トいふ折から
 まくらさや丁岸のちよきおくりのかへりをせ あともよりか 子ども「おくめどんしつかりもちなよ日傘をふきとられるよ 茶屋女「こつちの舟
 てくる船中には子どもとちや屋の女とのつてゐる 子ども「おくめどんしつかりもちなよ日傘をふきとられるよ 茶屋女「こつちの舟
 ヤあをと屋のおぢさんどけへいきなはるわつちらがほうへはきついてもんだね 久「おくりげへりか 茶屋女「アイちつと
 きなせへしな トいふむかふから又一さうのちよきやくを 子ども「ヲヤ青砥屋のおぢきんどけへいきなはるわつちらがほうへは
 きついてもんだね 久「おくりげへりか 茶屋女「アイサちつときなせへしな トいふむかふから又一さうのちよきやくを 子ども「ヲヤ
 茶屋女「ヲヤへへへよくおいでナせへしたね 客「今けへりかおくりだといつたからけへつてきたてうどいへ所て

あつたサア舟をけへしてくれ トながみにてきた所が他所へおくりにつたときむなしくかへつてこゝまで来りしなりてうどよい所であひ舟を引
 かへした 朝「こいつアいゝゝゝあゝいふ所が大いそ遊びだよしていゝちうどしまだおぢい鳥羽瀬の女郎だの 久「さうさ
 あの子なんざアみへきての板がしらさ 板がしらとはよせばの板がしらだといふ事大いその通詞也此舟はさのみいそぎも 朝「祐なりさんコ
 レ此右りが白舟いなり左がしみの四天河岸すなはちあの堂がしみの四天だこつちらの磯井といふのれんのかゝつてあ
 る藏づくりが繩町 トかかうしやくする所へ又あとより二人せんだうのちよき奉公人らしきやつをのせい のきやく何か船頭にさゝやきしがしみの四天がしへ舟をつけ一人の船頭 そぎ来る又そのあとよりおなじく二人船どうにて一そうこぎきたる跡より来りし舟
 あがり一さんにかけ行ききの舟はもはやいなり川岸あたりまで行す 十「コレ朝ひなさん今あの舟はなぜあすこへつけて船頭を上げ
 たのう 朝「よくある事だがあれは大いそあそびのきもといふ所さ鳥羽瀬の客とみへるがあのりくつは先へいつた舟の
 きやくと跡からきた舟のきやくと同じ女郎をならんで買といふやつさあとからきたやつは先のやつをみしつてゐるか
 ら船頭をおかをかせさせてさきへ口をきりにやつたのさ先のやつは跡のやつを見しらぬからうかゝいつたがなんぼ
 いそいていつてもモウ後手になるといふやつサ跡の舟はいくらおそくいつても先へ口をきつておきやアこつちのもの
 さきこへやしたか其又口をきるといふ事は大いその通言で青樓ならしまひにやるとをなじことだあとから来たやつは
 ぢよせへのねへやつサ 十「かんしんゝ其道によつてかしこしだこいらはもつともなりくつだ 團「宇治川といふもの
 だね トはなしのうちようゝ舟 朝「大ぶにぎやかだはへ ト舟のならんでついで こいつア出てるもしれねへは トいふは一たい繩丁
 なきゆへ舟の高で大いきやくのたかもしれ子 トはなしのうちようゝ舟 團「こゝにむきずな胡瓜 トはなしのうちようゝ舟 がながれ付てゐる 久「そりやア河童へやるといつてなが
 したのさ ト久はさきへ上りちや屋へしらせに行所へおくりとみて客と子供と娘ぶんつきそひあとより下女すざり 船頭「おあぶなうござります
 客「清吉もう何ん時だ船「八ツがちつとまはりやしたらう ト客も子ども舟へのる娘ぶんものりてうしの口をみよしの方へむける 久「しらせ
 りモシへていなさいやすヨ 朝「いまゝしいさうだらうさうだらうサア祐なりさん上ねへ 十「マア團三 ト客も子ども舟へのる娘ぶんものりてうしの口をみよしの方へむける 久「しらせ さきへあが
 らつし 團「そんならおさきへてやしやう 十「ヲ、コレゝゝこいつア大さわざだア、きみがわりいコレ早くとつてくれ襟

畫を書し扇をとつて 朝「しよじおいねてなけりやアわからねへといふもんだ いね」又あんなだんごをおつせへすついでぞねむねのあたりを仰く

久「おきさんはどうした いね」いな村ヶ崎の鯛門屋へめへりやした 朝「出ばんか いね」いへお店のしじやアござりやせん トいふ所へ子ども出かゝりしやうじのやぶれからのぞひ いね「もしどなたもお出なせへし ト二人座敷へ出るおとらはまだとしゆかぬ座のしやべつなきゆへさきへ出るをいやりいつてもとのゆかぬものがさきへたゝせられる世きをつけて見玉へ(お虎)十七ばかり紫船のひとへものふた葉あふひのあづまもやうのふりそでもん所は五三のきりのすがぬひ下にひの板じめのかさねせんさいち寺ちやどんすのをびかみはふくらびんのかた天神つかうのつくり物をさす繩丁だけに人がらよし(おだん)二十ばかりひねつてたんごちりめんをやまとがきのひとへものもん所きやうこれはとめひちりめんがはいつたとみへてどれもりつばなり(おきだまり)のさかづきすみおとらは祐なりおだんは團三ときまる(女三)久「おめへがたちつとこつちへよみせん箱もち来る(おた)し大いそにて三みせんはこのもんを小口へ付る事はよせばにはやくみわかるためなり 久「おめへがたちつとこつちへよんなせへ 朝「おぢいこのとなりのかうしづくりの内はなんだ 久「アリヤ男げいしやの寄場さ トいふ所へ鬼丈 鬼丈「一座のづらりと一 コレは朝さんようこん日は 通次「ゑびすの宮のまくてござります ゑびすのみやむ 朝「さうだつけかノ 通「團三さんよきななはへしたの 團「モシ此ごろは本藏といふまくはどうでござりやす 通次おりのこむさう 通「そりよをいつてくんなさんな 朝「おきやアがれ 稻吉「鬼丈さんおめへの髪は夏どんかといふ 繩丁の手やいみな此 鬼「ほれたか稻「フウやるせがねへ朝さん此間鶴ヶ岡の山の今本でおうはさを申しました 朝「稻むらヶ崎の白軒が所へ此ごろにい はくけん 此間にいろ／＼おもむきありいな吉ちよつとしたものを一ツきばちをうしろのおびへさす(折からきやく二人あがりとなり座敷へはいる一人は(近江屋小藤太)四十四五ぐらゐさんとめじまのひとへものきぬのをし小もんひとへはをりつむぎじまのおびよき酒みせのかひ出しとみへるふう一人は(八幡屋三郎兵衛)廿七八つよきうな男くりむめのもめんひとへもの花色(内ぶとりのおび花もうせん)のまへだれをたゝんでかたにかけ釘木を髪へさすまくらゆきあひ川の酒店五軒店あたりのわかひしゆとみへるふうこれはけふふたがらがへりなり(三郎兵衛)はざしきのとの間(いけけん)さいにしりをまくつてこしをかけてゐる(小藤太)はたつてゐる ひき ついでねへわるじやれをしなせへすな 三郎「やかましいは ひき けふは藏だしかへ小藤太さんどこで三郎さんとおちやひなすつたへ 小藤「翁そばから一ツしよにきた大ぶにぎやかだの ひき こともに五ツ座敷サけふはだれをよびなはる 三郎「ちよぶ屋のおしげをきいてみてくりや 小藤「げいしやをだれぞひき太夫しかはをりしかへ 三郎「ろく／＼とこころがしながら はをりサ おなじくならおみんがい ひき あれはい がマ ア板をみてきやしやう小藤太さんのもだれぞうつくしい所をみつくるつてきやしやう此ごろはこんななにぎやかな日

と又ぐつとひまな日があるからうつかりと買こみもならずこんだと手こづりやす かひこみといふはむんしやう 三郎「おふにかゝつてゐるあ なだ 此額の繪はゑぼしをかぶつて舟にのつてるのきんり様の舟まんぢうださうだ ひき すきなことをいゝなへエますと行 娘ぶん さかづき 三郎「けふはわづかの歌で大きに手間をとつたうはつきのあるやつはみんなたして香つきのやつはなをしやへやつた うはつきとは酒のへつた事か ちつともいやくつは鯛町かすじけへか来たたら門前にたかふとおもひやす もんぜんとはたゝきはなしにうるといふことた ときこう爰の内へ北條のおやかたがくるじやアねへか八重「わたしどもへはお出なせへせん 三郎「そんなら化粧坂へばかりいくだらう 小藤「コウ三ぶ公舟の来たにしちやアでへぶたけへのう 三郎「したじのかはいた所だからやすくはうりやすめへなんぞだしなすつたか だしなすつたかとはかつた 小藤「雁新の手めへをちつとばかり 三郎「どうたしなすつた 小藤「手にいれ 判の分さ トゆびを 三郎「かつこうもんだ八重「モシお一ツおあがんさいまし 三郎「一ツうけてのみ こいつアあんまりあめへ 目かへだらう たき があらはちつとわつてくんねへしたが三河へ水をかめちやアあやまる 三河ものへ水をわるとけんびしとのめるゆへにかくい 小藤「そんなことをいつたつてつうじるものか ひき 三郎「モシへ三ぶさん夢の戸からお京さんがあいて来たがおめへの氣がしれねへからつとつといてきやししたどうしやうね 三郎「イヤ／＼あいつをよんじやアあとがむつかしい ひき そんならへんげへてこにやアならねへ ト又ゆく(おつ)つてをくとはきゝにくるうちを外へ出ぬやうにちよつとまたせて △こなたの座しきには(おとら(おだん)きかへてのひとへもの(だん)は一ツべん水へはいつたといふちごのあいさびこれは床着と道中着と両方へ用るいしやう 通次「イヨはやごしらへきついなり二人ともかけ香のひもをむねの所で十文字にとりはななみ入をみすがみにてまき帯のまへへたてにはさむ 通次「イヨはやごしらへきついの／＼ はやごしらへ だん「ついでねへ 女「モシどなたもちとあちらへ 鬼丈「なるほどチトぶんまはしのどうぐがはりといふ所がよからう トみな(たつ)所へあとをつけておきし(おつ)もあいて 鬼、通、いな吉、さやうなら御きげんよう 朝「十／＼くらくらく ちやうか 鬼「青砥屋の久公つりがたまつたらちつと海へつき合ウぜへ 久「此ごろはそんなげんきはなしさ通「うそをつくぜ ある四六みせなり(お又男)げいしやとはこがまはるとじきにかれどもはをりはむかひのかゝるまで下にまつてゐるなり(お大い)そのならひと

第三回

戀と情の中裏とて大いそ通にしられしはうら屋住みの小路にして妓家軒をつらねつゝ棟をならべて櫛の齒を挽くに
 ひとしき人出入片ときたへぬ駒下踏の音は寄場にかしましき夫が中にも鶴といふ字を鏤したる竹籬かけたるは舞鶴屋
 傳三といふ妓家なり 内には(居候)惣どうこをみかいてあるそばにはとやに付てる(子供)とみへしちりんで中ふくをせ 長谷觀六(来)おやかた
 んじてあるこちらには(子)ちよく(金魚鉢)の水をかきてある折からまくら朝いな切通シの判人 是御やどか 居候アイおられますすてい主傳三通俗すい二傳をよみかきてひ 三イ觀六さん御出 觀ときにい奉公人がありや
 すからきやした突出したがとをりはよし身のしねへなさアごうせいにい女だへとは風俗の事皆此道の詞なり 傳此節ほうこ
 う人もほしいがわりい足でもついちやアいねへかノ 觀何サ根をよくたゞして來やしたいさくさのねへのさホンニ此
 ごろひとりとなすつたじやアねへかおや判かへよび出し判はだれを入なすつた 傳二人り取たがきねへひとり
 は四五日つかふとゐんばらむしをやみだすひとりは髪どやてひつこんでゐるはな つきだしの子どもはみんばらむしといふをよ
 みとやと云はとやにかかり てかみのけのぬける事なり やむものなりふのりをせんじてのませるなりか そして其奉公人はどのくらいのものだ 觀五年で金五まいぐらるといふあたりサマアあしたあ
 たりみなせへ 傳あしたは勘定日だ 觀おしい奉公人だから早くとらせてへ 傳仕切あけにせず親判をとをすだら
 うの 觀ばんばやの忠太がほうこう人だがなんなら親からそへ證文をとつてあけやしやう相だんができたらかけをば
 ちつと付てくんせへ 手つけ金のことをむなく 傳それともよくあらつてみてくんねへ 觀きづけへしなせへすなあらひかたはぢよ
 てくんせへ 手つけ金のことをむなく 傳それともよくあらつてみてくんねへ 觀きづけへしなせへすなあらひかたはぢよ
 せへはねへわたしただからふみ玉なんざアつかやアしやせんはな ト觀六はかへる○ふみ玉とはあとでいさくさのあるほうこう二人の事なり
 折ふしかへの子供(おてう)二かいよりてうづに下る 傳おてうちよつときや トおくのせうじをたて ほかのこともねへが手まへがアノ曾我の五郎とやらいふ客をよぶ事はとう
 にきいてゐるからせいてよけりやア五軒の茶屋へことはつてあはせぬ事もしつてゐるが外の子どもにやアきかされね
 へこと長家一ばんあきねへをよくしてくれした手まへだから今まで大目に見てめたが此ごろはさしをついたり○○○

○と茶屋のひやうばんもわるくユ黒木の客もきれたげなのきけばその時宗とやらいふきやくも内をかぶつてゐるさ
 うだがハテすへんコウアトおもふ心があらばもふ一年もしんぼうしてをれにちつといきをさしてくれろおれも男
 ださうすれア半年や一年のねんきはくれてもやるさうして手めへが地めへになり其男とひとつになつてかせぎやア又
 おれもせわをしてかへへのひとりもするやうにしてやる手まへもしつてのをりおれも長屋で相應に口もきく玉をあ
 づかつて土地とて世話もしてゐれば内の子供が萬一のことでもありやア長屋中へおれが顔がたねへナきこへた
 かがつてんがいつたか トふく清もどきのおだんぎ まはしおてうさんつるがをかやから口がかゝりました

第四回

女ひで「まへだれで手 をふきながら 朝比奈さんモウおかへりなりますかへ 朝此ごろにきやしやう みなく「さやうならどなたも御き
 げんよう 十「ちつと風が 團「でやしたね 朝「おぢいにつきれやうかの 久「氣づけへはござりやせん (朝)十(團)はしごを
 持てきてみせる祐なりわざしをみわけてさすおくからばんづけを講た札の(つるがをかかハ)ポフウン(これよりやぶんのていはじまり)
 ついてるはきものを持ってなをす娘ぶんだ女など川岸までおくつてゆく(まんの入あひ)さやうに御らんだ下されましやう)
 折から曾我の五郎時 女「ヲヤ五郎さん 女「サアおあがんなせへましな 五郎「おもてのくぶりから いゝかきいてみてくんねへ
 女「わつちらが内にてゝいなせへすヨ 五「そんならあとをつけておいてくだせへ表の島山屋に友だちがきてゐるから
 其うち付やつて來やう 女「モシマアそれじやアおてうさんのめへゝわるふござりやす 五「いゝやうにいつておいて下
 せへじきにいつてくらア トいへども女どもしやうちせすむりにひきずりあげる(五)は二かいへあがりたつた今朝い
 なヤ祐なりがかへつてまだ出しものや三みせん箱のとりちらしてあるさしきへはいる 五「そんなら今のうち八
 もんじやの湯へはいつてあせをながしてこよう 女「そこををかたづけ よしなせへナそんな事をいつて又おもてへいきな
 はるだらう性わるをしなはるとおてうさんにいつつけやすよ 五「はかねてまひづるやのかへおてうとふるき中にてこゝの内へもた
 ざとげんきにてゐるとほどなく「おてうは 女がしらせしゆへざしきを 心まちをしてゐたになぜおそかつた 五「しよけへかてうさ

うさもらつてもいゝがもふ今にむけへだからはをりしてもよんでみてくんねへとけへもいきなさんなよコウおふさど
 んはゞかりだかのたばこ紙をおぼあにさういつてとりよせてくんねへごしやうだにヨト又ゆく長く他のぎしきにいらぬが
 すべて大いその法なりまたよせばに
 おぼあといふありて子 △其となりざしきにはきやくはかへつた おきつソレヨわたいがてへこに出てしかもそのぼん雪よしで一座
 供のせはやくなり △がまだむかひのかゝらぬ子ともとみへ
 アしたアな おたぬヲ、それ〳〵ホンニあの扇ヶ谷の末廣屋にしんぞうおろしが有さうだがおめへどうする祝儀をや
 らざアなるめへナル升一てよかるうかのしやれにいふのなり 二分狂言ではおそれるのう きつわたいらア此ごろは大ひ
 つ天でさしものもみんなやつてしまつたしきだころされてもねへ たぬうさアねへホンニおいらアもうあしたアさは
 り用事をつけて引こもうこれじやアでられねへ きはりをふかくみる きつなるほど奉公人こんじやうとはよくいつたもん
 だよわたいらもかゝへていた時にやアむしやうに引こんだがぢめへになつたら一日もよけへ出てへ たぬよくげはみ
 ぢんもねへの トわらふ所へ おき何へこむ氣がちがつたさうだツウ〳〵うれしい心いだ ト何からうかすてせり
 ふをいひくきたる おきつさ
 んちよつとうしろをむいて見せなおめへの髪はとんだすいたかつかふだよたれがゆふおりたさんか きつ何わたいら
 が内へはおつよさんがきやすはな おきおつよさんはたしか表へもいひにいくのう鳥羽瀬のおよめさんもよくゆふよ
 きつほんにかへ たぬモシへおむじさんはおきやくがきたかねへ おき何サぬすみに出てゐなはらアな トいふうちに手
 いゝ引 トいひながら立て行〇ぬすみとはしまつてある たぬ此ごろ隣へ大瀧からでいしにきてゐる子はとんだ大キなかほをす
 るによどこぞしやアへこむだらう きつウ、ヨわたいらアまだ一座アしねへが長家中でさういわアなそれでもよくう
 るさうだよだがまはすのう たぬ大兵衛さんがまはさアなホンニそりやアさうとあしたア雪の下へ文をださうにヨ
 きつ一しよに狀づかひにもたしてやらうはな ト一人は下へ行〇町では文づかひとい
 ふを此とちではじやうつかひト云 △こなたのざしきには(おてう)そがの五郎一がきてゐ
 れば何かそは〳〵心おちつかずたび〳〵らうかへ出又敵屋 名は 梶原源太 つかまへ コウどけへいくのだ てうちよつと手水にいつて
 めへりやす 梶 なんだこいつアとんだしびんじやアねへかさきつからたび〳〵出るがわりやアせつちんへとうもろこ

しのくひかけてもわすれて来たのか てうおめへさうあじにおもつてくんなはるこたアごぜへせんさつき二三度出た
 ナアあの 梶 やかましいわへ トおき上り大あぐら〇三四ほんあらつたあ川しまのかしゆかたのつらみじかいやつをうでまくりして竹口か
 これへわりやアおりやうば初午の晩の狸をみるやうに氣ばつかりあしにさせやアかるがひつてんな客とみてあしくす
 るのか但しかまくら沖でとれた通り者を喰つた事がなくつておそれをなすのかしらねへが近江の湖水へ目だかをはな
 したやうにあつけにとられるきむすこや夕顔の暑氣あたりといふいろの青い出番のやつらをととりあつかふとはあてが
 ちがふぞ鯛門屋の芋のにへたもしらねへでいゝかとおもつて宵から菅次が内のたばこぼんより高いつらをしやアがる
 が大かた内じやア出しツこをしてこしらへたきらずに鯉の汗の中へ一ト袋三文のとうがらしをふりかけて小びんから
 汗をかいてくらうだらうてう、モシへまあしづかにしておくんなせへやしわつちがわるかアあやまりやしやうあんまり
 でごぜへすけしからねへ 梶 なんだけしからねへけしからねへけしからねへけしからねへ アアとうがらしやわさびはナかぶをうつて裏店へ
 引ツこむはこれわれやアまあ何屋から出る奉公人だたゞし名まへ出居衆て亭主をすぐすのかウ、きこへたアさつきか
 らたび〳〵廊下へ出るがなんだな客が来からこつちのあくのをまたせてをくのか經師屋の達摩か宗十郎が似顔じやア
 ねへが横目でにらんでもやるもんじやアねへは是から一ばん胸わるでおれがけへきりこんくらべだマアさうおもつ
 てむかふの野郎にも往生させ身上へ繩を付て引ずつてきてからまつてゐるといえかういつちやアほんのこつたがお袋
 のまたぐらからぎやつといつて鎌倉風のひより下駄をはいてからさかわ川の猪牙船で鶴ヶ岡の八まんさまへ宮参りを
 して稻村ヶさきのざるそばといつて屋のうなぎでそだちたまごの四角を枕にして女郎の實をふとんにしき晦日の月の
 屏風をたて十二奴の場所から七奴五分の場所かけて隅からすみへ寝げへりをうち正月の初勘定から買はしめ一年中の
 客帳はそれが表徳でよごさせ大いそ一とをりの夢はみつくして脊にやア舟梁の魂がいつてる梶原さまだこの出居衆
 勘定は一ツうつていくらツ子子供がかふ床屋のそんりやうはどのくらいな床でいくらするといふことも茶屋のさん

追加

前に許多の小冊出て此大磯の地に於みて妓客の情至り盡せり雖然コンコ、リキコ、マカリキの時代にしてはや十年の物換星移よくいふもんの上ミ下モもいつしか着ふるしてわづかに吸物椀の袋とはなる古今人情かはらされど風のうつり俗のかはるは息の強ひ吹矢のこくとく昨夜の鬢さしの翌に翻かごとく流行のはやきは都て烟花のならばせなり故に今再び此地を穿鑿して十二錢目の筆のはつみに三錢目の胸のうははをくはへ合て以て一部の書となす猶予か穿のいたらざる所は此地の博子のくはしきを待而已

跋

河豚羹を不食愚鹵あり。くふ癡呆あり。くはぬ愚昧は美味を不知。くふ素痴は有毒をしらず毒あるをしらずして。くらふ人は論に不足。美味をしらずして。くはざる人は一概にして危し。不佞京傳。嘗好色淫蕩を著述すといへども。實は前に美味あることを述て。後に毒あることを示し。戒を垂がため也。不如美味を知り毒をしつて。恐慎には。河豚はくひたし命は惜しとは。豈此境を悟したる。君子の言といはんや。孔夫子衛國の煮賣家を過りて曰ことあり。吾未徳を好者。吹肚魚を好が如くする者を見ずと。嗟夫ホンニ。傾國傾城ものは。此鐵炮汗の勢ひにあらずして。何ぞやみづから後にしるす

京

傳

通言總籙

571

通言總錄叙

彦國佳言を吐こと。鋸木屑の如く霏々として絶ず。粵に京傳青樓の通言を酸瘠に呑こんで。頓に茶表紙の一冊を吐。是鐵拐が仙術にあらず放下師の小刀にあらず。閱之象牒中に顯れ聽之言文面にとどまる。闇に引出す牛臺の驛。延り。中街に驛る駒下踏の音耳にちかし。實にも離といへば。朝顔の泣腫したる清楊に昨夜の疳積を残し。二十七明の長を慷慨ては花の蕪を愁す。逢夜の短を恨望ては機久しき花を羨。且々の笑顔晩々の泣顔も。色無垢の衣領にさし入たる容に。鼓子花の閃屍も壺盧の色白なるも纏ひ咲。總離は善花街に通じて然も花實相對し眞に腸を斷。我かの籬の下に店三絃の一子を打て。番新の萬を知るに至ずといへども。二と三の緒を筆。猿人卿と共に京傳を愛の一曲を唱て。糸巻をチトひねることと爾

文きやう自書

58

自序

我嘗いへること有。青樓は家爲の雪隠なりと。夫如何なれば。持たが病の腹痛に腦金尿をひらんが爲。尻をぼつ立て。此處に通ふこと繁故也。若貧客我尿を喰ば。糞黄金の糞娘とならん。一十日の長尿に退屈の餘り。此妄作書をなしてかた尿の堅をして。びり尿のずるきに和らげ。世に其尿の撒様を傳ふ。通客といふとも我勝を覗ずして。何ぞ尻の穴の廣ことをしらん。吁尿が惘にあらずや。于時天明七年丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ

京ばしの傳述

通言總籙凡例

- 此書ハ論語ニ所謂。損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總籙ト題セルハ。流行ニ後タル古句ノ。難无ヲ以テ也
- 艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春江戸生艶氣棒燒ト云。册子ヲ著シテヨリ。己恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ。
- 此書ニ假テ名トス。氣之介。志菴共ニ彼册子ニ出ル所ノ名也
- 妹妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記ガ故ニ。詔ヲ不レ改。假名違ヲ正ザルハ。其音ノ詔ヲ知シメンガ爲ナリ

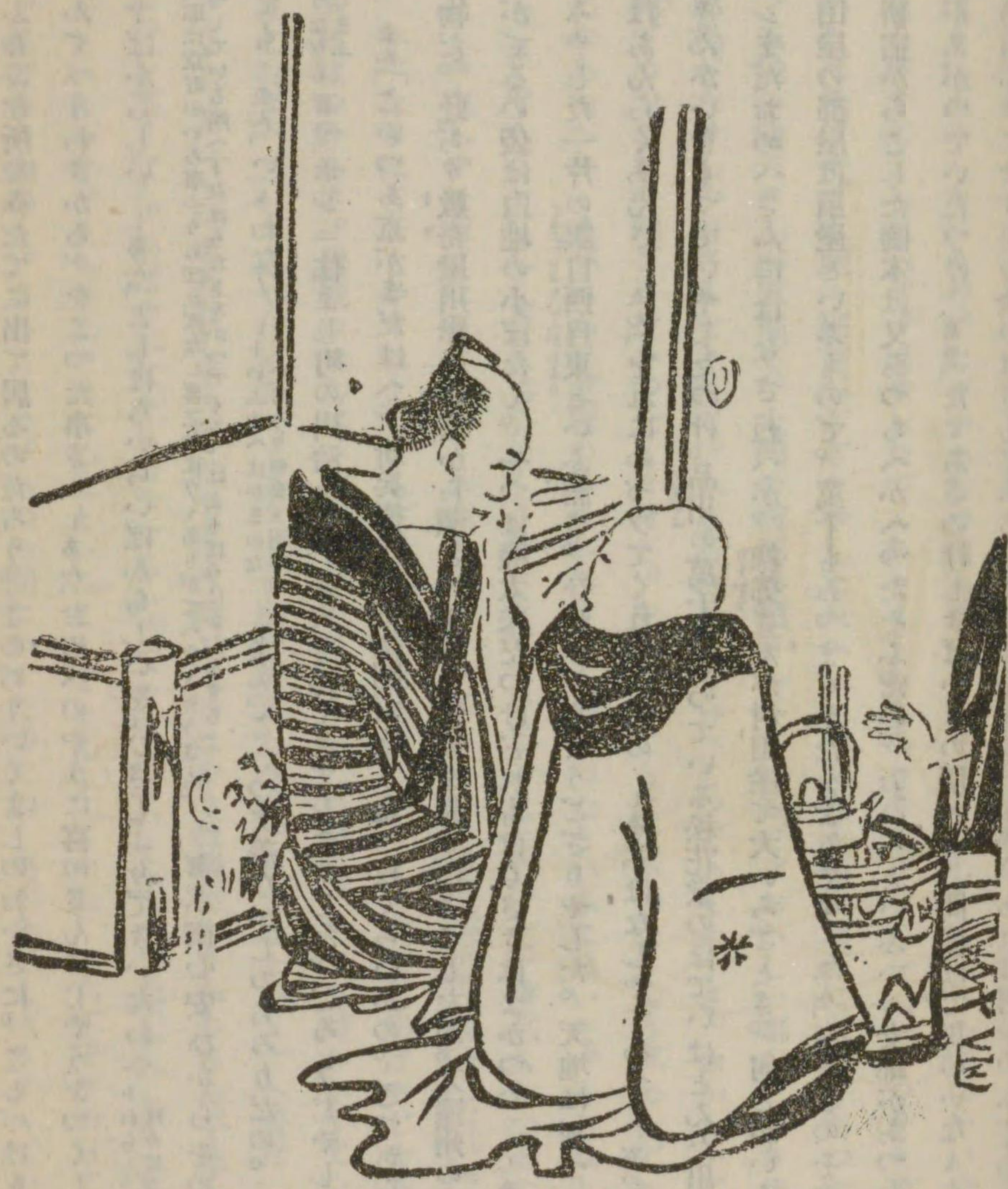
通言總籙

山東京傳戲作

其一

金の魚虎をにらんで。水道の水を。産湯に浴て。御蔭元に生れ出ては。拜搗の米を喰て。乳母日傘にて長。金の細螺はじきに。陸奥山も卑とし吉原本田の鬚筆の間に。安房上總も近しとす。隅水の鮎も中落を喰す本町の角屋敷をなげて大門を打は。人の心の花にぞありける。江戸ツ子の根生骨。萬事に渡る日本ばしの眞中から。ふりさけみれば神風や。伊勢町の新道に奉公人口入所といふ。簡板のすぢむこふ。いつでも黒格子に。らんのはち植の出してあるは。芝蘭の友を旦那と稱ず。江戸がみの。北里喜之介が住居。鮑魚のいちくらに同じ門口。くだすだれの外に。仇氣屋のひとりむすこ。えん次郎「黄の無地八丈に。けんぼらにてとめがたの小紋をおいた上着。三ツついに島かんとうの下着。こんちりめんのらせはひろき仕立。あはせばをりくろの無地八丈。まへ下りながき仕立。五丁ひも、あやまるとかいつて黒のひらうちちのちよんがけ。帯はおなん戸茶どんすの小もよう。づきんをありまきにして。中の町ぞらり。八わたぐろのくつたび。花がいらぎのわきさし。かみはよし原ほんだ。すは町のおやじがぬいたひたの。二日めおしやうさきへはいらつせへ。えん次郎かたへ出いわるあしあん「くろちりめんの小袖。おなんど茶な、このはをり。酒さびにてはなのさのさかきき。おしやうさきへはいらつせへ。えん次郎かたへ出いわるあしあん「くろちりめんの小袖。おなんど茶な、このはをり。酒さびにてはなのさの喜のぼうお宿か。えんさんがきさしたつたよ。トうちへはいりみれば。あがりはなに女ばらうのさしづをうけながら。あをちやのはげた布子に。もんがしうへで。ちん小女「こうしているもんだよちつとしていやアレごろうじまし。いつせうれしがります女房「つやなしうへにゆをあげせている。みた小そで。くろな、このはどのひろいはんそりこびちやな、この帯。わきのほうへまわし。まへだれのかわりに。さらさのふろしきをおびへはきみ。かみはいなぎむすび。おはぐろをおとしてしらは。これはばんに。おはぐろをつげやうといふしたじなり。まだ左衛門といふ字のつかぬか、あ。此女房もとは松ばやのさるおいらんのせわしんぞうなりしがねんあけの、ち。かねて久しいろきやくにて。喜之助が女ほそのまんま二かいの日あたりへつらになりしなりかみの毛のうすい所と。み、のわきのまくらだこにて。あらそはれず。まだ里の言葉がきます。

58
1



山東けり手画回

そうだから。そふおふな所をみたてに出て居るのだらう。このぢういくよしのおいさに。ことづけをして。よこしたつけ おちせ「ゼンてへうわきから。をこつた事さ。 しあん「おめへのやうに喜のさんにじやうをつくした人も。あるにノウ おちせ「ヲヤばからしい。 しあん「よしはいらいばからしいを。ひさしぶりてきたわへトわらふ。女房はごいたの茶た。此うちえん次郎は京町のいろ事のうぬぼればなし喜之助はウ、ありがてへウ、そうさと。 喜の「御心安ひからそのまんまだしやい。えんげんにあいさつしている所へ下女はうなぎをかつてくる。にようばうはかんをする。 おちせ「ヲヤそれでも えん「いゝわな。トいふゆへはかまのな。 しあん「こいつア着ながしのちろりだの。しやれたもんだ此あいださけになりうなぎも 喜の「ホンニ住よし町の川治から。茶入を持ってきておきやした。ごろうじやしト戸棚から茶入を二ツあらかたたいらげてしまふ。 喜の「こいつあ京がまだはへ。新兵衛か萬右衛門だらう金一枚くらいかの。こつちらはいつかふなもかりあんばいをみて。 えん「こいつあ京がまだはへ。新兵衛か萬右衛門だらう金一枚くらいかの。こつちらはいつかふなものだとんだねき物だ。此ぢう數奇屋川岸の伏甚から瀬との玉川と瀧波を見せによこしたが。尤遠州の書付があつたが。四十兩だいだ目がてるの袋は白地の小ぼたん。一つは權太夫だつけどれもはくさきはよかつた。 しあん「此間橋場で江月のよこ一行をみやした一片の雲自西自東といふ語さ。ひやうくもようござりやした。天地はやつぱりふとじけだか。風帯一文字はあんらくあんさ。 えん「をれにゆづつてくれめへかの。 しあん「はなしやすめへよ 喜の「角町の惣六がかうらいの御所丸きんかいをもつていやしたつけ。品川の萬千がもつている松花堂のほていはとんだ出來のいゝものサ。萬千といへばモシまだおめへさんにはなさねへが。柳郊さんが村田屋で大いのごとさ。何とかいふ女郎でござりやした。此頃は村田屋の部屋は扇屋といふもので。萬千もおつまもうたをよみやす。 えん「あそこのその歌といふ女郎をおれがかつたよ新宿からこした橋本は又あつちへかへつたそふだの。おいろといふいゝ女郎があつたつけ。妙國寺の仁王にてうちんがあがつていたつけ。 喜の「たゞあさのけしきばかりの所だよ。間屋ばて馬のいなゝくには。あやまるて。 えん「大木戸の石がきにせきだの金のはさんであるのは。なんだの。 しあん「あれは何レのかぐわんをかけるのさ。 えん「おいらはあの土地におひては不通だよ。ちつとたびもしてみやうす。とうじにいつたとき賀達か所へ。いつたま

まだ 喜の「御ぞんじなくつてな所さ。 しあん「しかしいてきだもきみありだよ。昔原ならつてとげの文をやる。といふ所へ。臺の物をおくりやす。 喜の「いやもふ臺の物がきちややおゝさわざさ。こわがるものはお鷹匠の御留いやがるものは五ツかばりに正めんをはるの。にぎやかなのはゑびすこうさ。みこしをこしらへてにかい中をかづく内もあり。めしたき男をゑびすにこしらへて。はやしたてゝありくうちもありやす。ゼンてへしろうと芝居のはやる所さ。おちせ「モシまへかたは松ばやでも度々狂言がござりやしたねへ。 しあん「丸ゑびやなぞにもよくあつたよ。 おちせ「ぼくがさんが工藤で。玉屋の山三さんが五郎で。大門の四郎兵衛さんがすけ成で。おかしい事がござりやしたつけ喜の「狂言といへば宗十郎松が六けんのおさくをきれて。ふる石のとよくらへこつていくそうさ。おかしいじやあねへかネエ。 えん「あいつが申洲でめつちかちの地ごくをかつたときほど。をかしいことはなかつた。 おちせ「モシでへぶきなつくさいよ。さんやそこじやあねへか。 えん「ほんに芝居のゆきがらうそくへふつたといふにほいた。それおしやうぬしのはをりだそふだ。 しあん「さあくこいつア大さはぎだかゝあにしかれることを仕だした。 喜の「もちつとの事でもろせをたのみにいく所だ。 しあん「しやれ所では手エはな。 えん「やけぼこりていゝのさ。此間女房の手りやうりにて。たまごのあつやきにわさい。えん次郎しあん。 えん「なるほどおしやうはよくくふぞ。ぬす人には極つた。 しあん「もし松ばやじやあ小梅の青いのを出すノウ。 喜の「あれはつけめさ。扇屋のせんべいの。丁字やのてうあしのぜん。四ツ目屋のかすていら。竹屋の水貝しづか玉屋のゑましむぎ。こいらはつけめさ。 しあん「丁子屋じやあねへが。はてなといへ所だ。 喜の「はやり言葉もあぢなものだ。ちよつといゝだすとむしやうにはやるよ。此ごろのはやりは扇屋のきかふさん。丁子やがはてな。ぶしやれまいぞ。おたのしみざんす。松ばやがじやあおつせんか。玉やのおにのくび。大文字やのしらア人もよくいふよ。さまといふ事をせといゝやす。ゑちぜんやはしんにといふことをたんといふね。 えん「丁子やの目てんさんと。きれいでざんすよと。松ばやの山寺と。さかことは。いつの間にかすたつたの。 喜の「今でもぼうくといふものは。しつ

たかさ しあん おちさんおめへはよくしつてるだろう。大かなやの正月の仕着はなんだつけの おちせ たしか地が黒で色入の花たてわき。角のつたやが鷹のもやうさ。わかなやが若松にかすみ。中あふみやが花ごうしてござりやす。鶴屋はぼたんのすそもやうの時もあり。ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はぼたんさ。松がねやがさくら川さ。松ばやのくじやくしぼりと。大まびのほうわうがよくまぢがひやしたつけ えん あふぎやの十二ひとへ丁子屋の若松にがくはよく人がしつてる おちせ 瀬川さんのつき出しの時。いつでもかかれて八ツはしにかきつばたのもやうでござりやす大文字屋のつき出しはいつても。とかくさかなのもやうさ えん 正月元日に禮にでるのは。大びしやばかりだの おちせ さやうさ 喜の「つき出しの時へやもちばかり。うちへのころはどふしたわけだしらん おちせ あれはさわかりやせんよ松ばやはぜんでへかてへ内てござりやす。女郎衆にうはぞうりをはかせやせん今でもはくものは。瀬川さん。松人さん。部屋もちでふたりばかりござりやしやう。そしてれい日にはみんなぞうりさ。くしかふがいの中座迄ぞうげまきゑでござりやす。さんやてへふいぶるによ。ちつとさしくべればい しあん 丁子屋もかてへ内だよ。きやくのまへはうはぞうりを手にもつてとふるの。きやくのこねへ女郎はつるしがとぼると中の町へださねへね。二かいに小便所の二ところ有と。はしごを庭からあがるやうに付てあるは。丁子やばかりだ 喜の「まるゑびやにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど遠ひのはあるめへ。さむいじぶんなぞはてへぎだよ。半七がかつばを着てとこをまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてへうちさ。そしてはやく見せをひかせる内だよ松ばややあね女郎の事をわつちらんといふね扇屋じやあざしきてとい えん やす丁子ややあね女郎のそのあね女郎の事をおほいきいおいらんとい えん やす えん 玉屋といへば紫夕むらさきが えん 小むらさき しん 将基しやうきはあがつたかの 喜の「こんぢう我物がぶつが香角かきかくのませで。二ばんまけたそうさ えん 琴基書畫きんきしやうをやるきだの。けいせいにもいろ／＼なくせがあるものだ。きさかたが。水かゞみのめりやすがすき。瀬川が茶のゆ。歌ぎくが地ぐちのてんとり。すがはらが梅をたち。わかづるがはいかい。ひなづるが團十郎びいき。松人がどふしたのだへ。丁山がちよつとみな。たき川が三つ七費の紋所をかへず。九重がかふるの外に男の子をかへておくことなどは。今でのがちだ しあん こんぢう今戸の墨賀すみががりやうへめへりやしたら。いづゝ屋のせつべい。くわれき松屋のぎよみんいづみやのこゑん。いの字いせ屋のせいら。長崎屋のこはん。おはりやせつ久。かんぼくといふいしや。そうしやうのとりのう。などがきていて。梅枝うめえだのばいしはすはいかいをしていやした。いなぎも源氏の書入にこつていやすよ。地内のおたみがしんでちからおとしさ。ぼくがもつりに斗りかゝつていやす えん けふは廿六日だのあさつては三河じまのふどうへいこうぜへ。喜のぼう 喜の「めへりやしやう えん あとげつのふどうほどけいせいのでた事はおほへねへ。ノウ喜のぼう。まづきさかたが。たはらやのよしのにしき戸の若づるがでるし七こしがでるし七里がでるし扇屋のうたかたがでる 喜の「岩越もでやした。からこともたしかみかけやした。げいしやもてへぶ見かけやした。あさをに駒次。おりせ えん ひやうごやのおくにもきたつけ。なるほどげいしやははんじやうだ。けんばんにそばがたへぬはづだ えん ざしきへならでるとけんば しあん もし羅月らげつがいもうとはいつ梅と。やうじやのおいくを。そうじめへにしたといふかほだねへ。あれでうすいもがねへとい えん 娘さ えん 何い えん ものかうすいも所か。ひめじかわの紋がらといふつらだ。ときにちよつとよつて大ばなしになつた。ちよふどい えん じぶんだの。もふ晝みせのおみきどつくりもひけたらう。喜のぼうあいばつせへ。こんやは一町目のつもりだノウおしやう しあん おぢさん心づかいだよ おちせ だいじのものだがおかし申しやしやふ えん トはいへども。此ごろよしはらからきた文を。ちらとみ喜の「おともをいたしやしやう。おちせきものをだしてくりや えん 喜の「一町目ときいてあいた口へもちなり。女ばうはつうゆへいろめにもださず。立て戸のへりをとつた下着。ひぢりめんのじゆばん。くろ上田のはおり。これは えん 次郎にもつたのゆ 喜の「ちよつとびんをなでつけてくりやへ。女ばうのつうにておはむきにきせてやる。喜之助は着てしまひ。かみ入をふところへ入 えん 喜の「ちよつとびんをなでつけてくりや女ばうはさしている。二分ほどするつげのくしでな しあん 歌むすばれし。千すぢをわけてみだれがみ手にとり／＼のもの思ひでつけ。松ばかんざしで。びんの所をまきこむ

58

喜のおきやあがれ おちせ サアよふごさりやす。あれせわしない えん ここのうちの戸だなは。丁山がつぎの間といふもんだの喜之介はゆかうびやうぶにかつてゐる。若松屋のわか 喜の「サアお出なさりやしてかつかつてへいづる おちせ「ヲヤしあんさんやけあなが目にたちやせんは。モシづきんはよししかへ 喜の「こふともし四蝶さんの所から人がきたら。たつの口へでもいつたといつておきやそれもしこれもしトそこらを見廻しな 何かわすれたやうだはへト少しかヲ、それ／＼ふくい町の豊國が所から人がきたら。わすれずに此ぢうのやしきのを二分やるのだよ トだんはしごの小引だし かこいつもはかなくなつたす トはいて出る。神が跡について出そうにする小女はだ しあん「これゆびぬきがをちてるよ えん「ちかめがとんだ物をみつへ出したおちさんいつてきやす おちせ「さやうならごきげんよふ。ヲツトおつむりがあぶねへ 喜の「サアおさきへ

此間柳ばしより大さんばし迄船中のしやれよしはらやうじのふさならであまり長々しければこゝにもらす

其 二

けふ此頃はいたこやかるい澤ではやる時分きうへ田ぞろいにゆかたを下夕こひ茶ぎやの袖くち。もへぎさなだのうら付でとんだあやまるなり西のくぼのがぜんぼう谷や。本所のわりげすいあたりで見かけるてあい。くら宿ていやがられるなま通ども二三人。兩方へわかれて土手のはしを通りながら。ひとりのにほんざしくわへぎせるをほたいて 里風「アレ／＼みさつせへ田中のほうから。三まいの早かごがくるが。いまじぶんなせあねへに。いそがせるだらうの 花「ほんに何者だろこのいつはげせねへはへトいふうち。早かごは土手のきはまでき 友次郎「あれみさつせへ。かつぎもどすぜへ／＼きこへた。あれはたしかかごをかき習ふのだ 里「なるほどそふいへば。中にへんなやつがのつて居る花「なんになつてもならひのいることだの。これ公が所に孔方は少／＼なしか。小ぎくを一帖かいてへ。をれはすこぶるすこぶる秋風だて 友「青樓のきやくが。そんなげびなものを持ものか。きんならいつくらもある。けいせいのお

るがみを。かすりごうしとさつせへな 花「それでもかみがねへと。何かふところがいねへやうだ 里「コレかみをゆふなら。こゝのかみいどごがい／＼ぜ。こつちらのかみいどこは。へただぜ 友「此高札場はよくてきたノウ。八十兩かゝつたといふことだ。どふいふもんだらうの 花「こゝとくじのもんじやあねへか トしやれながら来る。跡よりわろいしあんきたり喜んがく扇にて夕日をよけながら。きれいごとにてゆう／＼と来る。なまつうどもは。跡をふりかへり／＼見て。えん坂ををり。中ゆびとくすりゆびで。ひたいをくるとなで／＼みて。はなをちんとかみ。うはまへのあり先を一つひつぱり行ずぐる。○川竹の流れはたへずしてしかも元のきやくにあらず。さとにうかるゝむだ人は。かつきれかつなじみて。久しく来る事なしといへども。つき出しからなじみて年えんのあくる迄くるきやくもまたすくなくならず。何がどふだかわからねどたゞ人のきをつりあくる大よせ小よせのくるはの名とりが。すらりとおならびなされて。よい中の町の夕景色。左りの竹村に比して。右側の七けん軒をならぶ。はでな遊びを駿河屋がまへ。此時まじめなるらんとしやれながら。門口より しあん「此間はおせはでござへした えん次郎「おしやう。むかふの兵庫やに居るのが。丁子屋のつき出した。よつぽど瀬川といふばがあるによ 喜の「かほるとは先名がうつくしい トいながら。三人あがる下 下女「これはおそろいなすつてよふ御出なさりました。 えん「主人はどこモシゑんさんがお出なさりましたよ むむきのことぞ。黒七子の帯。かみは京ぐる 女房「よふお出なされました。 えん「主人はどこだ 女房「たゞいまおざしきへ。まいりました。ホンニ江戸てうから度々お入でござりました。よほどお久しぶりてござりますね えん「久しぶりもてへそふだ しあん「吉原じやあ四五日こねへと久しぶりのよふだそふさ 女房「モシゑんさん。京町に何かおせかいが。おできなすつたそふでござりますね。あんまりおうわきをなされますな。それでお久しぶりだと申すのさ ト三人がこしの物をとつて ねへきのさん えん「いんにやよそれにもわけのある事。どふでしまいはろくな事には。なるめへと思つて。こつちへはさたなしにした 女房「それはよふござりますが。もし江戸丁へでもしれましては ト少しまじ 喜の「そのおせけへもすんだ事だそうだ。もふこゝ切りの事さ 女房「さやうなら。よふござりますけども ト立て神だのよこ手かたなかけへわきさしをかけしよくだ えん「いのじいせやの二かいにうしろをむいてゐるのはだれだ 女房「扇

屋の扇のさんで御ざります 喜の「ぶたいはなれたものさ しあん」つたやのさんしう。鶴屋の在原。此春のつき出しは
 どれもあたりだ。丁子屋の名山を此中向島で見かけやしたが。七越といふきみがござりやす 喜の「丁子やといへば。
 みさ山もとんだうつくしくなつた 女房「松ばやのをはやく見たうござります。此内吸物すざりふたど ちつとおすいなされ
 まし しあん「サアはじめなさへ 女房「さやうなら 喜の「酒になる。とどろん次郎へ又盃まはる。女房へさし祝儀 喜の「むかふ通るは藤
 兵衛じやねへか しあん「藤兵衛々々々が三人通る 喜の「おきやあがれ 喜の「コレコレ藤兵衛々々々しあん「てたがねへ藤
 兵衛々々々 喜の「藤兵衛ます藤兵衛はまの紅葉哉 喜の「これちつとだまらねへか 藤兵衛はいのじいせやのまへ 藤兵衛「こ
 れはどなたかとぞんじました。ごきげんよふござりますか 喜の「どこぞへ行のか 喜の「ひなづるさんのおざしきへ参り
 ます 喜の「ざしきでなくばはなそうと思つてさ 喜の「それは残念でござります松藏。藤二。三味子や。我物がまいつてを
 りますから。ぬけにくうござります。今晚はやはり一町目てござりますかモシきのさまとらけんはどふでござります
 喜の「又まかさうと思つて。いそぐならいつてきねへ 喜の「さやうなら御めんなされまし 喜の「何かせわしく又かけて二丁目へはいる
 り歌菊出 喜の「おしやうむかふからくるのはだれだと思ふ しあん「竹屋の歌衣さ 喜の「こいつはきつひ。それでは近眼
 とは思はれねへわへ しあん「顔も提燈の紋所もわからねへが。禿がみみのわきへ黒い糸をさげているのは歌衣と。大文
 字やのはた巻斗さ 喜の「あじな所にめきがあるの 喜の「お二人ながら竹屋の千兩箱で。ござります しあん「歌菊
 が地口はどふだの 女房「もふ一ツあがりませんか。ゑんさんお茶づけわへ 喜の「腹中まんくさ 喜の「いぢつて見て しあん「も
 ちつとあつくしてくんなさへ 喜の「はりの吸物出るふたとつてみて 喜の「イヤアかもせんば。葉付大根。ありがてへわへ しあん「料
 るもんだよ 喜の「云所へ淵川が 喜の「めなみ「若へお藤さんに。おいらんておつせへす。あのけさのふみをとどけておくんなんした
 かとのれんをひつ 女房「ム、そふ申てくりや。けさ程三保藏にもたせて遣しました。おるすだと申て御返事は参りませ
 んと。申てくりや 喜の「おつせへす。三保藏御返事はこなんだのう 喜の「三保藏「まいりません 喜の「めなみ「そんならあの。そ

ふ申ししやう 女房「ちつとあそんでいかねへか 喜の「しかられんすよ 喜の「コレあの子や 女房「めなみあなた
 なんとかおつしやるよ 喜の「めなみ「なんでおざりいすへ 喜の「おいらんととふちさんによくいつてくりや 喜の「アイそ
 ふ申ししやう 女房「とんだ利口な子でござります。三保藏や其送り物は。玉やのたが袖さんのおざしきへ行の
 だよ。そしてみつさんは七ツにかへらつしやるそうだから。かごやがきたら三てふだよ 喜の「つちこつちするうちゑん次郎が
 来る肩如「羽肌如「白雪「腰如「練素「齒如「含貝「燭然「一笑「陽城「迷下「其ふぜい。田丁のかたばみや久兵衛がぬつた。からいと
 うちかけ白じゆすのへりとりむく。かみは手がらわけ。かみのうへは小間物屋の見せの如く。禿のかみ一人は。はりうち。一人はやつこし
 くかみゆひの長二がてぎはをみせ。ふり袖しんぞう。川波せはしんぞう玉夕。つきそひきたるばんしん玉夕。 喜の「おふじさんどふ
 おいらんのゑもんをなをし。打かけの下たるをなをしゑんさきへこしをかける。おす川「つこりとわらひ 喜の「おふじさんどふ
 ばかり 女房「さあおいらんお上りなされまし 喜の「おす川「こゝがよふすよ 玉夕「ゑんさんよくお出なんしたね 喜の「いつ
 もうるはしいおかほつきね しあん「何かむしやうにきれへてござりやす 玉夕「なぶつておくんなんすなおがみんすにへ
 引「ふうち松田屋わかい者清二。てうちんをけし。おたのみ申ますと出て行。玉夕は茶地のろきんの長づから。きせるを出 喜の「いの字いせ
 し。たばこをつけておいらんにわたす。又つけてゑん次郎みなくへやるおす川禿のみへ口をつけて。何かいっつけてやる 喜の「いの字いせ
 屋にときやうさんがいさつしやるからおれがいふとつて。よくお出なんしたといつてきや 喜の「下から犬がのびをして出る 喜の「川波「ヲ
 ヤアわつちといへば。びつくりしいしたよ 女房「此お盃はわたくしがおあづかり申しやう。お雪やすぐにつれ申しや
 ゑん「五町と萬里と。おしづ八百吉をよびにやつてくだせへ 女房「かしこまりました 喜の「下女てうちんをともし先へ出る。 女房「さ
 やうならおいらん 喜の「おやかましうござりいした 女房「どなたも御きげんようのはちよつと松田屋のみせ先へより 喜の「井
 川さん夏里さん。何なすつた。何かしんになつてかきなざるね 喜の「井川「てへぶ道がちかふおすね 喜の「こんやはゑんさ
 んのつきやいさ 喜の「云所へ。お廻り二三 地廻り「ナンだあかいべゝに青いべゝに白ひべゝをきてこゝの見せはなんの事はね
 へ。げくわの薬箱といふもんだ 喜の「はき行過る 夏里「エ、すかねへぞよウ引 喜の「後程お目に懸りやせう 喜の「松田屋へはいる。
 そばを行。うちどん／＼とにぎやかにてとまのまへにおいらんたちのてうちんならべてありながゑはかべにおい
 かけてならべ。廻しかたはたき火にあたり大がまのうへ十二のとうみやうはけんびし。山十五とびやうの山をてらす 喜の「茶や女「源兵衛どん／＼
 トいながら。みな／＼のはきものをそろへ上るそう 喜の「伊平治「源兵衛。お客人だぞよ。ゑんさんよくおいでなんしたとくちん／＼いふ
 花の札のはつてある下の。帳ばに。番頭伊平治い

もふよいきつてねてしまひ、したいつそすかねへちかめぼうづて。おすよ。すかねへぞよウ引 川渡「おやばからしい。何もたべるものがおつせんよウ引 夏いろ」となかへ梅づけをとりやればようしたねへ。これ／＼その子はだれだ此土びんへ茶を一ツもつてきてくりや。いゝ子だぞよウ引トいゝながら。はしのかはりにした。松ばのかんざしを。あんどろへつゝさして。き。ねまきを帯へはさみ。おいらんのかしからが。へたしまひ。火を入れて来りそこらをかたづけける。 玉夕「もふいつてねや。また長火鉢へあたつてべん／＼と起て居めへよ長火鉢は。おき。といふは。へたしまひ。火を入れて来りそこらをかたづけける。 玉夕「もふいつてねや。また長火鉢へあたつてべん／＼と起て居めへよ。玉夕「何んでおすへ 島うら「あのね／＼。これ／＼がさつき見せへ参りしてね。あさつてこやうと申ししたよ。ぬしにもよく言てくれと申て。おしやべりをだしきつて参りしたぬしにもとんだうらみがある言のはのと言て参りしたよろこんでおくんなんし 玉夕「わつちといへばかたつきし主のきなんすのを待切てをりいさサナア。此の中の文を届てくんなんしたとおつせへしたかへ丈さんもあんまりすかねへふにんじやうだよ 島浦「はらをおたちなんすな。ぬしがつれ申てさいすとさ。あさつてはしまつていろとつて。参りした 玉夕「ぬしといへばうれしがりきつてゐるの 島浦「それでもうれしうおさな 玉夕「それはそふと川渡さん。さつき山崎の人に。ひな形をやつておくんなんしたか 川渡「もつてまいりしたよ 玉夕「けふは廿六日だね。うれしうおす。あしたはかみあらひ日でおすよト云所へしんぞういつてふ。しいつてふ。玉夕「を。おさへな。ながらきたる。いいつてふ。玉夕「を。おさへな。ながらきたる。いいつてふ。玉夕「を。おさへな。ながらきたる。いいつてふ。 玉夕「わつちやうでおすから。なんぞくすりをおくんなんし。いつそもふしやくがいたくつてなりんせんトかほをし。か。めていふ。 島津「わつちらん所にきわ丸がおすから。まあさしきへお出なんし玉夕「ぬしのきやく人は。おかへんなんしたじやあねへかへいつてふ「松さんはかへりしたが太兵衛どんがをくりにしてやろふから。でろとつて。夏花さんと民の戸さんと。いちざておすよ 玉夕「ム、はつか いつてふ「あいさ。ざとうの坊主で。さけをよくのみひすよ。さつしておくんなんし。わつちといへばなせこねへに。びやう身になりいたらうねへ 島浦「おいじんさんに。見ておもらひなんしたかへいつてふ「やつぱりしやくだとおつせへしたよ。それでもあんまり引込と腰元にするとおつせへすから。けふもむりに

みせへてへした。玉夕「しま浦さんこの次の間へしのびをおこめなんせんか 島うら「よしししょうよトはなすうち時はう。つり。八ツもすぎ。て倉まはりのひやうし木かつちノと打ツて廻れば。皆々いつくへかなくなつてしまひ。小便所のきわには。かけばんと盃だのおくり物のから山のごとく。水だいのかめつんとしてうしろをむき。江戸丁二丁目相生屋御ぜんめんるい所と書た。そばのせいらう。れんじにさみしく。二てふつとみごばん人形のさは。ぎもいつしかしづまり。おくざしきにてことね。さへわたる。きくじこうは。なつんどかつま音ト。今迄しやれたるざしきもたまりの天神。いびきのおと。はかいるのなきご系にまざれ。火の用心のかなほち。あんまのこまもしづまり。くさる木もけいせいもねて。ばけものとはと。ぎすとねこばかりおきてゐる。ころ。夜はしん／＼とふけわたる折よしとしんぞうがあいづにけいせいのうしろ姿。きたり喜之介がびやうぶの内へはいる此所の妙意作者しばらくあづかるなり。此本をみる人。たいてい細すいさつあれかし。わかざしきは死ね死なふといふ中とみへ廻しびやうぶのたいこらぼうもよだれを流すばかりのおつ言。ほつちく 女郎「それおみなんしふとの外へおちなんすな。マアこつちらをお向なんし／＼ 答「あやまつたら。ふしようながら向てやろう。むかせられるは恩ならず向てやるのを恩にしてだ 女郎「男心のにくいのも嬉ほどのやぼとなりいしたのさ。サア 誤すから。お向なんし。さみしうおさアナ。ぬしにきし申しす事がおすにへ。ゆふべどけへお出なんした。京町かへ 答「フウおつな事をいふの。京町のねこがあげや町へ通つたうわさは聞たが。おれが京町へいつたさはまだきかなんだ 女郎「よしておくんなんし。とめ川さんが中の町で見かけた。おつせへした。サア本とうにおつせへし／＼おいゝなんせん。くすぐりいすにへ 答「これさよさねへか。ぶちのめすぞよ 女郎「そりやあうそておすが。ほんに主ア。わつちをよんでおくんなんすきかへ 答「此頃はでへぶ。ぐちになつたぜ 女郎「それでも若。ぬしのとつさんやかゝさんが。ふしようちな時は。どふしんしやうねへ。それを思ふと。死たふおすよ 答「それよりまだ先が丸二年三月といふ物だから。其中にはそつちに。とんだ事ができるだらう 女郎「よくつもつておみなんし。五年このかたはつちがみのためにもわるし。ぬしのためにもわるいと。たび／＼あきらめて見ても。思ひ切れんせんものを。ほんにあく縁でおつしやうよ。ぬしもそふ思つておくんなんし。あれさまたねなんす。はなへ小よりを入れんすにへ 答「これさあやまつたよ。こんやはむしやうにねむい。たばこを吸付てくりや。てめへおれが事ばかりそんなにいふがをれが顔のたゝねへやうな事をするなよ。こんなろい句を出すやうになつちやあ。たまらねへ女郎「まだ其やうにおうたがひなんすなら。此うへゝゆびの二本や三本は。いといゝせん 答「てめへに指を切てもらつ

たとて黒焼にして。むしぐすりにはなるめへし。しほをつけてやいてもくはれねへ 女郎「そんならどふすればよふす
 じれつたふすにへ 客「何かあじに多きもねへ事をいゝ出した。少しはらがきたはへ。さつきそこにあつたのはなんだ
 女郎「仕切場でおすよ仕切場とは客 客「そいつはあやまる。れいの小梅のかりゝするので。ちやづりにしやう 女郎「こ
 れゝ。太兵衛どんゝ。これさごしやうになるからの茶づけせんを一せんこさへてきて。くだせへかかるせかいに引かへ
 やく 女郎「あれさおよしなんしやくがいとふすよ。さわつてもおくんなんすな。けがれんすぬしやあわりいしやれだ
 よ 客「そんならどふしても。あの客をきれる事は。ならねへな 女郎「それがきにいらねへて。主がお出なんせんでも。
 きれる事はなりいせん。わつちやしやうじきぬしのすいりよのとふり。あの客人にほれていんすはな 客「てへぶて
 めへは白ラばけに。ごふてきをいふな。それじやあもふふりやうけんがならねへはへ 女郎「りやうけんとは。兩方の
 手にけんをもたせる事かへ。あぶなふおす。およしなんし 客「何んだこいつア。いゝかと思やあがつておれがこふい
 ふ句を出ス日になつちやあ。かくごうしろ。まづてへ一チこの枕の紋所も氣にくわねへ。此きものゝ裾もよりのあた
 りもはくじよう仕てしまへ 女郎「これさそねへに足げにしなんすな。大事の色男の紋でおさアナ 客「こふすりやアど
 ふするこれへ。しやうぶ刀の身をみるよふに。白いこばかりぬつてつら斗うつくしくつても。いきしにのねへ女郎は
 きれへだ此女郎は此くらいなやつ。こいつは此位なやつと。てへげへ女郎のねうちをしてつきやつてやれば。いゝか
 と思つて。をかへあがつた河童をみるよふにぐにやゝする女郎はこつちから。おさらばだはへ 女郎「サアゝそれ
 をきこふばつかりでおすそんな氣に入らぬ女郎なら。はやくおさらばをして。おかへんなんし 客「けへらうがけへるめ
 へが。うつちやつておきやあがれ。おれがいちやあそねへにこはいか。どふりてぶるゝふるへるな。これへ中の町
 の何屋のうちにやあ。せつちんが何軒あつて。何やの裏にやあはきだめがいくつあると。四ツ手にわかざりのかゝつて
 いる時分から。きつねのまいこむ時分まで三ツぶとんの上におしづまつていりやあ。どけへいつても色男一疋の役は

してくる男だあ手めへの顔顔をふむには手間隙は入らねへ跡でかまるめへぞよ 女郎「ぬしやあ紙屑拾かへよく閑所やは
 きだめを知てお出なんす男一疋といゝなんすからにはたゞし犬の生がはりかへヲヤきみの悪いじゆずかけとやらなべか
 ぶりとやらじやおつせんかへもふいゝなんす事がなかア。ゆるりつとお休なんしトいゝながらまくらとはななみをもち出て行。
 ねるにぬねられず。あんどりのむだ書をよんでまぢゝしていろうち。セツのひやうし木もなりて時うつり。田中の方の寺々にてはじやんゝのほんしや
 う。思はれるのもあきらめぬのもつまるころはみな遊びのよう。えん次郎はよいより。京丁のわけにておす川とおふくぜつそれもおす川しやうとくえん
 次郎をすかぬゆへ。いさゝかな事を手にしてねるつものり。みなきやうけんにて。うちのまへの松かざりをみるやうにうしろ合せの白川よふね夜はさくら
 かけてれんじのすきまからさしこむあかりに。長持のほりきらめくかわたれどき。下ではどつしゝと米をつくとねすの男はあんどろをひきにくり
 つて 茶や男「えんさんおむかいに参りました えん「フウア、もふその時分かの 茶や男「おつしやつたよりは少シおそ
 いくらいでござります えん「喜のやしあんはどふした 茶や男「喜のさんはたゞ今。おしたくをなすつてお出なされます
 ト云所へしあんがいかたの夏いろざしきへ置たはをりをとりにくる。跡よりしあんをきて えん「さあすぐにかへろう 夏色「羽織のゑりが
 くる。喜之介もみすのかみにてかほをふきながらきてくる。なつはまもあとよりきたる えん「さあすぐにかへろう 夏色「羽織のゑりが
 おれんせん。お待なんし しあん「おいらんはてへぶおつかれの トいへどもおす川はたわいなし。みなゝろるかへ出る。ねずは二かい
 なるべ 喜の「此紙屑をもやして置とおぎやアゝといふやつができやす しあん「こふ紙屑をはき集た所は。羊のへどゝ
 いふもんだ えん「いゝゝトはしごををりる。板はなに文がならべてあり。はしごの下に茶男、おまへさんの。此二重ばな緒で。ご
 ざりますかね 夏色「此間にお出なんしへくゞりをがらゝと えん「おほきにおそくなつた。かごはいつているか 茶男「い
 れて置ました しあん「とんだわるい心持。二日ゑひになりやした玉やにてはもふ大戸をあけ。かうしをきれいにあらいて。りやうり
 ばん「此いかはあをりじやあねへか 香賣「なに真いかさ。かな川だアみなさへ。此あつていことを。あをりやすめるめいか
 だと。安ひはな りやうりばん「だれかれんつに。したがいゝ 客「何さとんだ事をいゝなさらア。此ちくせうめしつゝ。
 此あぢやアどふだへ。いゝいほだアみなさへ。なまむぎだア。はねだてもこふいふ丈長はねへはな トいふをよそにきく。
 へまで えん「こしの物を出してくりや 茶男「マアちつとおよりなされまし 喜の「すぐがようござへしやう えん「そふさ
 来る 茶男「さやうならとげえんをふき。のうれんをかける。竹刺のまへには名札をはがした。跡のあるせいろうつんである。かしのきやく八ツを打

て上るてやい。ふしみ町のかたより二人づれにかへる一人はきり鬼勝「コウ鐵へまでへ。いつ所にゑゝべゝ。ゆふべわが女かきてないやのよこての小便所むかふのはめへ小べんでの、字をかきながら

ふにやアナ。きいてくんなさへ。鐵さんといふものはわからねへものでござへやす。こんぢうさよじさんに一本ンかりてたて引キをしてあげてやつたに。今夜もしらんかほをしていやすあんまりおしがつゑゝ。八ツを打てあがるきやくはみんなあのくらいなもんだ。なんのかのといやアがつたからな。おれがナイ、かげんに戸尻を合せておいたぜ。あいつアとうもろこしを。よこぐわへにしやうといふ。つらだナアふしみ町がしは八ツにみせを引ゆへ八ツを打てあがるとす一本にてすむこれこみつなきやくのする事也 鐵「ほんにそふいつたかとんだきまぐれじゃあねへか。こんぢうは二朱銀をほうり出して酒肴付てあすんできたア。あいつがいふなア五年ほど跡のこつたあ。こん中もナ。きらずにあみをいれていつたやつで。ほぞを七八へつけやあがつた。あすこのやてへぼねは。を、かたあいつがくらくらいつぶしてしまうだらう。あのずうてへをみやなまとい持にすればいいぞ。エ、くさびをそぎたくなつたト云はせつゝるん 鬼勝「なんでも晩にやあ虎やへあがるべゝざへ。こいつアおもひつきだつてな」 エ、引ト行過る。大門の口番人の火をたいてあつてゐるすりによりかゝつて。こぶまきのにこゝり 新造「おつなてらし」 ヲヤ喜のさんどふなんしたへ 喜「お久しいの何今時分までうか／＼している客があるものか。いゝかげんにしてけへりねへ。とんだねむそうなめだ。みつのへさんによくいつてくんねへ 新造「おさらばへえん次郎しあん喜之介三人は。江戸 茶男「かづさやア、 かがアイこゝでござりやす」 ト白玉のた下のあた えん「なぜこつからのせねへ 茶男「高札ができてから。大門のきはへかごがなりませんむかふより泉の娘下女 えん「お夕さんでへぶお早いお出の」 ゆふ「ヲヤえんさんどふ被成ましたけさは山谷のしやうぼうじのびしやもん様へ参りました えん「こゑんさんによくいつてくんなさへ」 ゆふ「さやうならおしづかに かが「サアめしまし 茶男「おはき物はついたかさやうなら此間に えん「よくいつてくりや かが「こつちらのだんなお羽をもちつとおいれ被成まし かが「ぼうぐみよしかどつことなトかご三てふと ○をくられて行てうちんとわかれ路にきくかねとはかたげてみればつりあはぬ大じんきやくにこいとらうおくるけいせい道心者ものも

らひお同し朝あさ咄はなし。口よりけむの出る頃。立や今戸のかはらけむ。すはる四ツ手に三人は。にほん堤を一ツさんに。いそがせてこそ三重引へ行空の

夜半の茶漬

58
1

58
1.



お茶の半夜

序

誰ぞや此夜中に扃たる門を擲くは。行暮たる修行者か。たゞしけんどん蕎麥の門違か。同氣もとむる鶏唐の兩子一卷を懐にして來り。予に校合をせよといふ。三人寄て文珠にあらぬ。ふたり一坐へきりかけし。紋日を逃る智惠ぶくろ。はたくといふは本屋の禁句。きんく萬部の書をつむとも。女郎をころす秘密の傳は此一冊にとどめたり。客と女郎の腹によくはいりし如き茶話なれば。夜半の茶漬と題號して。世に行ふといふことを。廻し行燈へ樂書すことしかり

天明八戊申春

山 東 京 傳 述

○かけ合の序

●けいこう 唐州

●けいせい。かはゆがられて。うんのつき▲いはんや。まことあるに。をいてをや●しかりといへども。まことがなくば。おもしろくも。なんともなし▲あるもかなり●なきもかなり▲あると思へばあり。なきとおもへばなし●こゝにおいて。あそびの。たることをしれと●▲此一冊のはじめにしるす

夜半の茶漬

山 東 京 傳 著

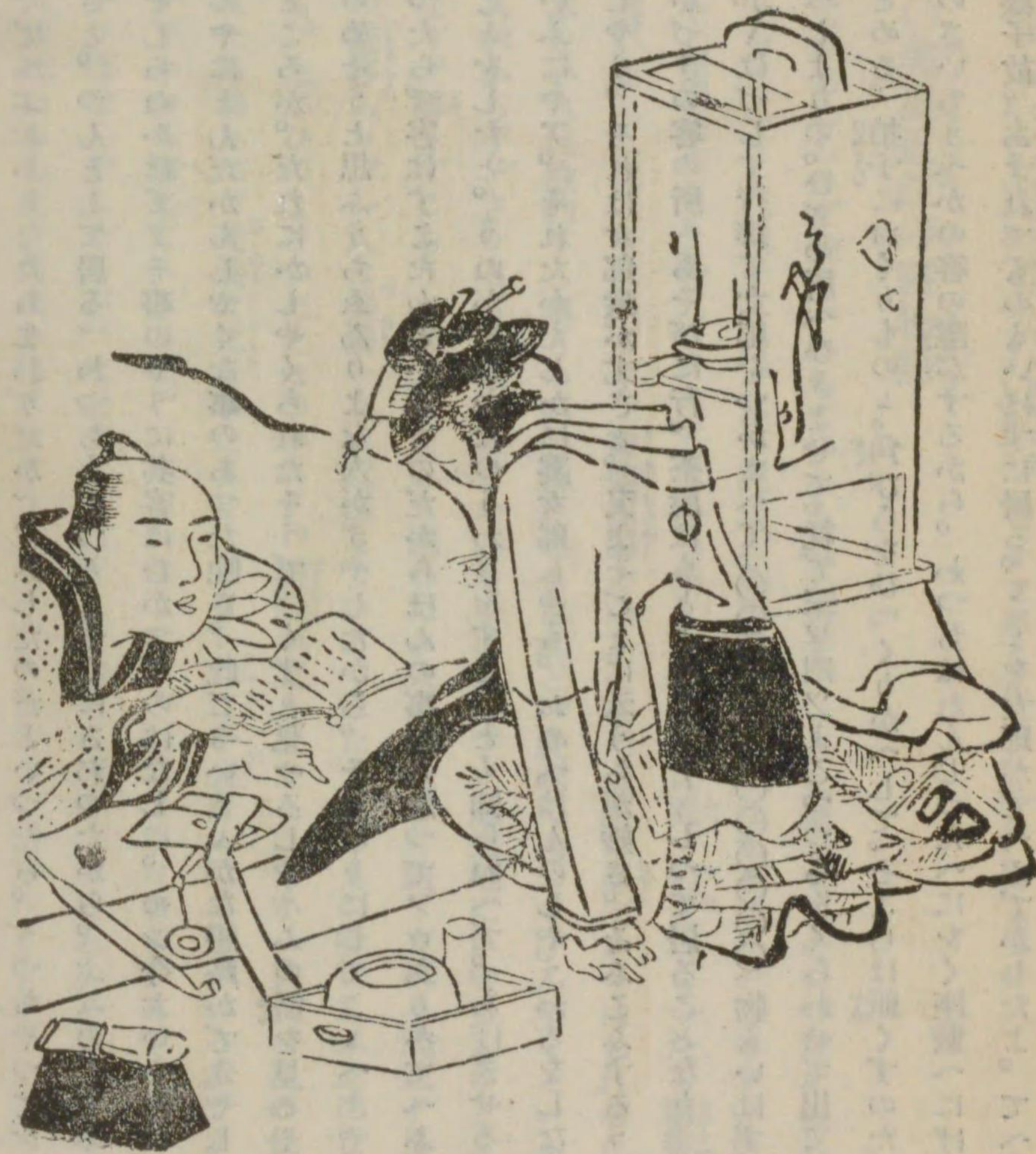
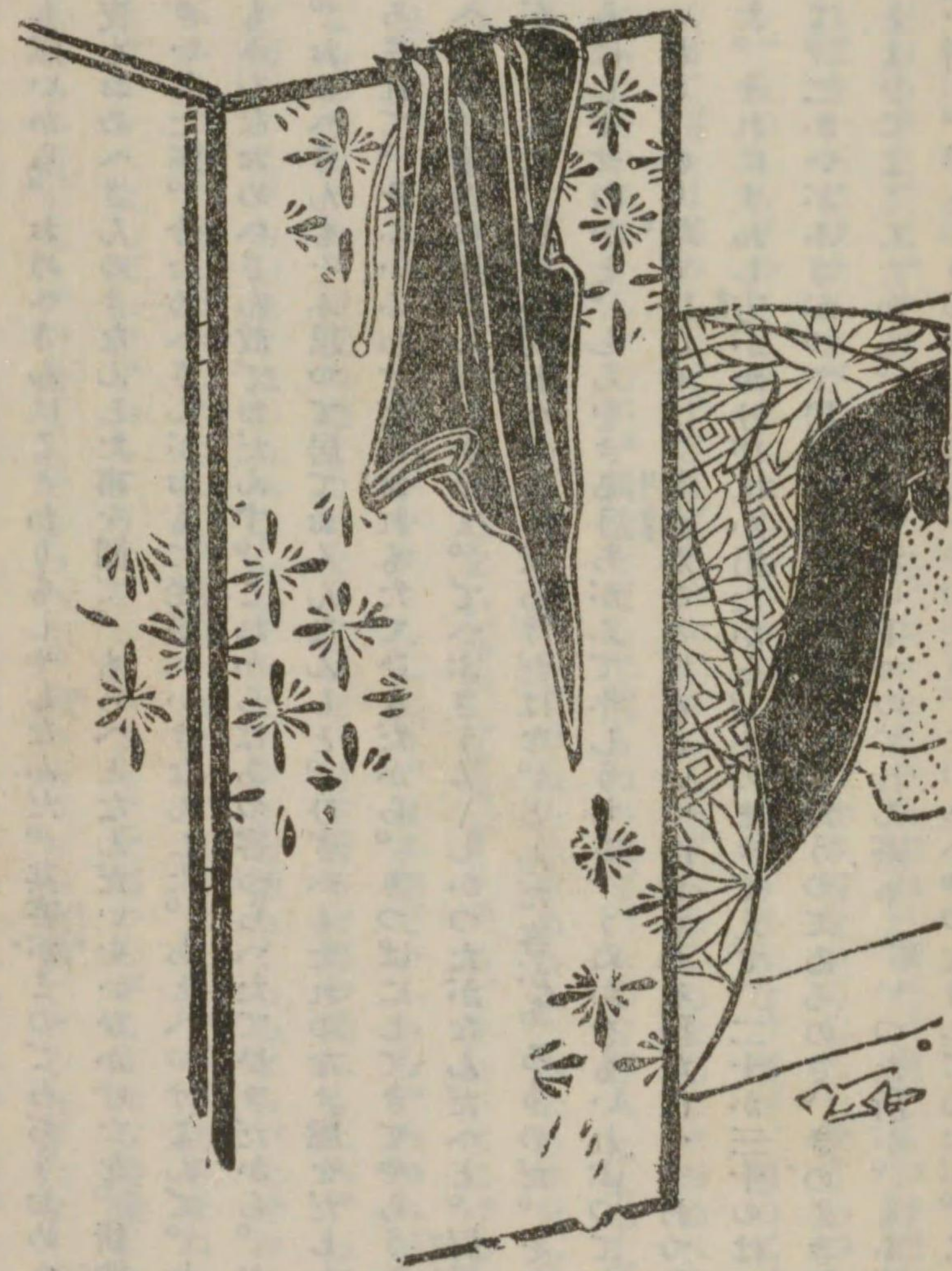
○發端

番所才兵衛がともし火は。堤八丁の漂冷ともいゝなん。五十間の砂利に青海波のさまを見せ。衣もん坂より大門へ入來る人を小舟と見立しは。こがれよとの心にやと面白し。四郎兵衛がかためし關のことぢも。そら行雁のたよりかと見れば心うかるゝ物から。家々の鬼籬の青き見わたせば。風にしらふる松原か。瓜音のかすかに聞ゆるも。胸ときめくわざなり。行かう契婦が提灯は。用水の桶にくらべ。駒下駄のからりくはならくの底までもひびき。釜のふたする赤鬼が心をもとらかすべし。けだしつまの七重八重にはうきおもひをつゝむぞかし。黒仕立は晦日に月のでぬすがた。女郎のまことをわがものにしたるにやとおかし。きのじやに四季のはなをさかせ。見世に夜の錦をかざる。下りいすといふ禿の聲。はや座敷々々もおさまるよとおもへば。いつのまに大門はとざしぬ。引四ツの拍子木せはしく。一度に見せを立鳥のひしはまぐりにやよびつれあつまるらん。さはげしけれど淋敷ものにおもひなざるゝ。更渡夜やあんま針。ねむそふな三下り。わけは聞へぬむつごとに明て行やむらがらす。かわい／＼の盛名代の客たいかみ入の間より小冊を出し見新ソリヤなんざんすへうらなひの本ならわつちに待人を見ておくんなんしおがみんす客客、まちやんなもんじやアねへ。けふ觀音の地内で見あつたからかつてきた 新わつちにちよつとおみせなんしナ客客、まちやこれは手めへたちのいろをするあなを書たものだ 新いやだねエつれへヨなんだかよんでお見せなんしへ客客、そんな

58/1

58
10

京傳醉画



かわをあらはす所だが。ぐつと平氣で。その客の胸ぐらをとつてひきよせ。モシおめへはんはうら見な人でおだんす。なぜわつちを此様にしなしたと云。なほ客はあきれておめへ氣が違やアしねへか。此さまアアなんのことはやかんしやくのめつきを尻ともおもはず。氣もちがふはづさ。何をかくしんしやう。宵から名代の客がおだんしたが。あつちへはゆく氣も無いから。おめへさんにことわりもしやしなんだ。其客がこのごろぢうおめへさんのことをせいていやしたが。今夜もおめへさんのきなんした事を聞て。もらへとなんだいをひかけたを。新造衆にいゝかげんにくるめさせて。おきいたが。今おめへさんがおもて坐敷へいきなんした。あとへつけこんで。わたくしをこんなにぶちんした。これもみんなおめへさん故でおだんす。これからはあの客づらへたてひきだから。おめへさんよびとげねばなりひせん。おめへさんもそふ思つて居ておくんなんしと。ひざへもたれのなき聲をだしかけたから。客は其一ツ句でぐつとこざされて。そふいふわけならおれもたてひきだから。りつばにしてきてやらうといふさいちうへわつちはねまきのまへをび。新造の床から來たかほで。てへぶさうんしかつたがなんだへと。屏風のうちへかほをだしたれば。その客がいふには。近江か聞ねへ。こう云わけだはな。とんだ客があるものだ。それはとんだ事わ。おいらんどこもいたみはしやせぬかと。しらをきるうちがふてへしうちさ。うぬがをいれぶつてをいて。いたみはしねへかもすさまじいねと。のり地ではなせば。美濃がなるほどこいつはおもしろ狸だはへ。わつちが二丁目のせけへもあじに成りやした。それにまわし方がかけびにか出たから。そのまきぞえて。二十か三十のはした金を。ない所からやかましくいつて。二かいがふさがつて居るから。わつちもとんだうつてゐるのさ。きのふきやうに用があるから。中の町までこいよびによこしたから。七ツまへから下モてれん茶やへいつた所が。もふ來て居る様子故。二かいへあがつて見た所が。手あぶりの火をあつちへやつたり。こつちへやつたりしてゐたが。こゝへ來なんしとまねくから。コレたいそうらしい。きゆう用たアなんの事だといつた所が。いゝへじつは用もねへが。あんまりあ

いてへからよびにあげんしたのさといふから。べらぼうめほんに用があるかと思つて。まじめなようを流して來た。いゝきせんじやアねへかといふうち。小ゆびのかみてまいてあるを。ふつと見付たから。コウてめへゆびをどうした。コレハ夕アはたて具をおろすとつて。やけどをしいした。ム、そりやあぶねへ事だ。薬でもつけたかと。わざとそしらぬあいさつをしたればモシへじつけふよびにあげたは。此ゆびのわけさ何をかくしんしやうわつちやゆびをきりんとしたと。平氣で云から。わつちもげつとしやくにはさわつたが。様子の有りさうな。事だと思つて。わつちもおなじく平氣で。ムウそれに付て用とは何のことだ。さればさ。マアもつとそばへおよんなんし。おめへも見なんすとをり。わつちも夜具をしねへけりやアなりんせんが。新造をだして問もねへ事で。みんな客人にも手をおわせたから。つえにも柱にもと思ふは。まだ中橋の客人ばかりでおざんすが。つねくおめへとこふ云わけをしつていやすから。こんどゆびを切つたら夜具をしてやらうト。なんだいをいひかけて。ぎりつめてきれいににげるあいさつたから。ふびんと思つておくんなんし。夜具のかはりにゆびをきりんとしたと。なき聲でいふから。わつちがいふにやア。コレわりやけがらはいいこんじやねへか。何屋の誰とたいそうな名を。付て居る女郎の様にもねへ。わづか五十か六十の夜具のかはりにゆびを切るとは。あんまりはかねへこんじやうだ。ゆびを切るくらゐなら。なぜおれがところへいつてよこさねへ。たとへかけが殘て居る程のしぎなれば。高利の金をかりてなりとも。そうはさせねへあんまりわりやアおれを見くびつたな。コレへなんぼしやツつらがうつくしくつても。女郎のくびにほれる美濃じやアねへ。心いきにこれほどでも。おもしろい所がありア。命でもやるわへと。例のわつちが流儀で。くちぎたなく情のある文句をだしかけた所が。女郎のいふには。ホンニそふいひなんせばわつちがはやまつたはわるかつたが。それもおめへの身のうへをさつてかばう心からさ。かならずにいと思つておくんなんすな。そんなら此事をいつてやつたら。つがふもしてくんなんす氣でおざんしたかへと。云から。しれた事だどふでもする氣だわいといつたら。又ソリヤほん

の事かへとくどく聞から。べらほうめしれた事だわといへば。聞きねへホンニうれしい心いまでおざんす。そんならモウあさぎの頭巾をぬいておめにかけんしやうと。小指の紙をすつぽとぬいて見せた所が。ゆびはなんの事もなく。サア今いひなんした通り。ほんに實があらば高利とやらの金をかりてなりとも。こんとの夜具をしておくんなし。それができねば今云通り。あの客人にゆびを切つて夜具をしてもらわねばなりいせん。かたわものにするもしねへもおまへの心しだいでおざんすと。いはれた時は。わつちもぐつとへこんで。ア、あんまりつよみをいわねばよかつたと思つたが。こいつはこゝでへこんでは心を見られるト思つたから。ム、それだてめへの狂言がきこえたわへ。此ごろおれに秋風だから。けへりがけのだちんに。りづめて夜具をさせて。突ださうと云あく心ンか。それとしつてもいひかけられたしやうがにやア。たてひきだこんやぢうに夜具をこしらえてやらう。しかしそれにきれ文をそへてやるからそうおもへ。それが出来たらモウおれに用はあるめへ。早くけへりやアがれ。そばに居るもけがらはい。とふみのめした所が。おめへもくちのやうにもねへ。きれる人に夜具をしてもらうやうな女郎もおざんせん。そんならあつちの客人に指を切てやるまでも無く。おめへときれば得心だから。見事こしらへてくれんす。夜ぎはびらうどにしやうか。にしきにしやうか。ゆるりとあそんでおいでなんしと立てゆくから。勝手にどこへでもうしやアがれと言ながら。うちかけのすそのうへへあぐらをかいたものだから。ゆきたくてもゆかれねへはさ。それからわつちか紙入の中から。例のきしやうを出して。すでに火ばちへぶちこんで。くさぶえの下坐て物がたりにならうといふところへ。茶屋の女房がとんで来て。ひつたくつてまきおさめ。かならずはやまつた事をなさりやすな。これはみんなおいらんが。おまへの心をひいて見る狂言の大帳さ。夜具はすつぱり中橋の客人の方から出来てきて。今晚敷ぞめてござりますと。跡は笑になつてしまつたが。モシなか／＼新ン手をだすもんだねとはなせば。なる程あの傾も極の字が黒くなりやしたと。いづくも女郎買のはなシほどのりくるものは無く。二人は目を皿の様にして。はなしやせべくも

なし。近江がモシ美濃さん其指で思ひだした。わつちがゆびの中買をした咄をしたんだがわつちが。しつて居る江戸がみに文車といふものがあるが。神田へんの客に犬悦といふものが有つて。さる座敷もちにこの春からなじんでゆくが。いつても此文車をつれてゆき／＼した所が。いつしか文車に此女郎がほれていろ事になつたのさ。犬悦は其事をゆめにもしらねへて居るが。此ちう此客が口舌のうへてゆびを切レといつた所が。すのこんにやくのとのがれたがるあいさつだから。ぐつとあつくなつて。おれもいひかけたからは。きらずばモウゆくまいといひだしたが。此客がゆかねへりや文車もいろができねへから。女郎に云には。コウ手めへこんどゆびをきらねへりや犬悦さんがきれるといはつしやるから。こゝはおれがためをおもつて切てくれろと。頼た所が。女郎は文車にほれて居るといふものだから。なるほど犬悦さんに切る氣はないが。おめへに切るまできりんしやうととく心して。きるといふにきわまつた所が。文車がわつちが所へ来て相談するにやア。モシ近江さん。こんどこゝ／＼云事がござりやすが女郎もじつが有つてきらうといひやすが。こゝをおめ／＼ときらせてはわつちが。あんまりあゑがござへせんから。こゝがおめへのちゑをかりるばかりるのだが。指をきらせず。丸くおさめる工夫はあるめへかといふから。なる程そこにいゝ案じがあるめへものでもねへが。其客もそふいふ云が／＼なりなつては。きらずはせうちしめへが。こゝに一ツおもしろい案じがある。どうぞ其女郎に金を五兩ださせねへ。それが狂言のすぢになる。これはおれがしつた廓のうちの者だが。さる新造と色事をして居る所が。其新が大ぼれにほれて。指をきらうといつたを。きらせてはくひつきになると思つて。そうするにもおよばねへと。にげ口土をいつて置た事をちらときいたが。こいつにのみこませて其新造にゆびをきらせて。身がはりにたてるしゆこうはどうだ。此地いろめがひんこうといふものだからゆびが五兩になれば。此物まへうかみあがるから。どんな事でもする氣だ。其新造もほれてくるゆびだから。ほれた男のうかみあがる事なら。それとしらずにきつてもしんじつのとどくといふものだ。さすればつみにもならねへ。そこで其ゆびを犬悦大じんに

あてがへば。公こうがはたらきも情じやうも見えるといふものだが。こいつほどふだといつたら。それは妙まう按あんてござりやす。ほんなら五兩と其指とひきかへにしやしやうと。うれしがつてかへつた。それからわつちが其地色にのみこませて。とうとう新造にゆびをきらせて。代金五兩をとつてやつて。犬悦が方へはいつくかにいよく切るからこいと。女郎のほうからよびにやらせて。来た所がゆびきり道具をとりあつめて。おさへてはざしきの新ぞう。きりては文車。犬悦が見る處でゆびのかわをすこしかけて切た所が血ちがすこしする。かねて例れいの身がはりのゆびを床柱とこばしらへくつつけてをいて。ヲヤゆびがどこへかとんだとそこをさがし。とこばしらに付ているゆびを見付だしたかほで。うまく一ツはい身がはりをくわたさ。犬悦もめのまへでされた狂言だから。すつぱりかゝれて。そのうへならず其指をさけにひたしてのんでしまつたのさ。此坐敷もちも此しんぞうもひとつ内の女郎だが。二かいでさへ。此狂言をしらねへて此ごろわつちらがうちでふたりゆびをきつた。女郎しゆがござんすと。わつちがまへでうはさするをしらねへてつてしまつたが。指をきつた新ぞうが。虫がしつたそで。かの地いろにいふにやア。わつちがゆびヲどふなんしたもつて来てみせなんしといふだして。わつちはこまりやしたとはなしたが。それからどふしたかあとはきかねへ。なんと女郎けへもこわへせけへになりやしたと。五分もすかぬ手がらばなしの。あとだれてくさぞうしなら。ゆめさめさめやうと云ばを。ふたりはようくねつきければ。いびきの音とからすの聲の下坐にて。あかつきのまきはあきぬ

○ある夜此二人のものがたりを。壁かべひとえこなたにてよもすがら聞ぬ。まことにはくじやうの世の中。これと思へば女郎のうそも客のいつはりよりいづるところ。きやくほどうそはつかぬけいせいの一旬よく此じやうにかなひ。ぐわんそ花紫が歌に

たのみてもよそに心をかけはしの
わたりくらぶる人ぞうらめし

と詠じけるもむべなりと。こゝに書捨て。川竹の流れのたき津瀬に。その取をそゝぎぬ

夜半の茶づけ大尾

此の茶漬は、川竹の流るる津瀬に、その取をそゝぎぬと詠じけるもむべなりと。こゝに書捨て。川竹の流れのたき津瀬に。その取をそゝぎぬ

58
11